

平成27年1月1日

防衛大学校同窓会機関誌

Vol.22

小原台だより

「小原台だより(冊子)」最終号
～電子版「小原台だより」に向けて～



第62回開校記念祭 (平成26年度)

同窓会ホームページ URL : <http://www.bodaidsk.com/>

C O N T E N T S

■27年新春の言葉	3	■壮年！組織を支える	
■学校長に聞く 新たな高みへ向けて	4	小原台「少林寺拳法」～「強靱」な陸自を創る～金沢14連隊長を経て	32
■新副校長(企画・管理担当)に聞く 防衛大学校副校長(企画・管理担当)に着任して	6	小原台「水泳」～艦艇勤務「駆逐艦ウォーク艦長」～護衛隊群司令として	34
■新幹事に聞く 指導官考	7	小原台「海トレ」～「救難パイロット」～眼前の試練～今をひたむきに!	36
■新防衛学教育学群長に聞く 楨イズムの継承と國分イズムの実践	8	■桜華会の今 「女性も男性も輝く社会」の時代において	38
■会長対談集 渡邊啓二防衛大学校副校長との対談	9	「木更津からこんにちは♪」	40
訓練部長 伊藤弘海将補との懇談	11	「志を同じくして、小原台に学ぶ後輩達へ」	40
総合情報図書館長 武田康裕先生と共に!	13	「卒業後を振り返って」	42
■防大生とOBの交流 長き濃紺の線 チャレンジする事	15	■開校記念講演 OPCW初代査察局長 秋山一郎元陸将補	43
将来の部隊指揮官への応援メッセージ	16	■今人生、男盛り(20期) 地形を見て、過去と近未来を描く	47
小原台でやるべきこと「防大生活4年間の使い方」	17	一地方議員として	48
5期毎のステップアップ	17	いまだ現役の心意気!	49
■指揮官(幕僚)としての心得(変わる勇氣・変える決意!)	19	「やりたいこと」、「やらねばならないこと」	50
■留学生の今 タイ王国同窓会支部会長の交替	22	■同窓生アラカルト アルハムブラの思い出	52
小原台における防大生活	23	二人展(同期で開催した絵画・陶芸個展)	53
同期生との絆	24	■校友会活動(運動系・文化系)	55
今後の抱負(日韓の友好の維持への道)	25	■期生会だより	59
日本の様々な人達との交流	26	■連絡事項 防衛大学校同窓会ホームページのリニューアルについて	60
■防大58期生に聞く 只々歩メバ至ル	27	機関誌 電子版「小原台だより」投稿のお願い	61
兵の強弱は、士官の精否に由る	28	同窓会本部移転のお知らせ	61
自覚	29	平成25年度防衛大学校同窓会決算書	62
「空の防人」を目指して	30	会費納入状況、会費納入のお願い	63
		同窓会名簿管理に関するお知らせ	64
		期生会会長・代議員名簿	65
		同窓会本部・支部等の役員紹介	66

迎春

27年新春の言葉

防衛大学校同窓会長
永岩 俊道
(15期・航空)



同窓会会員の皆様、ご家族共々、清々しい新年をお迎えることとお喜び申し上げます。会長就任後2年目になりました15期の永岩です。今年も15期から24期までの同窓生有志によって構成されました同窓会本部スタッフと共に、各支部、各期生会等との連携を図りつつ、現役とOBとの絆をより一層深めながら、一生懸命、同窓会の発展に取り組んでいるところであります。今後とも宜しくお願いします。

さて、昨年7月3日、斎藤防大同窓会前会長及び永岩同窓会会長、折木同窓会副会長の3名は、防衛大学校同窓生を代表して総理官邸にお招き頂き、非常に多忙な安倍総理と約一時間余りにわたり、会食及び懇談の時間を頂戴するという貴重な機会を得ました。冒頭、総理から、我が国の安全保障の最前線で活躍する防衛大学校同窓生全員に対して、感謝と敬意のお言葉を頂きましたことをここに同窓生の皆様にご報告申し上げます。

今年度のホームカミングデーですが、今回は、第15期生がその恩恵を拝受致しました。当日卒業式典に集まった第15期生は195名、家族157名の総勢352名でした。國分学校長には学校長式辞の冒頭、「43年前の卒業生である第15期生の先輩方が、これから旅立つ若き後輩たちのため全国から駆けつけてくださいました。ここに参集された先輩たちは、戦後の日本を陰で支え、今日の平和と安全の礎を築いてこられた縁の下の勇者であります。青春の原点、小原台にお帰りなさい。第15期生とご家族の皆様には拍手をお願いします・・・」との思いもかけないお言葉を頂戴し、同窓生の中には感極まる者もありました。有り難いことです。続く式辞の中で國分学校長は「防大の教育、訓練、研究の将来のあり方を考える新たな高みプロジェクトを、学校長自らヘッドとしてスタートさせ、防大の20年後、30年後を見据えた力強く野心的な試みが動き始めた」ことを披露されました。同窓会本部と致しましても、國分学校長の新たな高みを見据えたプロジェクトに対しまして出来得る限りのご協力とご支援を申し出ている所です。

一方、昨年の防大生の不祥事に関する一連の報道等には、まさかと思いつつも、同窓生にもその責の一端有り

と心を痛めている所です。しかし、「悪習など伝統にあらず!」、国の役割に任ずるといふ崇高な使命に改めて思いを致し、学生諸官には、自らの手で襟をしっかりと正して欲しいと思います。あるべき姿に戻せるのも、結局、自主自律、現役学生諸官同志にしか出来ないことです。学校長及び職員の皆様にはご心労をお掛けしますが、宜しくご指導のほどをお願い申し上げます。

さて、新春にふさわしい素晴らしいトピックをひとつご紹介いたします。タイの防衛駐在官からの情報ですが、昨年10月1日付けで、同窓生のタラナット・ウボン海軍大尉(23期生)が海軍参謀長に、ジョム・スンサワン空軍中尉(26期生)が空軍参謀長にそれぞれ就任されたそうです。折しも、安倍政権の外交戦略は、地球儀を俯瞰し、積極的平和主義(proactive contribution to peace)を推進しつつあります。そのような中、我が校の卒業留學生が国軍の長として活躍する時代が来たのです。昭和33年から始まった我が校の留學生制度の先見性が高く評価される所です。留學生制度の更なる発展に期待致したいと思っております。

最後に、昨年末、同窓会本部を移転致しました。防衛省から歩いて1分の好立地で、各期生会の会合やフォーラム等にも活用できる会議室スペースを保有しています。同窓生なら誰でも活用可能です。加えて、同窓会ホームページ(<http://www.bodaidisk.com>)を全面的にリニューアル致しました。まずアクセスしてご覧頂きたいと存じます。各期生会、各支部、校友会等の絆を更に強くするため、「同窓会コミュニティサイト」を是非ご活用下さい。ちなみに、何事も「まず一期生から」ということで、一期生のコミュニティサイトは既に立ち上げ済みです。

(参考) 防衛大学校への留學生の状況：

本校では、昭和33年6期生として受け入れたタイ王国をはじめ、現在までに、シンガポール、インドネシア、ベトナム、マレーシア、モンゴル、大韓民国、フィリピン、カンボジア、東ティモール、ラオスそして東欧のルーマニアの計12カ国から約400名の留學生を受け入れています。ちなみに、タイ王国の同窓生は180名にも及んでいます。現在の在校留學生は9カ国112名です。

新たな高みへ向けて

防衛大学校長
國分 良成



一昨年、防衛大学は60周年の還暦を迎えた。本校はすでに日本社会における欠くべからざる社会的存在としての地位を確立している。そのことは、学校長に着任以来、日常的に肌身に感じている。「防衛大学校長」という肩書を目にすると、敬意からだろうか、出会った多くの人の背筋がピンと伸びている。それは必ずしも年配の方々だけではない。そして誰もが本校に強い関心、というより興味を示す。ここに至る過程は簡単ではなかった。「自衛隊」や「防衛大学」という言葉の響きに、直感的に忌避的反応を示す時代も長かった。今日のような社会的存在に引き上げることができたのは、陰に陽に防大の発展のために尽力された教職員と学生のおかげであり、そして何と言っても卒業生たちが幹部自衛官として築き上げた努力と実績である。

そうした蓄積の上に我々は何を成すべきか。答えは簡単である。歴史の中で築き上げた重みを反復しつつ、それに押しつぶされることなく、それを基礎にさらなる新たな高みを目指して歩みを続け、次の世代にその意志を託すことである。今年から正式に動き始めた「新たな高みプロジェクト」は、そうした思いを形に変えるための全校あげての野心的な試みである。学校長である私自身が構想全体のプロジェクトリーダーとなり、研究と教育に関する具体的方向性を武田康裕総合情報図書館長をチームリーダーとする検討委員会でまとめ上げ、それに伊藤弘訓練部長が中心となってまとめ上げた訓練指導案を合体させる形で進行している。

防大には多くの資産がある。陸・海・空自衛隊の将来の幹部候補を統合的に養成できること、理系と文系そして大学院まで包含する総合大学としての実質を備えていること、訓練・学生舎・校友会などの活動を通じてリーダーシップとフォロワーシップを学ぶこと、知・徳・体のバランスを備えた人材を輩出できること、そして卒業生間の強力なネットワークがあること、等々。それらの資産を有効に生かすには、時代の要請に合わせた形の組織と制度を作り上げなければならない。では、防大に課された時代の要請とは何か。

その第1はグローバル人材の養成である。着任以来、私は各地の自衛隊組織を訪れているが、そのたびに卒業生にもし防大生に戻ったら何をしたいかとの質問を必ずぶつけている。誰もが共通に口にするのが、英語を勉強

しておけばよかったということである。米軍との連携だけでなく、世界の軍隊との様々なレベルや形での安保協力は拡大の一途であり、PKOなどの国際舞台での活動も急速に増えている。自衛隊に対する世界からの期待と要請も大きくなっている。陸・海・空を問わず、今後とも幹部自衛官であれば必ずや国際関係の場面に遭遇することになる。その点で、英語能力はコミュニケーションのツールとして最低の要件である。現在学内では、TOEICの一定点数を卒業要件とする可能性について検討中である。

防大には多くの留学生が在籍している。東南アジア諸国を中心に研究科・本科・日本語研修を含めて約150名の留学生が長期滞在しており、国内の一般大学を含めても最も国際的に開放された大学といえるだろう。また、防大生も第3学年を中心に約40名が毎年海外派遣されている。これらをさらに拡大すると同時に、学生の国際化へ向けた制度化が不可欠となる。このような基礎を前提に、防大ではバラバラに配置された国際業務を一つに集約させた国際交流センターの設置へ向けて検討を重ねている。

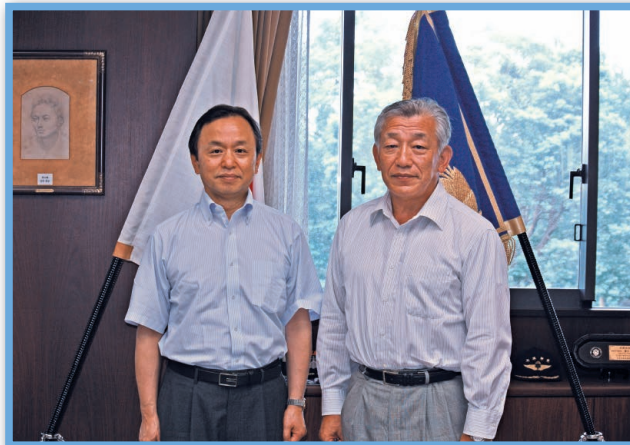
第2はプロフェッショナル人材の育成である。近年、本校において保険金事案等、様々な問題が発生している。学生舎生活を中心に学生間指導が原則であるが、モラルとコンプライアンス（法令遵守）の欠如が目立ってきている。仲間の非行行為に目をつぶる傾向もある。これらの克服のために指導を徹底するとともに、訓練部だけの責務とすることなく、学科教官や事務官も連携して「すべては学生のために」取り組むことが必要である。また、幹部自衛官としての豊かな人間性の形成という点で、リベラルアーツ（一般教養）の意義を再認識すべきである。日本自身を説明できないようでは国際的な自衛官として未成熟である。日本の文化、社会、歴史に対する深い教養と洞察が不可欠であり、こうした目的のために教養教育センターの設置を進めている。

第3は新たな研究・教育分野の開拓である。今日、わが国を取り囲む国際情勢は戦後においては未曾有の緊張状態にある。領土・領海・領空、大量破壊兵器とミサイル開発、宇宙、資源・エネルギー、環境、災害、感染症等々の諸問題がそれである。これらは協力の場となりうるが、依然として国家主権の壁の高いアジア地域の現状では容易ではない。また、ITの発達自体は歓迎すべき

ことだが、それとともにサイバー攻撃のような深刻な問題も生まれている。このような現実を踏まえ、防大では防大でしかできないような研究施設（仮称グローバル・セキュリティ・センター）の設立を考えている。防大には多くの利点がある。本科と同時に研究科（大学院）もあり、理科系と文科系の両方を備え、国際的な共同研究にも着手している、等々。もちろん、それを実現させるまでの課題も多い。最大の課題は言うまでもなく資金である。現在の国家予算だけでは不可能である。いかに外部資金を獲得するか、これについても工夫が必要である。

以上、現在防大が進めている「新たな高みプロジェクト」について簡単に説明させていただいた。正直に言えば、最初からその完璧な見取り図があるわけではない。今後とも試行錯誤を繰り返しながら、着実に前進させることができればと思っている。その際、卒業生による様々な形での声援、支援、提案は貴重であり、防大同窓会の積極的なご協力をお願いする次第である。

< 学校長と同窓会長の対談 >



同窓会との緊密な連携を保ちつつ！

< 平成25年度同窓会講演会・懇親会における学校長 >

(平成26年3月15日(土) 明治記念館にて)



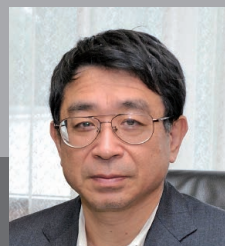
< 講演会 > 同窓生に講演「中国情勢と日中関係」



< 懇親会 > 同窓生と美酒に酔い！校歌を歌う「海青し〜」

防衛大学校副校長(企画・管理担当)に着任して

防衛大学校副校長(企画・管理担当)
石塚 泰久



私は、7月25日付で防衛大学校副校長(企画・管理担当)に着任した。私は、内局採用だが最初の課長職が教育課長(今の人材育成課長)だったせいで、防衛大学校の仕事をするのはそれ以来10年ぶりということになる。今回は、防衛大学校勤務ということで学生や諸行事など身近に感じながら勤務をさせていただいている。

3カ月ほどたったところで印象に残ったことを述べさせていただくと、着任してすぐ部外講演でマイヤーズ元米国統合参謀本部議長の講演があり、引き続いて外国からの留学生も含めて8キロ泳ぐ遠泳がありで驚いた。この二つの行事は、学生が知力・体力それぞれについて贅沢な環境にいることを示すとともに厳しくその研鑽に努めていることを象徴的に示していると思う。

また、10月22日には本同窓会の会議が防大で行われ、学生のみならず、OBが現役を積極的に支援している姿も目の当たりにすることができた。

また、この間にも、ASEAN次官級会議の出席者の防大訪問、東チモール政府関係者の訪問、韓国メディア関係者の訪問など、多数の留学生を受け入れている防大ならではの国際性の豊かさを実感する行事が続いた。わずか3カ月ほどでこれほどの行事があるのも、我が国唯一の士官学校ならではといえると思う。

また、10年ほど前に教育課長をしていた時と比べると防大の施設は驚くほど良くなっていて、見学者がよく記念撮影をしている姿を見かける。私自身、教育課長時代アナポリスの海軍士官学校、コロラドスプリングスの空軍士官学校を訪問したが、こうした学校と比べても遜色なく、まさに士官学校としての記念撮影にふさわしいものになっていると思う。

一方で保険金詐欺事件に見られるように、学生の一部に残念な点も見られる。

全体としては、東日本大震災以降の自衛隊に対する国民の高い評価等を受けて、学生・教職員・OB等が一体となって幹部自衛官の育成にふさわしい環境を作っていると思う。

ただ、改善すべき点も多々あると思うので、学校長の指導を受けながら私なりにできることをしていきたいと思う。

最後になるが、教育課長時代の思い出をひとつ紹介したいと思う。当時の小泉首相が首相として初めて防大卒業式の訓示をすることになり、担当者として官邸との事務調整の任にあたった。これまでとは異なり、総理自身が手を入れられた素晴らしい訓示がもたらされた。その中で、論語の言葉を引用され、当時の自衛隊の状況を踏

まえ学生に、「人知らずして慍(いきどお)らず」と論された。今、自衛隊の震災等での様々な活躍を知らない人はいない。けれども「人知るとも驕ることなかれ」ではないかとも思う。自らを自戒しつつ、同窓会の皆さんの力も借りつつ防大のためにがんばっていきたいと思いますのでよろしくをお願いします。



本館内から見た時計台

指導官考

防衛大学校幹事

陸将 森山 尚直 (26期・陸上)



平成26年8月5日付で防衛大学校幹事を拝命した防大26期森山陸将であります。どうぞ宜しくお願い致します。着任した当日、小原台からの東京湾の眺望に感動し、36年前の着校時の感動を思い出しました。「海青し太平の洋、そびえたつ若人の城」、まさに初心に帰った気が致しました。

現在、防衛大学校では、皆様ご存知の様に、4個大隊とも8人部屋の新学生舎で生活を行っています。しかしながら新学生舎を設計した当時は、予算定員が460名の時代であり、その後、平成20年から480名となった事、約110名の留学生が学生舎で共に生活している事及び女子学生専用の部屋を確保する関係から、各部屋は約9～10名の状況で、4月の1学年の着校時には、10名以上の部屋等も生起しています。この様な中において、各学生は、「学生舎は、仲間と共に己自身を鍛える道場である。」との姿勢で愚直に努力しています。

以下、私が、現在取り組んでいる学生舎に関する事項について述べさせて戴きます。

指導教官の指導の原点は部隊

現在、防衛大学校には、約270名の自衛官が勤務しています。その内防衛大学校出身者は、約200名です。防大の出身期別は、26期から55期にまで亘るわけですが、この間、8人部屋、4人部屋、2人部屋、4人部屋、8人部屋とそれぞれの時代を経ており、各指導教官もそれぞれ、その当時の部屋編成を、学生としての原体験としています。このため、指導教官毎に学生時代に学んだ、理想とする4学年像、理想とする指導教官の像に違いがあるのは当然だと思っています。しかしながら、申すまでもなく、指導教官は、自分の学生時代の4学年像等で指導するものではありません。あくまでも卒業後、任官して部隊で勤務し、その経験から学んだ理想とする初級・中級幹部の姿から、防衛大学校の学生として如何に在るべきかの視点で指導するものであると思っています。

考えさせる事は補導の方策

自主自律を基本とする学生舎の生活において、学生の発意による学生舎におけるルール等を尊重することは、極めて重要であります。敢えて申すまでもなく、その事によって、学生はリーダーシップも含め多くの事を学び、将来の幹部自衛官として必要な資質を育てることに繋がるからです。

しかしながら、学生に考えさせ、その発意を尊重する

ことは、その発意した事項が、学生舎生活における目指すべき方向性と合致している場合でなければなりません。学生に考えさせる事は、在るべき方向に補導するための手段であり、「学生の発意であるから。」との理由で、全ての学生案を採用したとすれば、それは、考えさせること自体が目的化し、指導教官の思考は停止していると思っています。

私も含め、指導教官は、「学生から多くの事を学ぶ機会を戴いている。」との姿勢で、より一層幹部自衛官としての修養に励まなければならないと思っています。

前途有望な青年をあずかる畏怖の念

我々幹部自衛官は、在るべき後輩の育成との視点で日々その職務にあたっていますが、「現在の在校生の中から、必ず将来の日本の防衛を担い活躍する幹部自衛官が輩出される。」との現実を直視した場合、本来大きく羽ばたくはずであった有為な人材が、己の未熟な指導により、違う人生を歩く事になるのではないかと。未熟な己がこの様な大任の職務に付いて良いのかとの自問自答が必要だと思っています。そしてこの謙虚な畏怖の念こそが、防衛大学校の組織を最大限に発揮するとの原点につながると思っています。國分学校長が言われる「全ては学生のために」を具現化すべく、拳校一体となり精進する所存です。



「武」のモニュメント "国の護り"

楨イズムの継承と國分イズムの実践

防衛学教育学群長（同窓会小原台事務局長）
空将補 引田 淳（31期・航空）



平成26年6月22日、3年間の米国防衛駐在官勤務を終えワシントンDCをあとにし家族共々帰国の途につきました。帰国翌日付けで防衛大学校勤務を命ぜられ既に半年が過ぎようとしています。この間、新たな組織で初めての経験に毎日を追われるように過ごしてきました。「昨年今頃は何を？」と、たまに日記を見返すことがありますが、それを読むにつけ国際情勢の変化とその速度に驚くとともに”Time flies!”を痛感しています。

着任後、学生教育の原点に立ち返るべく防衛大学校初代校長横智雄先生の「防衛の務め」を再度読み直すことにしました。「広い視野」、「科学的思考」、「豊かな人間性」、「理性ある服従」、「バランス感覚」など防衛大学校学生の原点である楨イズムを27年ぶりに再確認し学生教育への思いを新たにしました。時代は変わり防衛大学校も60年を超える歴史を刻んでまいりましたが、将来の幹部自衛官となる学生の目指すべき姿や修学の基本的考えは全く変わることなく、「防衛の務め」は60年経った今でも全く色褪せていないばかりか、様々な課題に直面する防衛大学校にとって、自衛隊の精神的拠点として更に輝きを増しているように思います。

防衛学教育の長として学群全体を取りまとめるだけでなく、自らも防衛大学校教授として学生教育に直接携わることができるのも非常に貴重なことです。防衛大学校では次世代の自衛隊幹部に要求される資質を向上させるため、新たな高みを目指して様々な具体的項目が検討され実現に向けた取り組みが進んでいます。教育においても英語教育のほかに、サイバーに関する教育の検討が進められ、防衛学教育学群において来年度よりサイバー戦に関する基本教育を実施するための作業を進めているところです。既に闘いが繰り広げられているサイバー空間ですが、サイバーに関する基礎知識を教育するとともに、学生に危機意識を持たせることが重要であると考えています。そして、研究科等とも連携をして将来はサイバーに関する専門家を育成することも念頭に入れています。サイバーに関する人材育成は防衛省のみならず国家的課題でもあり、その意味で先陣を切ってこの分野に一步踏み出すことは大きな意味があると考えています。将来的には更に教育内容を拡大するプランもあり、防衛学教育学群がリードする形で全体を牽引できれば幸いです。

学生指導については学校全体で取り組むという大方針の下、様々な枠組みがあるのに加え、防衛学教育学群は自衛官として、卒業生として後輩学生に対する格別な思いも加わり訓練部や指導官等と協力をしながら積極的に

取り組んでいます。特に自衛官としての豊富な経験を有する教官を多数抱え、学生指導のご意見番として重要な役割を果たしていると自負しています。私も授業や校友会活動などを通じて学生の声を直接聞く機会がありますが、非常にしっかりした考えを持っている学生の存在は本当に頼もしく感じます。一方で昨今の様々な事案に接すると本当に残念でなりません。楨イズムや学生綱領など学生の精神的な拠り所は現在も存在していますが、学生の心にどこまで根付いているのか疑問を感じざるを得ません。表面的な合い言葉としか捉えられていないとすると、学生の心構え、探究心の不足と言うよりも、それを十分に教えてこなかった指導者側にも責任があるかもしれません。学生の生活を見ていると本当に忙しいと感じます。自分が学生の頃と較べ、学位が授与されるようになったり各種行事も増える等生活環境が大きく変わり、時間に追われるレベルが高くなったように感じます。同時に、学生指導要領や学生舎生活も時代とともに変遷を遂げてきました。そのようなうねりの中、指導官との対話、学生間での意見交換など人と人との心の触れ合う教育・指導が変化に着いてこれず、学生の基本精神をどこかに置き忘れてしまったのかもしれませんが、そして学校教育や家庭教育の変化もあり、これまで以上に精神教育が必要になっているのかもしれませんが、いずれにしても、楨イズムや学生綱領の精神を改めて学生に対し丁寧に説明し直す時期にきているのだと思います。組織は常に見直して手を入れ続けないと衰退していきませんが、これは教育にも当てはまることだと思います。60年という歴史は何もせず積み上げられたものでなく、歴代学校長以下諸先輩の方々の汗と涙の成果であると思います。そして現在の我々に課された責務は防衛大学校の歴史のほんの数ページかもしれませんが、次の60年を築くために汗をかくことだと認識しています。その成果は我々の汗の量にかかっていると言えるでしょう。

直面する各種課題に全力で取り組むとともに、頭を垂れる稲穂達と格闘しながらも、社会の一員として高い健全性を有し魅力ある人間を、そして頼もしい後輩達を部隊に送り出すためにこれまでの経験を活用し持てる力を存分に発揮したいと思います。そのために、楨イズムを今こそ胸に刻み直しその精神を継承するとともに、國分イズムとも言える学生への深い愛情の実践を果たすべく学科教育、学生指導、訓練、校友会そして同窓会活動に精励してまいります。全ては学生のために。

永岩会長の防大訪問（平成26年7月25日（金））

永岩会長が防大を訪問した7月25日（金）午後、小原台は遠泳訓練に専心する1学年以外は部隊実習等で学生も少なく、猛暑の中、緑濃き校内は静まり返っていた。当日、國分良成学校長は御不在であったが、防大上層部の方々と同窓会との更なる情報共有を深めるべく、その機会を求めて会長は防大を訪れた。

渡邊 啓二防衛大学校副校長との対談



渡邊副校長は防大19期生として機械工学を専攻、引き続き理工学研究科を履修、「路外車両の走行力学」を研究分野とする工学博士として、研究者・教育者の立場から防大機械工学科の中核を担ってきた。学術論文においても、国際地盤車両学会において複数回の最優秀・優秀論文賞に輝いている。

また、研究者としてのみならず、システム工学群機械工学科長、理工学研究科教務主事、教務部長等の要職を歴任し、防大の教育運営・管理全般を掌り、今春から学生教育を主幹として学校長を補佐する防大副校長（教育担当）に就任されている。

永岩会長が副校長を訪れた際、屋外は熱波を感じるごとき猛暑であり、副校長との懇談冒頭、喉の渇きを癒すべく会長は卓上の飲物をグッと飲んだ。

副校長（教育担当）としての想い

<永岩会長>

旨い。これは、大変美味しい飲物ですね。（副校長から、その飲物が奥様お手製の「梅シロップ」と聞くと！）「まるやかに冷えた梅の味わい」が体に浸みわたりました。汗も引き、やっと、落ち着いて副校長のお話を伺う事が出来ます。まず、副校長に御就任になられ、学生教育に係る現在のお考えはどの様なものでしょうか。

<渡邊副校長>

御承知のとおり、防大のVice Presidentは3人おります。事務官出身の企画管理担当副校長、教官出身の教育担当副校長そして自衛官出身で訓練・訓育を担当する幹事です。この3人がそれぞれの出身で培われた識見を活かしつつ、学校長が主導される学校運営を補佐するのです。

学校長は日頃から『すべては学生のために～』と言われていますが、この御言葉はシンプルにして防大の学校運営の本質を明確に表しています。どうしても、各学校

職員は自らの職務に専念し、学生に対する思い入れが強くなる程、やりたい事は多くなります。私も現場の教官が「あれも教えたい。これも講義に加えたい。」という気持ちを持つことが痛い程、よく分かります。

また同時に、私自身、40年もの時が経ちましたが、防大の学生として小原台で青春時代を過し、学生舎生活、訓練等における経験を積む事が出来ました。お蔭さまで、学生の目線、体感も感じ理解することが出来ます。防大の卒業生であるが故の話易さもあり、学校運営にあたって適切なバランスを保つ上で潤滑剤と成り得る事もあると思います。学生のため現在最も大切な選択は何かという学内の模索にあたって、私の知見もお役に立てる部分があるのではと考えている次第です。

防大同窓会に期待すること

<永岩会長>

2万4千名にのぼる防大同窓生に望まれる事柄はあり

ますか。多くの同窓生、特に現役自衛官の職責を終えOBとなった同窓生の防大に対する想いを、同窓会長として強く感じているこの頃ですが～。

<渡邊副校長>

同窓生の方々をお願いしたいのは、『現在の防大がどうなっているのか。どのような方向性を持って努力しているのか』という事に関心を持って頂きたいという事です。

本年の開校祭記念講演にはノーベル平和賞を受賞した化学兵器禁止機関（OPCW）の初代査察局長であった秋山一郎さんにお話を頂ける事となりました。この記念講演では、聴講する学生達が、世界の平和と安定のために貢献する先輩の行動から、大いなる動機付けを頂く事が最大の目的です。

また同時に、秋山さん御自身にも、現在の防大について感じ取っていただける部分があると思います。すなわち、記念講堂、図書館、学生舎等の施設が一新した等、校内の風景インフラの変化もありますが、講演をいただいた内容に対する質問、国際情勢に対する関心度合い等における学生の姿を通じて、当世の防大学生の有する考え方、価値観そして気質に至るまで、学生達の姿そのものの中で変わった部分、変わらぬところをお気付きになる事でしょう。

秋山さんのみならず、多くの同窓生の方々に、このような現在の学生達の姿に関心を持ち、見守っていただければ幸いです。

<永岩会長>

同窓生でも現役の諸官は、担うべき任務を眼前にして母校の後輩達に思いを寄せる余裕もなかなか無いのかもしれない。先週、3学年航空要員の部隊実習激励のため空自の三沢基地に行ってきた。そこで、多くの各級部隊指揮官クラスの同窓生と会ってきましたが、みんな異口同音に実習学生に対する思い入れと卒業以降の活躍に対する期待を語ってくれました。

私自身、激励講話の中で、若い彼等に思いを伝えるため操縦桿に例えて、その握るControlを託すべく『You have control!』と呼びかけると、学生全員が『I have control!』と大声で答えてくれました。年甲斐もなく私も年若い防大生諸君への語りかけに熱が入りましたが、同窓生の現役防大生を見つめる想いは皆同じだと思います。

同窓生が防大を訪れる時・防大教育における相互理解

<永岩会長>

同窓生が防大を訪れる機会は、イベントとして2回ありますね。まず、卒業後約20年を経て、自衛隊の諸活動を支える中堅幹部時代にホーム・ビジット・デー（HVD）として、揺籃の地、小原台を訪れる。毎年、開校祭実施時期に行われ、昨年は37期生でしたが、自衛官人生の

過去・現在を見つめ、将来への想いを見定めるには大変良い機会だと思います。

もう1つはホーム・カミング・デー（HCD）。卒業後40数年を経て、全ての同期生が国防の任を終え、自らの人生全体を俯瞰する時期に母校を訪問する、大変、感動溢れるイベントです。今年3月の58期生卒業式に併せて、私達15期生のHCDが行われ、学校長には格段のご配慮を頂戴致して、同窓生一同、心より感謝・感涙しておりました。自らの人生において、防大の絆が如何に大きく大切なものか、改めて実感した次第です。

<渡邊副校長>

これらの同窓生が、その故地である小原台を訪問するイベントを防大としても大変重要な行事として捉えています。特に國分学校長は、国家防衛の任に就き、またその任を全うした同窓生に対する尊敬の念を随所に表されています。

今春の卒業式式辞においても『・・・43年前の卒業生である第15期生の先輩方が、これから旅立つ若き後輩達のために全国から駆けつけてくださいました。ここに参集された先輩達は、戦後の日本を陰で支え、今日の平和と安全の礎を築いてこられた縁の下の勇者であります。青春の原点。小原台にお帰りなさい。』と述べられ、私も同窓生そして学校職員として、大変胸の熱くなる想いがいたしました。

防大には学校に在職した職員（現役・OB）で構成する「武鬯会」という親睦会がありますが、その年1回の懇親会に学校長に御出で頂き、宴の最後まで参集者と親しく懇談をしていただきました。これも防大の学生を育成するためには、自衛官のみならず教官、技官、事務官等様々な出身の人達が支え合い一丸となって進む事の大切さ、また、その努力をされてきた方々への敬意に根差されたものと拝察します。

先般、防大1期生有志の方々が学校見学をされた際も、学校長は自ら御予定を変更され、1期生の方々との昼食会に臨まれました。この様に学校長の行動される原点には、組織を運営するためには、過去、現在を問わず関係者全てが共有する信頼と敬意が大切であり、それらを基盤とした相互理解こそ最も重要だとされる想いがあるのではないのでしょうか。

私も副校長として、「すべては学生のため」という言葉を共通理念として、学校職員そして同窓会の方々と相互理解を図っていきたくと考えております。

新たな高みへ向けて」プロジェクト

<永岩会長>

高みプロジェクトを推進するにあたって、同窓会で支援させていただける事項について、お考えをお聞かせ願います。

<渡邊副校長>

國分学校長は、高みプロジェクトを推進する会議において「学校長としてリーダーシップを取るが、個々の具体的案件を押し付けるつもりは無い。防大の学生を更なる高みにおいて育成し、時代の要請に答えていくために何が必要か皆で考えてほしい」と関係職員に言われました。

その後、関係者間における真剣な議論を経て、現在、概ね実施すべき項目と工程表が出来上がりつつあります。

同窓会におかれましても、防大のプロジェクト関係者と緊密な連携を取りつつ、防大卒業生の足跡等の整理にあたって御支援いただければ大変助かります。防大卒業

生の方々が築いてこられた足跡は、防大及び同窓生のものとしてだけではなく、広く日本そして世界共有の財産ではないかと私達プロジェクトに係る者は考えております。その想いは同窓会の方々がより強く持たれているものと拝察いたしますが、今後とも現在そして未来の防大生のため御高配を賜れば幸いです。

<永岩会長>

本日は、渡邊副校長とお話出来て、大変有意義な時間を過ごすことが出来ました。今後とも、防大同窓会をよろしく願っています。

前訓練部長 伊藤弘海将補（32期・海上）との懇談 （現第4護衛隊群司令）

**3学年部隊実習視察と日本周辺の安全保障環境****<永岩会長>**

先週、空自三沢基地に3学年航空要員部隊実習の激励で行って参りました。私の3学年部隊実習は昭和44年夏の百里基地でしたが、その直後に、部隊実習で御世話になった先輩がF-104戦闘機搭乗中に事故で殉職されたのです。

私の自衛官人生の前半期は、戦闘機パイロットとして飛ぶことに集中する日々でしたが、その厳しさを知った原点は、3学年部隊実習にあった様に思います。

<伊藤訓練部長>

会長が三沢基地に行かれた2日後に、私も学生の部隊実習視察で三沢基地に参りました。その際、F-2戦闘機にも搭乗する機会を得て、訓練空域で対領空侵犯措置の対処要領を現示してもらいました。南西域で海自の

OP-3等哨戒機が中国の戦闘機に異常な接近飛行をされましたが、想像以上に戦闘機による行動は緊張を強いられる任務である事が実感出来ました。

<永岩会長>

空自は昭和33年以来、2万3千回余にのぼるスクランブルを実施し、その過程で厳格な領空侵犯対処手順を確立し現在に至っています。

信号射撃に係る認識についても、数年前に日米中3ヶ国間の現役・退役高級幹部が参集したフォーラムで、トーマス・ファーク元海軍大将（元米国太平洋軍司令官）とともに、中国人民解放軍の幹部に話をした事があります。

状況により信号射撃を実施する場合においても、スクランブルした戦闘機は相手側の機体と並行して飛び、前方に向かって曳光弾を発射する事を、その手順を踏まえ詳細に説明しました。その際の接近距離も過度の刺激を

生じない適切な間隔を保つ事について言及しました。中国側がどの程度の理解をしてくれたか定かではありませんが、ミリタリー間においても各種行動の認識を整合させていく地道な努力が必要だと思います。

<伊藤訓練部長>

防大の学生達の実習を視察し部隊を訪れ、学生のみならず私自身が多くの事を学び体験する事が出来ました。三沢から北海道大演習場に移動し4学年陸上要員の訓練を視察しましたが、5日間に亘る連続状況下の陸上訓練を淡々とこなす陸上要員がたのもしく見えました。

陸海空の要員が共に教育を受ける防大ならではの訓練視察だったと思います。機会があれば、同窓会長には、陸上及び海上要員の訓練実習も激励していただければと思います。

<永岩会長>

陸海空自衛隊の統合運用を見越したような防大の陸海空要員を一同に集めた教育制度は大変な卓見だと感じます。同時に、留学生諸官の存在も大きな花を咲かせつつある様ですね。

が、そこで防大に留学した同窓生との出会いがありました。マレーシアの同窓生4名のうち2名（防大41期・42期）が歓迎夕食会に来てくれたのです。その一人は未だに日本語が堪能な陸軍少佐で防大本科のみならず研究科も履修したと聞き、思いは一気に小原台上に飛びました。

彼の話してくれたグローバルな同窓生の繋がりには興味溢れるものでした。「PKOでバングラデシュに派遣された際、どうも見たことのある東洋系の将校が居る。儘よとばかり、日本語で『何大隊にいた?』と聞いたところ、やはりモンゴルから防大に留学した同窓生だった。」と言うのです。

また、ペイルートに派遣された時は、各派遣国の将校の中に複数の防大同窓生が居て、現地で同窓会を開いたとの事でした。ペイルートで歌う逍遙歌も聞いてみたかったなと思います。

<永岩会長>

私も現役時代に航空支援集団司令官としてタイのウタパオ海軍基地に立ち寄った際、タイの防大同窓生20数名が歓迎会を催してくれて、大変感激した事があります。まさに、防大同窓生の絆もあらたな時代に入ったという感慨がありますね。

海外の同窓生間ではSNSのフェイスブック活用によって思いのほか交流が盛んなようです。実は、同窓会のホームページも本年から本格的にリニューアルをして、「防大同窓会 facebook」の項目を設けましたが、海外からのアクセスが多いことにびっくりしています。

21世紀における新たな同窓生の繋がり方を、防大に留学した同窓生が示してくれているのかもしれない。このような同窓生の拡がりの中で、防大同窓会も鋭意活動を進めていきたいと考えております。今後とも、種々、御高配をいただければ幸いです。

海外に拡がる同窓生の輪

<伊藤訓練部長>

本年2月に学校長がタイ及びベトナム両国を歴訪された際は、現地において防大へ留学した同窓生が、学校長を囲む宴に参加し大変感激すべき光景だったと伺いました。タイ海軍参謀長は防大出身で、空軍においてもそのトップにつき得る防大出身の人材がおられると聞いています。

本年6月に環太平洋士官学校長会議がマレーシアで実施された際は、私も学校長に随行させていただきました



盛夏！ 緑濃き本館全影

総合情報図書館長 武田康裕先生と共に！



1 図書館長 武田康裕先生を訪問

総合情報図書館長の武田康裕先生は、総合情報図書館の管理運営を主導する館長職のみならず、国際関係学科の教授としてアジアの安全保障に係る教鞭をとり、また、研究者として現代アジアが抱える各種課題と対策について研究・研鑽を続けている。永岩会長とは防大同窓会に係る関係と併せ、中国の覇権拡大に伴うアジア安全保障のリサーチャーとして交流があり、突然の訪問であったにもかかわらず、多忙なスケジュールをさいて総合情報図書館を案内していただいた。

2 総合情報図書館の歴史

防大における図書館の歴史は1952年（昭和27年）8月に保安大学校教務部内に図書課が発足したことから始まり、3年後の昭和30年に初代図書館が竣工し、以来何度かの改築・増築を経て、50年目にあたる2002年に防大50周年記念事業の一環として図書館が建設された。そ



して、2009年より図書館と学術情報センターが統合され総合情報図書館として現在に至っている。現在、蔵書数約60万冊、収蔵能力70万冊、約450席からなる閲覧室を備えており、名実ともに防大の教育・研究を支える中核となっている。

3 案内していただいた総合情報図書館

(1) 展示コーナー

丁度、図書館内において本年が第1次世界大戦100年目にあたるため、防大所蔵の大戦関連図書・遺墨を展示していた。当時、青島にてドイツ軍に勝利した日本軍は、戦利品や膨大な資料を持ち帰り、その中には約27,380冊の書籍も含まれていた。本展示では、陸軍士官学校を經由して防大に移管されたこれらの図書が展示されていた。

(2) 主要な図書館のコレクション

ア 戦略・戦術等の古典稀観本

18世紀に西欧においてオーストリア継承戦争、7年戦争に勝利し強国プロシアの礎を築いたフレデリック大王の戦術・戦略を記したフレデリック大王全集（全33巻）や紀元前4、5世紀のギリシャの将軍で歴史家、哲学者としても有名なクセノフォンの全集（1555年刊行の羊皮革）等、世界的にも価値の高い稀観本が収蔵されていた。

イ 遺墨（掛け軸）

圧巻であったのは、貴重書庫において収蔵される掛け軸であった。昭和31～45年にかけて取得した遺墨は、旧陸海軍軍人、文人墨客、幕末から明治にかけて活躍した人々の書が中心で、吉田松陰書幅（夏目漱石旧蔵）はじめ、勝海舟、山岡鉄舟、桂太郎、東郷平八郎、大山巖、児玉源太郎、乃木希典ほか90本が保存されている。

永岩会長が「私の故郷、鹿児島の大先達である西郷南洲先生の書はありませんか」と伺うと「はい、はい、有りますよ」とばかり書棚から大きな西郷隆盛の掛け軸が取り出され掲げられた。所狭しと眼前触れんばかりの距離にこれらの書が掛けられ、それらの書から発せられる気魂を四周に感じた。「書は人なり」とばかり、近代国家「日本」を造った志士、元勳達に囲まれている様な錯覚を覚えた。

「不撓不屈」「時」の書は、東郷平八郎のもの。書した時の想いは如何なるものであったかと時の流れを遡り考えれば、防人の故地たる防大に相応しい遺墨と思われた。



(3) 図書館内の雰囲気

防大が目指す知・徳・体のバランスが取れた全人教育を念頭におけば、学生舎、各校友会活動の道場やグラウンド等と並んで、古今の知識や知恵に触れ合う事の出来る図書館は、極めて重要な教育の場と言える。

武田図書館長は「国家の安全保障という社会的責任を担うに相応しい人材を養成するため、単なる知識の蓄積だけではなく、知識を知恵に変える深い教養と豊かな人間性を養う必要があります。総合情報図書館は、良質な学術情報の提供を通じて、学生一人一人の自分磨きを応援します。」と総合情報図書館の紹介の辞に記している。

館内の雰囲気は、その紹介の辞にある通り、防大教育の知の殿堂として落ち着いた雰囲気の中に、先人の英知に接し誘う場としての表情を有していた。

(4) 母校訪問と図書館の利用

現役時代の同窓生は自らの職責を果たすために多忙な日々を過ごし、勤務地も国内外の様々な地域に広がる。このために、卒業以降、小原台を訪れる機会もなかなか見出し得ない。翻って、現役を引いたOBは、ひさしぶりに自ら歩んできた人生を俯瞰しつつ、母校を訪れてみようという想いも湧き出てくるのではなからうか。

OBの図書館利用規定を伺ってみると図書館カウンターで申請用紙に所要事項を記載し「図書利用カード」の発行を受ければ、館内閲覧は自由に出来（貸出は1週間の期間で2冊）、開館時間は平日（月曜日～金曜日）08：30～17：30との事。時間の自由度が大幅に広がる日々の一時、時には自分の原点を確認すべく小原台を訪れ、現役学生と共に、書籍を閲覧するのも一興ではなからう

か。全期別「卒業アルバム」や学生発行の校友会誌「小原台」を見るだけでも、十分に楽しみ、自ら過した小原台の時間を実感できる。

4 総合情報図書館の研修を終えて

快適な室温が保たれた総合情報図書館の研修を終えて屋外に出ると、再び猛暑の中、緑濃き小原台の学び舎が猛烈な太陽光に照り映えていた。

1学年の遠泳訓練は佳境を迎え、海上要員の舟艇訓練もポンドで実施中と聞き、まさに盛夏「舟首に砕くる青き波、雲わきあがる海原に～！」の小原台の光景を肌で感じた。

図書館研修中、幕末維新の時、坂本龍馬をはじめとする若者達が海軍操練所で学んだ際の教程も所蔵されていると伺った。西欧列強との力の差を知り、まなじりを決して教練に励んだ草莽の若き志士達の想い。現代、そして将来の日本や世界の安全を担う防大生達の想い。時空を超えた「鉄腕鍛える若人の～」志が、炎天直上を指し示す時計台の元に収斂している様な感覚がよぎった。

日本の防人として、先人の志と英知に触れ、自ら自分磨きをする小原台ならではの図書館、防大「総合情報図書館」に係る訪問・研修であった。

(同窓会広報 杉山伸樹 記)



時を超えた志の連鎖！（炎天直上を指す時計台）



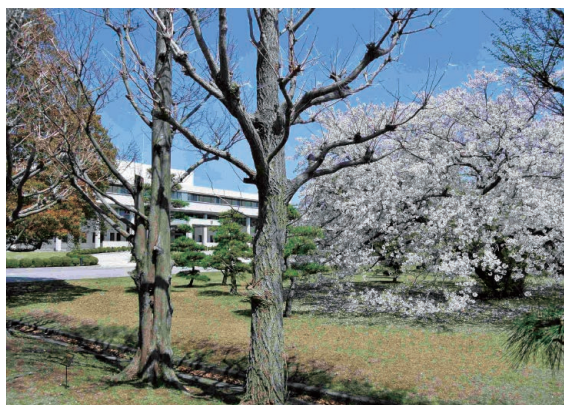
防大生とOBの交流 長き濃紺の線

62期生（新入1学年）に対するOB特別講話と現役先輩のラインアップ

1 春の小原台 記念講堂へ（広報係のひそかな高揚感）

平成26年4月7日（月）午後、久方ぶりに訪れた母校は晴れ渡った空のもと桜が咲き誇っていた。当日は、4月5日（土）の入校式を経てオリエンテーション中の新1学年62期生に対しOB特別講話が実施されると聞き、是非とも同窓会機関誌に掲載したいと考え、小原台を訪れた。

澁刺とした歩調で近づいて来る濃紺の隊列を見れば、各学生の袖筋に桜無く、制帽の下に初々しい表情を垣間見た。想いは一気に時間を遡り、我が23期生の入校直後に感じた期待と不安を体全体で感じた。遠い昔のごとく、昨日のごとく、忘れていた防大入校直後の緊張感が蘇った。「あの頃と何も変わっていない。」年甲斐もなく、新入1学年の隊列を見て、胸が高鳴った。防大同窓会広報係として、自らの防大入校以降40年近い年月を想いつつ記事を書ける事にひそかな高揚感を覚えながら、記念講堂へ向かった。



桜花爛漫の小原台（4月7日）

2 OB特別講話（記念講堂において空自、海自、陸自の順で講話が行われた。）

陸海空各自衛隊においてその職責を果たし退官した21期生が講師となり、防衛大学校入校から40余年にわたる自衛官人生等において感得した想いや考え方を、これから一步踏み出そうとする若き後輩達に語りかけた。（空自、海自、陸自の順で講話等の新入1学年に対する語りかけが行われたが、当日の記念講堂における状影を時系列にそって紹介する。）

講演 1

航空自衛隊OB 彌田清氏
（元航空支援集団司令官）

<演題：チャレンジする事>

ステージを静かに左右に移動しつつ、学生への語りかけは始まった。「私は防大入校時の身体適性検査で操縦適正にかかわる鼻中隔湾曲の異常を指摘されて、夏休みの帰省時に故郷の病院に飛び込みで受診しました。当初は手術予約が一杯として手術を断られていましたが、初老でおそらく先の戦争経験者であろう医師は、『君は将来、国のために働くのか？』と問いかけ、『廊下に設置したベッドで入院しても良いのならやりましょう。』と言って、他の手術予約を変更して手術をしてくれました。実際は廊下ではなく病室に入れていただけでしたが・・・私にとって戦闘機操縦士になる一歩は『国のために～』と言

われた戦争経験のある医師の言葉に代表された国民の『負託』を実現することでもありました。帰校後は、防大の医官から無断で勝手に手術を受けたことを厳しく叱られました。しかし、直ぐにいたずらっぽい笑みを浮かべられて『やったものは仕方ないな。』と言われて医官室から放免されました。このように私の入校初期は、円熟された年配の方々の『負託と御支援、懐の深い寛容』に支えられて小原台の生活を歩みだすことになったのでした。これは、その後の公務を尽くす上で、退職するその日まで忘れることなく胸の中に留めていた要石のような出来事でした。諸君も様々な要石を持っていると思います。」

導入部分で、このように入校初期を回顧した後、壇上を降り聴講する学生に近づき、顔を見つめながら「入校後、7日間を過ごした小原台の生活」について質問しつつ話を進めた。

「これからの人生において、必ずしも当初に思い描いた通りにならない事もあるでしょう。しかし、『その時、その置かれた場所で何を為すべきか、どのように踏ん張って立ち上がっていくか』を考えることが大切です。防



演台を降り、新入生に歩み寄り語る彌田OB

大生活の3本柱である勉学・学生舎生活・校友会は、国家の危機にあってリーダーシップを発揮し、日本を支えていくための資質を磨いていく修養の場として有用でしょう。勉学は真理を探究し、問題を解決する方策を学ぶ上で重要です。自主自律の学生舎生活は、「自由と規律」の意義を深く体現する場でもあります。一見、自由が束縛されて金太郎飴のような画一的な教育環境の如き印象を与える土壌からも個性豊かな人財の花が開いていくのです。人財となるか否かは、学生ひとり一人の心の持ちようです。

明治時代の先人が『坂の上の雲』を仰ぎ見て追い求めたがごとく、今の時代における防大の学生も同様に、これからの将来に向けて必要な資質を磨き、力を蓄えて能力を発揮していかなければなりません。『目の前にある危機や課題を先送りしても、危機は決して解消されることは無い。課題の解決は、リスクにチャレンジすることによって克服できるものだ。』いずれ国家の安全保障・危機管理分野に従事する諸君には、数々の試練が立ちほだかることと想像しますが、怯むことなく、自ら考え、自ら創造し、主体的に全力でチャレンジして欲しいと思います。今、この時を大切にしながら頑張ってください。]

講演 2

海上自衛隊OB 河村克則氏
(元横須賀地方總監)

演題：将来の部隊指揮官への応援メッセージ

演台の中央に位置し、将来の部隊指揮官として新入1学年を見つめながら話は始まった。

「私は、海上自衛隊の対潜哨戒機のパイロットとして任務につきました。最初の任地は岩国基地でしたが、4年間の勤務期間中にPS-1型飛行艇が2度にわたり墜落し23名の仲間を失ったのです。部隊の全搭乗員数の1/6が殉職する異例の重大事故でした。残された遺族の哀しみ、様々な人間模様を見る中でいくつかの学び習慣付けた事がありました。第1に『自分がいなくなっても家族等が

困らぬ様に準備し、身を処する事』第2に『不測事態に対する心構えとして、帰宅したら、まず明日の出勤の準備を直ぐやる事』です。

そして、最も重要な事柄は、航空部隊における飛行安全と任務遂行に目覚めた事であり、その達成の核心に指揮官の存在があるという自覚でした。

諸君は、これから防大4年間の試練を越えていくスタートに付いたばかりで、艦長とか航空部隊の指揮官など遠い夢の対象と思えるかもしれません。しかし、防大の生活を始めた以上、日々の試練のその先に部隊指揮官としての心構えに関するイメージがあっても良いのではないのでしょうか。諸君のこれからの頑張りにエールを送る気持ちを込めて『指揮官の心構え』についてお話しします。]

防大卒業後の目覚めと自覚そしてその後の長きにわたる指揮官経験を踏まえ、以下の項目が語られた。

① 強い部隊にするためには

隊員一人ひとりが貴重な戦力（部下をつぶすのは最低）
部隊は一本の槍、槍の柄（後方支援）のモチベーション高揚

自分達の部隊のチェック（自ら弱点を知り、解決策を模索、実行）

仲間を大切にす気持ちの醸造（仲間を助ける気持ち）
後輩に良いもの（意識、体制等）を残そうとする気持ちの醸造

② 事故を防止するためには

創造型人間の育成（自分ならどうするという気持ち）
自主自律心の育成（自主自律の人は事故を起こし難い）

③ 戦いにおいて勝利するためには

頭を使え（頭を使わない海軍は負ける）

④ 支持基盤を固めるためには

地元民への誠意（部隊見学とは隊員を見てもらうこと）
支援団体・支持者（自衛隊の代弁者）への誠意

⑤ 部隊を率いていくためには

エネルギーと忍耐力が必要（「指示→実施→確認の繰り返し」）

指揮官の妥協は禁物（もうイヤと思ったら部下は止まる）



新入生に応援メッセージを贈る河村OB

講話 3

陸上自衛隊OB 千葉徳次郎氏
(元北部方面總監)

演題：小原台でやるべきこと
「防大生活4年間の使い方」

「防大やめます」開口一番、壇上から明瞭闊達な声が響きわたり、やや驚いた表情の1学年を前に講話が始まった。「室長・サブ長に『私の思っていた防大と違うのでやめます』と申し出て、室長から『おまえは、まだ防大が何かを分かっている。1年間過ぎてから結論を出せ』と遺留され、私の防大生活が始まりました。今日は、自分を振り返り防大時代の位置づけについてお話しします。

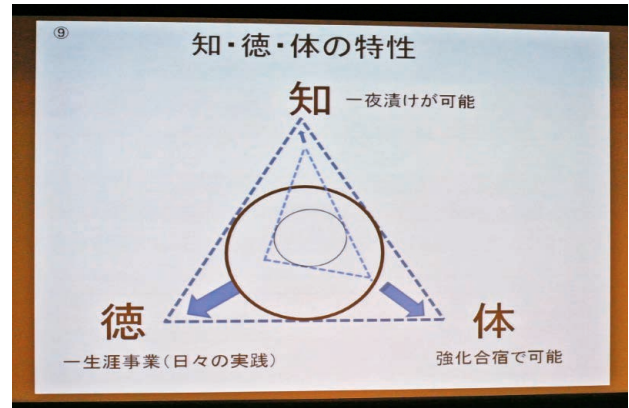


大きな声で新生入生に質問する千葉OB

まず、皆さんが目指している自衛官（自衛隊）に対する国民の評価を見てみましょう。昭和44年からの政府広報室の調査によれば、時代により紆余曲折があるものの上昇傾向を示し国民の自衛隊に対する印象は『良い印象を持っている』が91.7%（24.1調査）であり、『信頼感に関する調査』においても、社会的責任の重い10個の団体・機関において一番高いもの（中央調査社2012.8）となっています。皆さんが自衛官になるという自己実現は、そのまま国民の安全と幸福に繋がり、その信頼されている自衛隊の幹部となる人材を養成するのがこの防大です。

この小原台での、国民を裏切らない、信頼されるに足る人としての『器の基礎造り』こそが、防大4年間の使い方として最も重要な事柄だと思えます。

器で大事なことはバランスが取れていて物を入れた時に引っくり返らないことです。人の器は、知・徳・体の三要素からなり、バランスを取りながら器を拡げるためには、伸びている部分を削るのではなく、足りない所を伸ばす努力が大切と思えます。極端な言い回しですが、『知』は一夜漬で、『体』は強化合宿で伸ばせますが、『徳』は継続した日々の実践でのみ伸びます。防大生の知・徳・体は、防大三本柱の学業・学生舎・校友会のバランスある実践を通じて伸びてゆきます。皆さんが目指すべき器



講堂中央の画面に映し出された「知・徳・体」

の身近な目標は、最上級生たる4学年の姿です。（時として、反面教師の場合もありますが～。）ライバルは、外国士官候補生。成長指標は、同期生からの評価です。

日々の実践における具体的なポイントは三つ。第一は『挨拶』。挨拶とは、敬礼と違い人間の所作としての行為であり、下の者に対しても自ら率先して行うものです。第二は『思い遣りの心（惻隠）』。弱者に優しく、人の痛みを自分の痛みとする心を持つことです。第三は『自律（慎独）』。私心を捨て表裏の無い行動を取り、迷ったら厳しい道を選ぶ。まさに自分との闘いです。

この様な実践の有り様を常に思い描きながら、防大生活の4年間を使っていけば、皆さんの器の基礎は、初代榎校長が言われた『偏することなき均衡のとれたもの』になると思います。そして、この器造りは生涯を通じて行う『人としての任』たるべきものであり、皆さんは信頼される幹部自衛官としての器造りをスタートしたのです。『任重くして、道遠し。』これからの健闘を祈念します。頑張ってください。

講話の最後に、講師自らの連絡先を伝え、防大生活で思い悩んだら、常に先輩として相談に乗るからと声を掛け、壇上を後にした。

3 現役先輩達のラインアップ

オリエンテーション

前防大幹事 岡部俊哉陸将(25期)
(現統合幕僚副長)

5期毎のステップアップ

陸海空3名の講師によるOB講話が終了した後、幹事が壇上に上がり、背伸び肩回し等の体操を1学年全員にさせ体の緊張を和らげた。その後、自らの学生時代被っていた防大制帽を取り出し、約30余年前の学生時代を振り返りつつ、一人の学生を呼んだ。

一瞬驚いて起立し壇上へ駆け上がってきたその学生に

「〇〇君。よく防大に入校してくれた。俺の事を覚えているか。4月1日、着校日の早朝に正門横のバス停で会った。体操服を着て、ランニング中だった俺と話したね。」

この会話に講堂全体の張りつめた空気がやや和いだ。「OB大先輩のお話を、君達のこれから進む防大生活やその先の自衛官人生に具体的な姿で結び付けられる様に、防大卒業以降の幹部自衛官像をこれから現示する。〇〇君は、そのまま檀上の端に寄れ。訓練部長以下、指導官等登壇。」

訓練部長の伊藤弘海将補以下6名の尉官から将官にいたる横一線のラインが第1学年〇〇学生の右側に作られた。幹事自身もその最右翼に位置し



指導官などによる5期毎のラインナップ（左側：岡部陸将）

「今、〇〇君の横に、当校に現在在職する防大出身の指導官、教官等に並んでもらった。私や訓練部長を含め、尉官、佐官、将官、そして先程、お話をさせていただいた21期の先輩まで、防大卒業時を起点として概ね5期毎、5年刻みでラインを作ってみた。この線上をこれから諸君は歩いて行くこととなる。62期生はまさにそのスタートに立ったところだ。」

これからの防大生活や幹部自衛官としての人生に不安を抱いている者もあるだろう。確かに、小原台生活や幹部自衛官としての道程には多くの試練があり、高く険しい峠を越えて行かねばならない。国家の安全を支え、部下やその家族にも想いを馳せ身を処する事は、大変なことだ。



新入生に防大入校後の歩みを語る岡部陸将（前幹事）

しかし、先輩、同期、後輩に連なる一線上に身を置くと、不思議に勇気や力が湧いてくる。上級生を目標に前進し、同期で助け合い、下級生の模範になる様に日々過ごすことで自然にステップアップしていくものだ。今、君達の目の前に並んでいる若い小隊指導官から5期毎に年を重ねる先輩の姿の中に、これからの道程を思い描いてもらいたい。」

この幹事の話に引き継ぎ、檀上に並んだ防大出身の幹部が逐次自らの自衛官として経験した内容を紹介した。62期生にとっては、OB特別講話と併せて防大生が歩む道程を具体的な姿として感じ取れる入校オリエンテーションに相応しい機会となった。

4 長き濃紺の線（広報係の追想）

講話の内容を聞き逃す事のない様メモを走らせ、写真を撮るうちに2時間余がたちまち過ぎた。この講話で入校オリエンテーションは終了し、明日から62期生の本格的な小原台生活が始まる。

突然、40年近く前の記憶が浮かんだ。新入23期生に対する映画鑑賞会（夜の自習時間中）があり、The Long Gray Line（長い灰色の線）を見た事を思い出した。ウエストポイントの士官候補生及び卒業生達の間人群像を40年に渡って学校に奉職した助教が見守ったストーリー。時間に追われつつ様々な悩みを越えて行く候補生の姿に小原台の日々を重ね合わせた。助教の退官日に、候補生達によるパレードが挙行され、灰色の制服の長い隊列が続いていく。彼の脳裏に、時空を超えて灰色の制服を着た様々な候補生達が一線に並び現れ消えた。

この映画エンディングのイメージが、聴講した「器造りのライバルは外国士官候補生」「5期毎のステップアップ」により、想い出されたのか。防大の歴史も60有余年。防大「長き濃紺の線」の歴史と伝統の流れの中に、多くの群像が襍を受け渡しつつ一線上に連なっていく。その流れの中に、ささやかな砂粒ながら自分も居ると思うと誇らしい想いが沸き起こった。

小原台から浦賀駅までの道筋は、我が入校直後、初めての引率外出で部屋長やサブ長に教えてもらったルートを選ぶ。「62期生がその職責を果たしOB講話をする新1学年は？」「100期生ぐらいいかな。」何とも楽しく大いなる追想だなど想いつつ駅への坂を下った。

（同窓会広報 杉山伸樹(23期) 記）

同窓会長による平成26年度夏季定期訓練激励（空自三沢基地）



F-2戦闘機の前にラインアップする学生たち（60期・航空）

1 第3学年航空要員の航空団実習激励

今年度の永岩俊道同窓会長による部隊実習激励は、第3学年航空要員（60期）の航空団実習を対象として、7月14日（月）に青森県の三沢基地に所在する航空自衛隊第3航空団において行われた。

平成26年度の防大3学年航空要員の航空団実習は、7月4日（金）から29日（火）の約1ヶ月間、全国7か所に位置する戦闘航空団等（千歳、三沢、小松、百里、築城、新田原、那覇の各基地）で実施された。

この実習は、空自の特質である各種の様々な機能が緊密に連携して、はじめて戦闘機による活動がなし得る事を航空団の実習によって実感・体感させる事を主眼としている。このため、航空団を構成する飛行群、整備補給群、基地業務群隷下の各編成単位部隊の実務を体験し、実習学生は個別に分かれて営内の空曹士と内務班で起居を供にする。更に、戦闘機操縦者の活動を体験すべくT-4練習機等による体験搭乗、そして航空団を強固に支援する救難、気象、管制部門の研修等が実施された。今回は、永岩会長の実習学生に対する講話及び実習受け入れ部隊の各群司令と会長の対談内容を紹介する。

（詳細については、「防衛大学校同窓会」ホームページに掲載）

2 永岩会長の激励講話

<会長講話の要旨>

指揮官（幕僚）としての心得
（変わる勇氣・変える決意！）

40数年前の私の航空団実習において一番衝撃的記憶は、実習中お世話になった先輩の戸田3空佐が、部隊実習の直後にF104戦闘機で殉職されたニュースを見た時だった。あんなに身近に接してくれた先輩の死。自衛官の職務の厳しさを実感した防大3学年の夏だった。

* 戸田泰義3等空佐（防大3期）昭和44年8月6日殉職
（昭和30年4月 防大入校 昭和34年3月 防大卒業）
第7航空団206飛行隊所属
F104戦闘機にて射撃訓練から帰投中、百里基地東北東沖の海上に墜落

平成11年11月22日。人間基地着陸直前にT33練習機の機体にトラブルが生じ、13秒という生死を分けた一瞬の判断の中で、自らの脱出より人口密集地への墜落回避を優先し、2名のパイロット（航空学生出身）が殉職した。当時、私は空幕監察官の立場にあり、航空事故調査委員長として航空事故の原因究明に当たるとともに、事故再発防止のため、航空部隊の操縦者達と殉職したパ



若き後輩たちに想いを託す「You have control !」

イロットの想いを語り合った。この「13秒後のペイルアウト」の話は、本年3月、防大58期生の卒業式にあたって、安倍総理の訓示冒頭にも語られた。

「事に臨んでは危険を顧みず、～もって国民の負託にこたえることを誓います」この宣誓の重みを改めて感じるこの頃、集団的自衛権の限定的行使容認の閣議決定が行われた直後の7月3日（木）に、官邸での総理との昼食会に防大同窓会長としてお招きいただいた。齋藤隆第2代統合幕僚長（前防大同窓会長）、折木良一第3代統合幕僚長（現同窓会副会長）と共に官邸に伺った。大学の同窓会長の立場で総理とお話する事自体、稀有な事だろう。

総理からは、冒頭、自衛隊の指揮官・幕僚としてその中核を担う現役防大同窓生の諸官に敬意と感謝のお言葉を頂戴した。

本年5月開催された第13回アジア安全保障会議において、安倍総理は「アジアの平和と繁栄よ、永遠（とこしえ）なれ」と基調演説を行った。近年、我が国を取り巻く戦略環境は激変し、「日本にとって安全保障とは？」と自問しつつ、より真剣に向き合わねばならない時代となっている。

「大変な問題を先送りせず、状況変化に対する感受性を高める。』『変わる勇気・変える決意！』こそ今最も求むべきものだろう。

「汝、平和を欲するなら、戦いに備えよ！（古代ローマの格言）」「自分で自分を守ろうとしない者を誰が助ける気になるか！（ニコロ・マキャベリ）」



「I have control !」 夢は早や大空へ

といった先人の言葉は示唆に富んでいる。同時に「善く士たる者は武ならず、善く戦う者は怒らず・・・（老子「配天第68章）」といった東洋文明の精華たる言葉も意味深い。

これらの言葉の意を体現しつつ日中間の現役退役高級幹部間の意見交換が継続され、退官後の防大同窓生も大きな役割を果たしている。

更に国家の安全保障を担う者同士の信頼感、特に同盟国のミリタリー間の友好と信頼は、何にも増して大切だ。この講話終了後、在三沢の米空軍部隊を視察のため来基する太平洋空軍司令官カーライル空軍大将を出迎える機会に恵まれた。この機会も、防大同窓会長を拝命した中での、日米空軍間の交わりで得た一期の縁と思えてならない。

君達、防大航空要員もコロラド・スプリングス空軍士官学校の士官候補生を良きライバルとして頑張っしてほしい。目を世界に向け、国際的な視野をもって自らを磨き、部隊を練成し、精強さを保ち向上させてこそ、真の同盟関係を維持発展させる事が出来る。

国家国民の安全を守る強い意志を持って、『変わる勇気・変える決意！』を持つことこそ、喫緊の重要事項であり、自衛隊は間違いなく、その魁となる。近い将来、第一線の現場部隊において、その中核となるべく「同期の絆」を保ち、「凜然」と進む事を期待する。これが、未来の指揮官・幕僚となる君達若き防大生諸君に対する期待と激励の想いだ。

私は現役生活を終えて数年経つが、改めて、国家防衛の志を操縦桿に例え「You have control !」と呼びかけよう。力強く「I have control !」と答えてほしい。

諸君の将来に幸あれ！

3 第3航空団の3学年実習受け入れ部隊指揮官との懇談

(1) 基地業務群司令 大谷康雄1等空佐 (防33期・研究開発)

基地業務群は、基地警備、基地防空、施設、消防、給養、厚生、会計、通信、輸送、衛生等、基地の活動基盤を支える様々な機能を併せ持つ部隊で構成されている。実習生には、食事の調理から消防、基地警備に



至るまで、様々な体験的実習を計画しているとの事であった。

しかし、実習生の多くは、未だ戦闘航空団におけるこれらの機能の重要性が実感出来るには至らず、将来、航空団実習において「あの深夜の増加警衛は、～だったな」という体験が、警衛に立つ部下隊員の心情を理解する事に繋がるはずと大谷群司令は語った。これらの体験が先行投資となり、任官後の現場指揮官等になった際、その経験が活かしてくると述べ、「私もそうでした。」と群司令は笑った。

また、前の職務が空幕技術課であり、先進技術実証機等の将来に向けた装備品開発の話をした際、実習生が真剣に聞き質問をしてきて、頼もしさを感じたとも語った。

(2) 飛行群司令 谷嶋正仁1等空佐 (防34期・戦闘機P)

飛行群は、戦闘機操縦者及び日々の飛行前後の点検等を行う部隊整備員によって戦闘機等の飛行任務を遂行する「槍の穂先」の部隊である。

夏季実習期間中に実習生17名全員に、T4練習機への体験搭乗を実施する計画を谷嶋群司令が語った。7月の海霧発生等の天候気象制限、体験搭乗のため一定レベル以上のパイロット占有、貴重な練習機の機体別時間管理等、17ソーティの飛行回数は、かなり部隊の練成訓練に皺寄せが生じるのではないかと質問した。

群司令は「影響が出る事は確かだが、将来の指揮官等、特にパイロット適性を有さない実習生にとっては、大変貴重な経験であり、十分意味のあるフライトである事を飛行群の隊員達も皆承知している。戦闘機操縦者の活動を追体験し、将来の空自幹部として巣立ってほしい。」と述べ、基群司令と同様に防大生に対する先行投資の重要性を語った。



(3) 整備補給群司令 徳重勇一1等空佐 (一般幹候80期(防34期相当)航空機整備)

整備補給群は3空団が保有するF2戦闘機及びT4練習機の支援整備を一手に担い、航空機可動率の成否を決する機体各システムのスペシャリスト集団である。航空団の人員規模の約半数をもって、航空機の品質を高度なレベルで確保している。



徳重群司令は「整備部門においても、若い整備幹部の活動は整備の現場における士気の源泉であり、防大や一般大学出身の若手幹部の活気に期待している。

航空機システムのイロハについて、生きた機体の爆音と振動の中で隊員とともに学ぶと同時に、情熱と若さ溢れる熱気で、小隊を引っ張っていかねばならない。

以前は、小隊付幹部としての見習い期間があったが、現在、その様な人的余裕はなく、隊付と術科学校の期間が終われば、ただちに数十名の隊員からなる小隊の現場指揮官となる。防大3学年の部隊実習も、近い将来の小隊長の姿を思えば、極めて重要な1か月ではないか」と語った。

*文章中、登場する方々には御本人に了解をいただき、期別、職域等を記載させていただいた。防大の実習に当たって部隊側が多く職域に渡って支援を行い、また、如何に多くの部隊が第1線たる現場において、防大生の将来の活躍を期待しているかを記録に留めたいが故の記載である。

また、記載させていただいた官職は当該夏季実習期間中のものである。

ここに、あらためて、同窓会長の激励行に対する御支援・御協力に感謝申し上げ、関係各位の御活躍を祈念する次第である。

(同窓会広報 杉山伸樹 記)

タイ王国同窓会支部会長の交替

タイ王国同窓会支部は平成12年、第6期卒業生チョンチェン・ブラナシルビン氏を会長として発足いたしております。今までタイ王国は防衛大学校海外留学生として最大の累計180名の留学生を派遣しており、同窓会支部はこれら学生の留学を支援するとともに同卒業生の融和団結、在タイ王国日本国大使館防衛駐在官の支援等の活動をつうじ日タイ防衛交流の懸け橋となって活動しております。本年2月にタイ王国を訪問された國分現防衛大学校校長も第58期生卒業の式辞におきましてタイ王国における卒業生の活躍を熱く語られております。

10月1日を持ちまして、15年間の長きにわたりタイ王国防衛大学校同窓会支部会長として同会をまとめてこられましたチョンチェン氏が御勇退、名誉会長にご就任されることとなりました。後任会長には同じく10月1日付タイ王国海軍参謀長に就任された23期タナラット・ウボン海軍大將が、副会長には同日付タイ王国空軍参謀長に就任された26期ジョム・スンサワン空軍中將と29期パラディット・ボースリ陸軍大佐が新任されました。

防衛大学校同窓会は同窓生が自衛隊のみならずタイ王国国軍の枢要な地位に就任されたことを無上の喜びとするとともに、現職軍人が同窓会の役員を御兼任いただくことは、今後日タイ両国の防衛交流が単なる軍人同士を超えて、同窓生同士の付き合いという一層の深みを増すものと期待しております。

防衛大学校同窓会の海外支部はタイ王国同窓会支部に加え、シンガポール共和国同窓会支部があります。防衛大学校は現在までタイ、シンガポールに加え、マレーシア、フィリピン、インドネシア、モンゴル、ベトナム、韓国、ルーマニア、カンボジア、インド、東チモール、ラオス計13カ国の士官候補生を受け入れています。将来これら諸国におきましても防衛大学校同窓会支部が設立され、卒業生のネットワークが安倍政権「地球儀俯瞰外交」の一翼として国内のみならず世界的に広がっていくことが期待されます。



タイ王国同窓会支部員と國分防衛大学校長

小原台における防大生活

カンボジア王国留学生 121小隊 (2学年)
ビン サロン



私の小原台での防大生活について話をしたいと思います。私は防衛大学校への留学が決まった時はとてもわくわくしました。しかし一方で、母国を離れ、言語、そして文化の全く違う外国で住む事に対して不安を感じる部分もありました。

そして実際に日本に来てみると、留学する以前に想像していた生活、文化とまったく違い、そのため留学当初はものすごく寂しい思いをし、家族に逢いたい、家に帰りたいたって思っていました。留学生は、日本語研修生の期間も含めて、5年間勉強しなければなりません。日本語は当然分らず、防大生活になじむことができず、そのことで苦労しましたが、日本語のクラスで同じ日本語研修生と一生懸命助け合って勉強しました。それに、日本人の学生も親切に接してくれたため、大変ではありましたが私の日本語も少しできるようになりました。

そして、日本語研修生の1年間を終え、1学年になりよいよ本格的な防衛大学校での生活が始まりました。1学年の時には防衛大学校の生活における様々な決まり事やルールを上級生から指導され、それらを1つ1つ学びました。その中で特に大変だったのが掃除でした。すばやくきれいに多くの場所を、決められた時間内にやらないといけません。掃除がうまくできていないと、上級生から指導を受けることもあり、慣れるまでは掃除が終わったときにどっと疲れが出たのを覚えています。また、掃除以外にも上級生から指導を受けることがありますが、まだ日本語を十分に理解できず、指導を聞き取れないこともあり、とても大変でした。しかし、同期と団結し、助け合うことで日々の生活を乗り切りました。

1学年の時に一番思い出に残っていることは、8キロメートル遠泳です。私は、留学前は少し泳げるくらいでしたので、海で8キロメートル泳ぐと聞いてとてもびっくりしました。そして、そのような距離を自分は泳げるのだろうか、とても不安になりましたが、毎日水泳訓練に参加しているうちに自信が付き、本番ではなんとか8キロメートルを完泳しました。終わった時は本当に疲れましたが、同期と一緒に泳ぎきったことは、今となってはとてもいい思い出となりました。

そして、2学年になると25日間のカッター訓練期間に

突入しました。カッター競技会に向けて厳しいトレーニングが毎日行われました。このカッター訓練は、今まで防衛大学校で経験したことの中で一番厳しいと思いました。土日も休みなくカッターを漕ぎ、また訓練期間中に多くの同期の手の皮が剥けるなど、精神的にも体力的にもとてもつらかったです。しかし、金クルー獲得を目指し、同期一丸となって頑張り25日間を乗り切りました。結果は振るわなかったものの、1つの目標に同期で立ち向かったことは、私にとってめったにない、貴重な経験だと思っています。

現在、小原台での生活は3年目を迎えています。今は元気に小原台で生活をしています。

学生生活では、指導をする側として1学年に様々なことを教えていますが、今後は上級生として下級生に対し良い指導、そして下級生に自分の学んだことを教えて行きたいと思っています。また自分自身も上級生として、下級生の見本になれるように努力していきたいです。

勉学も専門科目が中心となってきているため、より一層頑張っていけないといけない時期になりました。また、私は陸上要員として訓練していますが、訓練は厳しくとても大変です。しかし、そのような大変な中でも、同期と助け合い、上級生のアドバイスを受け、1つ1つ与えられたことをこなしていきます。

日々を一生懸命過ごし、将来防大を卒業し、母国に帰り仕事についた時に、防大で学んだことを母国のため、そして日本とカンボジアの友好関係を築けるようにこれからも努力していきたいと思っています。



小原台にて故国カンボジアを紹介 (本人：左側)

同期生との絆

モンゴル国留学生 131小隊 (4学年)
ツォグトサイハン・セレゲレン・バートル



防衛大学校には、約2000名近くの学生がいる。その内、約500名の学生が私の同期生であり、我々は、防衛大学校59期生という立場の下で離れがたく結びついている。全員が全員と面識があるとは限らないが、同期生として共に入校し、共に小原台生活を送り、そして共に卒業していく。小原台での同期生との絆とは、このように共に過ごすことから始まるのではないかと考える。

防衛大学校は一般大学と違って、厳正な規律の中で学生舎生活、教育訓練及び校友会活動を並行して行い、将来幹部自衛官としての資質を身に付けなければならない。皆最初は、真っ白な紙のような状態から、新しい自分を作りあげていくのである。今でも入校当時の同期生たちの素直で未熟な姿を鮮明に覚えている。しかし、この修練の場で共に励むことによって日ましに成長していく。

同期生の全員が全員と面識があるとは限らないとはいったものの、つながりを持つ機会は多い。所属する小隊、中隊が違って、専門学科や校友会活動でのつながりはあるし、逆に言えば、専門学科や校友会活動が違って、所属する小隊、中隊及び大隊でのつながりもある。また、防衛大学校は、陸・海・空各自衛隊の将来の幹部自衛官となる者たちがそろって教育訓練を受けるところであり、これは、世界各国の士官学校にもあまり見られない特徴である。学生の所属する小隊、中隊、大隊、あるいは専門学科や校友会にしても、陸・海・空各要員の学生は必

ずおり、各要員同士のつながりや各要員別の所属関係なくつながりがある。つまり、防衛大学校の生活の基盤となる学生舎生活、教育訓練、校友会活動といった3本柱において、同期生としての絆が出来あがる。このため、小原台において、同期生との絆を築く機会はとても多いのである。

さらに、小原台での陸・海・空各要員の学生がそろって生活していることは、国民の負託に応えるために組織一体となり、統合で任務を遂行する自衛隊の将来にも大きな役割を果たしていると思う。このような小原台で育てられている私は、この作りあげてきた絆を活かし、将来モンゴルと日本の懸け橋になりたい。

私は同期生との絆は、みんなが向う共通の目標があったからこそできているものだと思っている。目には見えないが、59期生というものでつながった我々は、1から4学年まで、食事をするときも、歩くときも、走るときも、喜ぶときも、そして、悲しむときも、朝起きてから夜寝るまで共に過ごしてきた家族のような仲間たちではないか。私は、この59期生という家族の一員となったことを誇りに思っており、これからもその絆を大切にしていきたいと考えている。

59期生の皆さん、これからもよろしくお願ひします。



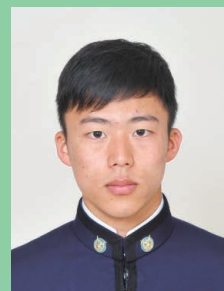
同期生とともに！しばしの安らぎ
(本人：右から3人目)



富士のすそ野に故国を思う・同期を感ず！
(本人：しゃがみ姿勢の前列最左翼)

今後の抱負（日韓の友好の維持への道）

大韓民国留学生 233小隊（3学年）
キム・ジュンス



「空はつながっている」はドラマ『空飛ぶ広報室』の最終回の最後の台詞である。男主人公と女主人公が離れるようになり、周りからのそれでいいのかという質問に対し、この台詞を言って終わる。これを韓国と日本に置き換えたなら、正に私の帰国後の軍人生活の標語となる言葉である。空はつながっている、実にそうだ。さらに、韓国と日本の関係では、海もつながっている。地理的にも文化的にも重要な関係であることに間違いはない。だが、非常に逆説的にも韓国と日本は領土問題、歴史問題で毎日うるさい。子供の頃からハーフで育った私としては、両国の関係が回復されることだけを願ってきた。だが、そういうことはうまくいかなかった。ニュースあるいは新聞ではいつも日本と韓国の悪い関係だけを言っていた。自分はそうしなくなかった。変えたかった。防衛大学校での2年間の留学は私にとって駐在武官と似たような小さな外交官としての経験の場であり、自分自身を変化させる場であった。そして今現在は、この問題をすべて解決する武官になることが私の夢である。韓国と日本の現在のこのような悪化した関係ではなく、いつ会っても違和感がない友人のような関係にすることが私の最終的な目標である。しかし、自分が考えてきた日韓関係が間違っていたことに最近気づいた。そのきっかけとなった事件があるので、紹介したいと思う。

現在、私には尊敬している武官がいる。彼は行動と言語など様々な面で品位が高い方である。日本に留学に来た韓国の軍人たちの定期的な集まりの場で、彼から質問の一つされた。『現在、韓国と日本との関係にないことが何なのか』という質問であった。私は韓国と日本の現在のこのような悪化した状況で、インターネットメディアで見たことがあった『韓国と日本は許し合っていない』という記事を大きく叫んだ。しかし、正解ではなかった。正解は、『日韓関係は問題がない』ということだった。

これを聞いたとき大きく衝撃を受けた。常に防衛大学校に来て、韓国についてよく知らない友達に教えるときに「メディアを信じてはいけない。直接見て経験して知るべきだ。」といつも口にしてきた。しかし、自分自身が質問にメディアで見た記事を答え、しかもその答えは、『問題がない』ということ。メディアではもちろん 歴史問題、

領土問題など様々な複雑な問題でいつも悪化していると言われるのであるが、実際のところ、『軍事関係や外交関係に問題は常につきものである。』とのことであった。恥ずかしかった。昔からハーフとして両国の親しい関係を願ってたことすら忘れてなくなった。それから、メディアに流されず、自分が直接足で歩いて経験したこと、日韓関係の実際のところを両国の国民に伝えたくなった。そして、その理解の上、最終的に問題を完全に解決する土台として武官になろうと決意した。

韓国にも日本にも、両国の関係は重要である。近くて遠い韓国と日本との関係を維持して発展させることが、すべて武官の判断だと思えばあまりにも責任が重く、することも多いだろうと考えられる。

しかし、防衛大学校で2年間生活しながら、他の国の人と交わることで、私の母国の日韓両国について知ること、そして、それらをよく知らなかった人に知ってもらうことは自分にとって喜びであった。責任が重いのは知っている。責任が重いからこそ韓国と日本の架け橋として、自分だから作ることができる機会がより多くなるのであれば、試してみる価値があると思う。そのためには、今以上に日本語と日本文化と私の能力をより育てなければいけないだろう。

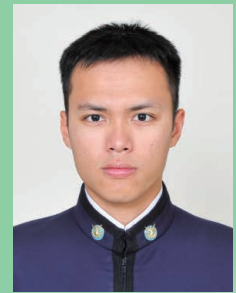
ドラマ『空飛ぶ広報室』の最終回の最後の台詞のように、日本の防衛大学校を去っても空は繋がっているのだから、どこに行ったとしても韓国と日本の関係を常に考え、そのためにさらに一步一步進んでいきたい。



韓国空軍士官候補生姿で舎前に立つ

日本の様々な人達との交流
(日本のお母さん、お父さん、ありがとう)
～ホストファミリーと伴に～

インドネシア共和国留学生 412小隊 (4学年)
フィルソン・アシス・ウィチャクソノ



平成22年4月3日の朝、私は成田空港に到着した。「日本という国で勉強するように」という命令を受け、心の中に色々な感情が混ざっていた。国の代表として選ばれたのはもちろん嬉しかったが、2年後の夏休みまで帰国してはいけないという国の方針でとても不安であった。ホームシックにはならないか、そして、2年後また国に帰れるとしても、愛している人々とまた会うことが出来るのか、頭の中ですずっと思っていた。

成田空港に到着してから約3時間後、他の同期2人と共に防衛大学校に到着した。その時、日本語が全く話せなかった私は防衛大学校の生活を見て、成田空港からの悩みが更に増大した。防衛大学校の厳しい生活に悩んでいたのはもちろんだが、同部屋を含めて周りの人々に何も話せなかったのはとてもつらかった。

そして、約2ヶ月後、私は日本のお父さんとお母さんと出会った。お父さんとお母さんはとても優しくかった。日本語や日本文化がまだ分からなかった私に対して気長に交流してくれて、自分のお母さんのように色々教えていただいた。その時、お母さんと共にまだ小学校に通っているお孫さんも来てくれた。彼らは私に対し「お兄ちゃん」と呼んでいて、とても可愛かった。

それからは、時間のある時に、私は週末によく日本のお母さんの家に訪問している。お母さんは鎌倉に住んでいて、海からすぐ近くです。毎年、夏が来たら、小学生の弟達と一緒に海で遊ぶのはもう恒例行事となっている。下の写真は、海で遊んでいる時にお母さんの娘が撮

った写真である。カメラに向いているのは私で、紫色のTシャツを着ている子供と青い半ズボンをはいている子供は私の日本の弟である。そして、一番右の人は防衛大学校の同期で同じくインドネシアからの留学生である。

お母さんとお父さんのおかげで、私のホームシックがなくなり、防衛大学校で順調に学ぶことが出来た。そして、お母さんとお父さんから色々な日本の文化を教えていただき、私は日本人との交流もうまくできたと感じている。現在、あっという間に4年間が経過して私の卒業式までは残りわずかである。お父さんとお母さんは私がホームステイに来たことで得たことはあまりないかもしれない。しかし、私の観点から見れば日本のお父さんとお母さんのおかげで、たくさんのことを得ることができ、私の世界が変わった。



日本の家族と海に遊ぶ (海からもどる本人)

H26本科留学生の出身国



インドネシア



カンボジア



韓国



モンゴル



フィリピン



タイ



ベトナム



東ティモール



ラオス

只々歩メバ至ル



一般幹部候補生 陸曹長
篠原 智也

現在、陸上自衛隊幹部候補生学校・第95期一般幹部候補生（BU）課程に入校中の防衛大学校本科第58期卒業者を代表して、篠原候補生がご挨拶を申し上げます。

私たち第58期が平成26年3月末に防衛大学校を卒業し、幹部候補生学校・前川原の地へ赴任し、早くも半年が過ぎました。幹部候補生学校では、約34週に亘る教育が実施されます。防衛大学校と大きく異なる点は、全ての教育訓練において「幹部」としての視点を保持することが重要視されている点です。そのため、BU課程における教育訓練は「幹部としての資質の涵養」及び「初級幹部として必要な基礎的な知識及び技能の修得」を目標としています。具体的な教育内容については、日々の日常起居をはじめ、実員指揮を学ぶ戦闘・戦技訓練、初級幹部として必要な戦術教育、戦闘員に必要な体力を養うための体育訓練等があります。また、幹部としての資質を養うための、韓国研修・沖縄研修等も計画されており、充実した日々を過ごしています。

今回、「小原台だより」へ寄稿するにあたり、以下の2点を述べます。1点目は「幹部になるにあたり、皆何らかの不安を持っている」という点です。2点目は「防衛大学校在学中の後輩へのアドバイス」です。

私は前川原の地における教育訓練を通じ、来年の3月以降、幹部自衛官として部隊を率いていくことが本当に行えるのかということをよく感じています。これは多くの幹部候補生が同様に感じていることだと思います。野営訓練を例にしてみると、私は防御における小隊長を任せられ、小隊の防御陣地を構築させるという任務を与えられました。現地を偵察し陣地選定を行いましたなかなか上手くいかず、指導部の助言を頂きながらなんとか工事に着手できました。このように様々な教育訓練を経験するなかで、教え切れない失敗や上手くいかないことが多々あります。指導部からの指摘により気づくことやAARにおいて同期間で問題を案出して改善させていくものの、本当に自分が部隊を動かすことができるのか不安になることがあります。そのような中でいつも心に留めていることが、「只々歩メバ至ル」という幹部候補生

学校長が示された一言です。防衛大学校以上に体力・気力的に厳しい幹部候補生学校の教育訓練において、挫折しそうになる度にこの言葉を思い出して踏み止まっています。私たち幹部候補生は、来年の3月以降、幹部自衛官となります。そこから約30年にわたり指揮官あるいは幕僚として「幹部自衛官道」を究めていかなければなりません。その過程ではこれまで以上に厳しいことがあるかもしれません。このような厳しい状況下においても幹部自衛官として浮き足立つことなく、淡々と職務に専念することが必要であり、これを端的に表したのが「只々歩メバ至ル」という言葉です。今後この言葉を胸に困難に立ち向かっていこうと思います。



「只々歩メバ」今！試練の時



攻撃発起「草に伏し！ 立ち！ 前へ！」



草燃える！ 同期の絆

兵の強弱は、士官の精否に由る



一般幹部候補生 陸曹長
重丸 太一

防衛大学校を卒業し、ここ尚武の地、久留米での生活も半年が経ちました。今年は陸上自衛隊創隊60周年かつ集団的自衛権の容認と節目の年となり、幹部自衛官となるべくして日々の教育訓練に励む我々も身が引き締まる思いです。このような環境下において、忙しくも充実した幹部候補生学校での生活は、幹部自衛官としての矜持を醸成し、自らを成長させ、自信に繋がる日々です。

本稿では、幹部候補生学校での生活で感じることをもとに、部隊を見通した際の意気込みを書かせていただきます。

ここ幹部候補生学校では、幹部のお家芸とも言われる戦術をはじめ、防衛法制や戦史といった広範多岐にわたる学科教育、高良山登山走や武装障害走等の検定に伴う体力気力の充実を図ります。しかし、これらの識能や体力気力を差し置いて、この学校で最も鍛えられるのは幹部自衛官に求められる資質面であると感じます。それが顕著に現れるのが野外訓練です。先ほど挙げた識能や体力気力をより実践に近い環境で活用・発揮しながら、一連の状況下で実施する陣地攻撃、3夜4日にわたる陣地防衛などの各種訓練を行います。肉体的、精神的にも決して楽とは言えない環境に身を投げ自分と向かい合うことで、幹部自衛官に求められる資質を磨くことが出来ます。

以上のような訓練を始め、日常生活全てを、区隊という30人程度の単位で行う私たちは、日々の成すべき事も多く、それらの求められるレベルも高いため、自分一人の力では任務を達成できないこともあります。しかし、一人一人が指揮官という立場に立ち、今自分は区隊のために何が出来るのかということを考えて行動することで協力して任務達成に向かいます。私たちは繰り返し分析をすることで、時間的制約を受けまたは体力的に追い込まれた時においても、周囲を見て冷静に判断を下すことが出来るように成長してきたと感じます。

また、幹部候補生学校では何か行動を起こす際、教育訓練はもちろんのこと、日常の生活などあらゆる場面で、あるフィルターを通して判断を下します。それは、「幹部自衛官になる者として」ということです。この学校を卒業し、3等陸尉となって部隊に行った際は、文字通り幹部自衛官としての立ち居振る舞いが求められます。指揮下部隊の前に立つ者として、その一挙手一投足、言動など全てを見られているのです。

私が幹部候補生学校に入校して教わった言葉に「兵の

強弱は、士官の精否に由る」というものがあります。これは、初代幹部候補生学校長の平井重文校長のお言葉で、部隊の強さは指揮官次第であるということの意味します。すなわち、幹部自衛官となる私たちの双肩にかかっているという事です。今一度自分の成すべき事を見つめ直し、自らの幹部自衛官としての本分を尽くせるよう、“今”を大切に精進していきたいと思えます。

防衛大学校の後輩の皆さんへ

防衛大学校時代と幹部候補生時代の自分が一番変わったと感じるところは、明確なビジョンが持っているか否かという点です。

恥ずかしながら、防大のときの私は今ほど鮮明に理想の幹部像は出来ていなかったし、目標も漠然としていました。ただ、幹部候補生学校に来て、あの時やっけて良かったなと感じたことがいくつもあります。それらは全て自分なりの努力をして色々な事に取り組んでいたことでした。これは、自分が思いもよらないところでそのときの経験が発揮されたり、自分の自信になったりと確実にプラスに働きます。

是非皆さんには、自ら手を上げ前に出る勇気と本質を見極める研究心を持って残りの学生生活を楽しんでほしいと思います。

そして、共に部隊で勤務できる日々を楽しみにしています。



命令下達！「指揮官として」



「彼我の状況～」戦術判断は如何！

自覚



一般幹部候補生 海曹長
第6分隊
浦山 修太朗

全国の諸先輩方、同期生及び後輩の諸官におかれましては、日々の任務にご活躍の事とお喜び申し上げます。海上自衛隊幹部候補生学校学生を代表して、浦山候補生がご挨拶申し上げます。防衛大学校を卒業し、幹部候補生学校に入校して以来、早くも半年が過ぎ、卒業への折り返しに差し掛かろうとしています。我々は、幹部海上自衛官として求められる資質の涵養と、初級幹部自衛官として必要な知識技能の修得のため、日々の教務、訓練に励んでおります。今回は、「小原台だより」紙上をお借りして、この半年間で私が学び感じてきたことを皆様にお伝えさせていただくとともに、後輩である防大在校生に対するエールを送ります。

我々58期生の卒業式において安倍内閣総理大臣は、1999年に生じたT-33A練習機の墜落事故における中川空将補と門屋一等空佐の命を懸けた行動から「雪中の松柏、いよいよ青々たり」という言葉を紹介され、我々に対し、いかなる困難に直面しても、強い信念を持ち全身全霊を捧げること、そして、国民の生命と財産、日本の領土・領海・領空を、断固として守り抜く信念を持ち続け、いかなる厳しい訓練や任務にも耐えるよう訓示されました。私は、総理の訓示から、幹部自衛官たるもののあるべき姿とは如何なるものなのか、それまで以上に深く考えるようになりました。そして、私がたどり着いた答えの一つが「自覚を持つこと」ということです。幹部候補生学校に入校して以来、常に幹部自衛官としての起居動作が求められ、すべての行動が幹部自衛官たるにふさわしいものであるべく厳しい教育を受けております。幹部自衛官は、服装容儀から始まり、立居振舞、言動のすべてが常に見られているからです。部下や国民に期待



江田島！ 桜花の下に集う同期生

され、見られている幹部自衛官としての自覚を持つことがすべての始まりだと思います。初代学校長の横先生が先輩方に語られた「ノブレス・オブリージュ（高きものの責務）」という言葉にあるように、幹部自衛官とは、防衛行政職員という職業としての自衛官の概念を超えた崇高なものであると日々かみしめております。

私がここ江田島の地で修養に励む間にも、我が国を取り巻く安全保障環境は厳しさを増しており、特に海上自衛隊においてはソマリアでの海賊対処行動や東シナ海での警戒監視活動など、任務の拡大と多様化が一層進んでおり、我々に対する国民の期待は高まるばかりです。そのような中であって、命を懸けてこの国を守り、発展に寄与するというその名誉ある任務に挑むことへの誇りと責任を感じる一方で、それを果たすことができるのかという不安も日々増しているところです。しかしながら、諸先輩方がそうであったように、今はただ愚直に、幹部候補生としての本分を全うしたいと考えております。

4月に幹部候補生学校に入校してからは、生活は一変し、まさに激動の日々でした。しかし、古鷹山登山や各種競技会、遠泳、部隊実習など一つ一つが貴重な経験、大切な思い出であり、苦しさの中に確かなやりがいと達成感がありました。そして仲間の頼もしさ、絆の持つ力を改めて知ることができました。日々の生活に愚直に取り組んできた経験が、道半ばではありますが、「自覚を持った」今の私を形成しているのだと思います。



8マイル遠泳を達成して！

我々の日々の生活は、「総員起床」から「消灯」まで一分一秒たりとも無駄にできる時間はありません。一年間の教育期間の中で我々が修得すべきことは、計り知れず、すべて勉強の日々です。忙しい生活の中で時間に追われる日も少なくありません。自分を見失いかけた者もいました。しかし、我々に求められるのは、極限下での健全かつ冷静な情勢判断と、無駄のない合理的な行動です。将来我々が直面する事態において、部下からの無上の信頼を勝ち得て任務を達成するためには、必要不可欠な能力であり、その能力を日々鍛えているのだと思います。

幹部候補生学校での生活は決して楽なものではありませんが、防大出身者と一般大出身者が志を同じくする同

期として共に助け合い、日々立ち上がる高い壁をともに乗り越えています。その過程を通じて、我々の中には「誰かのために」という気持ちが確かに芽生えています。そして、それこそが幹部自衛官としての「自覚」の核であると確信しております。

防大生へ

4年生は、卒業そして幹部候補生学校入校が間近に迫り、新しい環境への不安が少しずつ芽生え始めているのではないのでしょうか。しかし、そのことに思い悩むよりも、4年生は、今やるべきことをしっかりと悔いの残らないようにやって欲しいと思います。陸海空の違いはあれども、幹部候補生学校での教育は、幹部自衛官になるためのプログラムがしっかりと組まれています。卒業ののちに、それぞれの道を愚直に歩むことが出来ればよいのです。焦らず、卒業のその日まで防衛大学校の最高学年としての責務を全うし、後輩によき伝統を継承して行ってください。3年生以下は、4年生の一挙手一投足をしっかりと見て、4年生を模範とし、防衛大学校と在校生のそれぞれが更なる高みへ達せられるよう一日一日を大切にしてください。卒業生として、みなさんを心から応援しています。

最後に、防衛大学校と卒業生の皆様方、在校生諸官の益々のご発展を祈念して拙文の結びとさせていただきます。



櫂に力をこめて！伝統の漕走訓練



「海の防人」原点は江田島！

「空の防人」を目指して



一般幹部候補生 空曹長
河野 健

こんにちは。航空自衛隊幹部候補生学校の河野候補生です。諸先輩方、同期生、後輩の皆様、日々の任務においてご活躍中のことと存じます。候補生を代表してご挨拶申し上げます。

入校してから時間が経過するのは早いもので4ヶ月が経過しました。4ヶ月という短い期間ではありますが我々は大きく成長できたと感じています。4ヶ月前は、これからの生活に不安しかありませんでしたが、今では毎日が充実しており、幹部自衛官としてやりがいを感じています。私がここに来て最も重要であると感じていることが2点あります。1点目は、我々は国を守るために戦う戦闘員であるということを実感すべきであるということです。ここ幹部候補生学校では、戦闘員としての覚悟、ことに臨んでは危険を顧みず任務を遂行することがいかに自衛官には必要かということを考えさせられる場面が多々あります。そのため4ヶ月前とは意識が大きく変わったと感じています。またここは、個人個人に多くの機会を平等に与えられています。当直学生や係学生、各種



60km徒步行進に臨む（隊容点検）

行事などを通じた指揮幕僚活動を経験します。また指揮官や幕僚をやっていないときにでも列員目線からのフォローシップを学んでいます。多くの行事があり区隊、中隊で団結することも多く、部隊としても成長していると感じることが出来ます。先日、60km徒步行進訓練を全員で完歩しました。今まで経験したことのない状況下で指揮幕僚活動を実施し、無事に終えることができたのは個人の成長だけではなく、同期の強い団結があったからではないかと思っています。私たちは理想の幹部自衛

Obamadai

官像に少しでも近づけるように、また、ここでの経験を生かし、戦闘員としての自覚をさらに高めるよう努力していく所存であります。

2点目としては、これからの自衛隊に求められるのは陸海空の統合運用能力の維持向上であるということです。現在日本を取り巻く安全保障環境は混沌としており、以前に増して陸海空自衛隊の統合運用をもって任務に挑まなければならない状況が生起しています。このため、まずは互いのことをしっかり理解することが重要であると考えます。1番身近な存在である同期生とのつながりを大事にしなければならないと感じています。だから陸海空の要員が一緒になって生活を共にする防衛大学校があるのだと思います。先日海上自衛隊幹部候補生学校に研修に訪れた際は、久しぶりの再会でやはり同期というものは大きな存在であると痛感しました。互いに声を掛け合い話すだけでも励まされました。また、皆が自らの要

員に誇りを持ちつつ、他の自衛隊を知ろうとすることは、これから協力して任務を遂行するために大事なことなのだと感じています。防衛大学校の生活では他の要員と多く関わることは限定的で、今思えばもう少し積極的に交流を持っておけばよかったと後悔しています。今後とも同期を大切に、力を合わせて共に陸海空自衛隊を発展させていくように努力していきたいと思います。

最後に、防衛大学校学生の後輩たちに伝えたいことがあります。それは、今の段階から先を見据えて生活してほしいということです。これは簡単なことではありませんが、自分が今後どのように変わって、そのためには何が必要なのかを考えておくだけでも、次の段階に進む時には大きく変わることができると思います。全ては自分の気持ち次第です。組織のため、自分自身のためにも今を大事にして、しっかりとした覚悟を持って防衛大学校を卒業することを望みます。



同期の海自幹部候補生に挨拶（江田島にて）



春の平城山！基本教練（蒼空への想いを秘めて）

小原台随想



陸海空それぞれの道に巣立つ・「故地」小原台の思い出！



壮年！組織を支える

防大現役同窓生において30期台の世代は、ポスト冷戦期に防大を卒業し、大きな時代の「うねり」の中で今まさに組織を支える「旬」の時期を迎えている。国内外の多様な任務を進め達成するため、部隊や司令部等において中枢機能を担い、各自衛隊の現在と将来を方向付ける役割を果たし始めている。この最も多忙で熱気に満ちた同窓生の群像にスポットを当て、訪問取材を行った。陸海空「壮年！組織を支える」群像である。

陸幕広報室長 松永 康則1等陸佐（防34期）

小原台「少林寺拳法」～「強靱」な陸自を創る～金沢14連隊長を経て

ポスト冷戦期の陸自幹部として

9月24日（水）に陸幕広報室を訪問するなり、陸上自衛隊中央音楽隊のフィンランド演奏訪問時の内容から、自衛隊音楽まつり等、自衛隊広報に関わる話題が熱く展開された。陸自広報の第一線に立つ陸幕広報室長の松永1等陸佐は、防大34期生、昭和61年4月の入校であり北海道苫小牧の出身。専攻は管理学と言うより、少林寺拳法との事。小原台での4年間は、まさに少林寺拳法に明け暮れた日々だったという。



陸幕広報室にて！

任官当時は、防大1期生が各自衛隊のトップたる幕僚長となり、第1次湾岸戦争の端緒となるイラクのクウェート侵攻が生じた時期、自衛隊も旧軍世代から防大等の世代に全面移行し、世界情勢もポスト冷戦の新たな火種が発生した時期に幹部自衛官としての道を踏み出した。職種は迷うことなく普通科を選び、初任地は新潟県の新発田駐屯地。間に2年弱の防大指導官時代を挟み、都合7年間を小隊長、3科の幕僚として陸自第一線の普通科部隊で尉官時代を過ごす。指導官時代、学生舎の個室化を

巡る議論の中で、「現場部隊では、全て部隊行動が原則。レンジャーの基本単位はバディーであり、そのチームを指揮するのが防大卒業後の幹部の姿じゃないか」と学生達に話した。当時は、最初的女子学生である40期生が4学年の時期であり、防大の歴史においても一つの転換期にあったが、その学生達も今では各自衛隊の中堅指揮官・幕僚として活躍していると目を細める。

ナホトカ号座礁事故時の災害派遣活動において実地の作戦幕僚としての経験を経た後、指揮幕僚課程を履修し、富士学校普通科部で若い幹部に戦術を教えた。その後、設立間もない政策研究大学院大学に研修入校する。陸海空及び内局から各1名が選抜され、各省庁からの研修者を合わせ15名、民間企業等から15名計30名程でグループが構成され、指導教官は日本近代史等の研究で著名な御厨貴教授であった。そのアカデミックな研修期間の後、久居駐屯地において実員170名の部下を預かる普通科中隊の指揮官となる。さまざまな人間模様を有し各年齢層にわたる隊員の其々の能力を引出し、中隊の力として結集する実感と醍醐味を感じた中隊長時代だったという。

「強靱」な陸上自衛隊を目指して（中央施策と現場の努力）

その経験を糧としつつ、陸自の防衛力整備の年度主務者として、陸幕業務計画班において平成20年度を主幹担当する。この年度は陸自の業務計画において初めて「強靱」の言葉を記載した年でもあった。「強靱」の言葉は、本格的な侵略事態への対応に加え、ゲリラや特殊部隊に



第10師団第14連隊長の着任観閲に臨んで

よる攻撃、島嶼部に対する侵攻、PKOや国際緊急援助活動、更には国内の大規模災害に至るまで、新たな脅威や多様な事態に的確に強固に対応し得る部隊の態勢を端的に表わす。この陸自の現在と将来を見据えたキーワード「強靱」を基軸に据え、業計班で陸自の新たな姿を作るべく事業を整え財務当局と予算折衝した。また、陸幕教育訓練部では、新たな教育訓練態勢の構築に向けこれまで蓄積した知見を傾注した。

そして第10師団第14連隊の第29代連隊長として金沢駐屯地に着任する。連隊長として実員700名余、駐屯地司令としては1000名に上る隊員を束ね、これまで中央施策として追求してきた「強靱」を現場部隊で具現するべく指揮官として陣頭に立った。各隊員がひたむきに練成し活動する姿に頼もしさを感じつつ、広範多岐に渡る任務に対応するための訓練内容も多彩なものであり、個々の隊員達に練成目標を達成するためのロードが相当かかっている事も実感したという。また、暗視眼鏡、対戦車誘導弾等、様々な装備品は、陸幕時代に予算要求したものであったが、それらの装備を実地に活用するためには、部隊の第1線において地道な訓練の継続が必要である事を肌で感じたと語った。



普通科連隊の指揮官姿

14連隊は、北陸3県を担任する郷土部隊として創隊以来の伝統と誇りを有し金沢市民等との協調関係を深める努力を続けてきた。駐屯地記念日等を通じて、北陸の防衛警備、災害派遣を担当し訓練に励む隊員の姿を、北陸、なかでも金沢市民に公開展示した。国民と共に歩む自衛隊。その想いを強くした連隊長としての経験は、そのまま陸幕広報室長の業務に生きてくる。

陸幕広報室長の今！

東北大震災の苛烈な状況下にあって、被災者に寄り添い真摯に災害派遣活動を実施した自衛隊の姿は、国民の記憶に強く刻まれた。その影響があるためか一般的な自衛隊に対する理解と関心の高まりは、広報室長としても強く感じるという。その中で「日本の安全保障を真剣に考える国民層への広報」「国外への情報発信による国際的信頼醸成の促進」の二項目を着意事項として、陸自の

広報活動をさらに前進させたいと鋭意語った。

音楽隊の活用を例に取っても、音楽祭りの公演回数を1回増やす事により安全保障に関心を寄せる層との接点をより多く確保し、フィンランド共和国「ハナミ国際軍楽祭」参加や音楽祭りでの4カ国共演（日、米、オーストラリア、フィリピン）により国際間の交流をより深化させ得るといふ。その語り口のなかに、陸自広報の将来に向けたビジョンが描き出され、組織を支える壮年世代の意気込みが強く感じ取れた。まさに、旬を迎えた陸自における同窓生の群像である。その熱気を強く感じた一時であった。

*この訪問取材の直後、平成26年9月27日（土）に、木曾御嶽山の噴火による戦後最大の火山被害が発生した。連日のニュース等において、自衛隊、警察、消防等の過酷な状況下における捜索活動の様子が報道されたが、その中で松本の第13連隊はじめ第12旅団のヘリコプター等、災害派遣に従事する陸自隊員の姿が映し出された。これらの映像の影に、陸幕広報室の活動を垣間見る思いがすると共に、松永広報室長はじめ陸自広報関係者の活躍を祈念した次第である。



キーワードは！「強靱」（陸自の広報パンフレット）

海自第1護衛隊群司令
齋藤 聡海将補（防33期）

小原台「水泳」～艦艇勤務「駆逐艦ウォーク艦長」～護衛隊群司令として

海・艦艇勤務に掛ける夢！

10月3日（金）午後、秋空は爽やかに晴れ横須賀駅から、かすかな潮風を感じつつ第1護衛隊群に属す艦艇群の威容を遠望する。翌週から、護衛艦隊訓練査閲に向け洋上訓練とのこと。急遽、取材の時間を設けていただく。海自の主力艦艇（ひゅうが、こんごう等）8隻からなる艦隊を統べる将官とは、どの様な人物か。陸上の司令部を訪れば、左胸に艦艇記章とともに水泳1級の記章が輝き、若々しく少年の如きさわやかな笑顔がそこにあった。思わず階級章を確認すれば、間違いなく金地に☆が二つ。

齋藤聡海将補はこの8月から新進気鋭の艦隊指揮官として第1護衛隊群を指揮統率する。昭和60年入校の防大33期生、出身は長崎県佐世保市。水泳部（高校時に国体参加）、国際関係論（人民解放軍の研究）を専攻し、小原台では、防大の水泳記録をいくつか塗替えた。候補生時代の江田島8マイル遠泳では、最後列で同期生の泳ぎをサポートするが心底疲れたとのこと、全員完泳が良き思い出と語る。



第1護衛隊群司令として（旗艦飛行甲板に立つ）

環太平洋コースの遠洋航海を経て、DDH「くらま」、北辺海峡防備のDE「ゆうばり」で、潮気を体に刻み、幹部候補生学校の幹事付（赤鬼）として後輩を鍛える。当時の候補生であった防大37期等の幹部達は、今でもその厳しい指導を懐かし気に語ってくれるという。DD「しまゆき」で潮気に磨きをかけ、長子誕生を目前に控えた平成7年3月、防大38期生等の実習幹部を指導するため、就役間もない処女遠洋航海の「かしま」に乗艦する。世界一周の航海途上、初めての子供誕生に立ち会う事は出来なかったが、新鋭練習艦と深淵とした実習幹部達の姿に母子の健勝を託したという。



洋上！旗艦の艦橋にて！

様々な出会いと修羅場！（喜びと痛み）

横須賀地方総監副官の勤務の後、1術校にて中級射撃課程を履修し、海に想いを寄せた最中、予期せぬ大蔵省出向の発令を受ける。主計局調整係として同世代の俊英な大蔵官僚とともに、各省庁関連経費を横断的に俯瞰しつつ、特定の案件（アイヌ等への助成補助等）について省内の調整、取り纏めを行った。国家予算の決定メカニズム、省内の意思決定プロセス等、海の防人にとっては、全てが新鮮な驚きと刺激であった。中でも、大蔵官僚と呼ばれる国家経営の中枢部に位置するメンバーが思いのほか人間味に溢れ、日本の現在と将来に想いを寄せ、国の安全保障に強い関心を有している事を知った。

2年間の霞ヶ関勤務を終え、勇躍、新鋭システム艦DD「むらさめ」の砲術長、砲雷長を務め、CS課程学生の後、海幕防衛課防衛班において海上防衛力整備の一翼を担う。その後の防衛班長時代も含め、厳しい予算の制約下、選択と集中の試行錯誤を繰り返し、護衛艦建造を断念する年度も交えた苦渋の選択が連続したという。

その後の海上勤務における最高の出来事が、平成18～19年に佐世保地方隊所属のDD「いそゆき」艦長として地方隊護衛艦合同術科競技に臨んだ際生じた。既に壮年期も過ぎつつあったベテラン「ゆき型」護衛艦11隻が全て初めて揃った術科競技において、第1位の成績をおさめた。射撃、魚雷発射、被害対処等全ての分野で高成績を上げ、130名余の乗員一同、沸きに沸いたと回想する。洋上に近接隊形で11隻が並走する写真を示しつつ、その表情は若き護衛艦艦長に戻り、今は任務を終え除籍された「いそゆき」艦内に掲示されていた競技会優勝のプレートを静かに摩った。

次の護衛艦隊幕僚においては、あたご事故に遭遇し、事故当日から数週間、現地の家族（遺族）と漁協対応におわれた。海難事故における当事者双方が傷つき苦しむ姿を垣間見て、運航安全に万全を期する想いを新たにしたいという。

事故の初動対処を終え、季節は冬から春そして夏に移ろい、米国海軍大学（Newport）の指揮課程に入校を命

ぜられる。49カ国51名のクラスメートは何れも母国海軍の紐帯として、国家の存立を支える意気に燃え、Navy To Navyの仲間意識を土台に親密なネットワークを醸成させた。手作りのアルバムには、各国の海軍士官との交流、エピソード、思い出が綴られ、厚さ10数センチのポリウムは、国家間の信頼醸成をそのまま物語る量感を有していた。

護衛隊群司令の今（“誠実”を旨として）

帰国後、海幕防衛班長、第14護衛隊司令、海幕教育課長及び補任課長を歴任し、満を辞して平成26年8月、第1護衛隊群司令に着任する。座乗する旗艦へのタラップを踏みつつ、去来する想いは何処にあったか。群司令着任時の訓示にも、四半世紀遡った小原台における第1大隊学生長勤務方針においても“誠実”との言葉が想いの中核を占める。その言葉は、様々な人との出会いで磨かれて来たものか。

海自や各国海軍とのNavyの絆は元より、居酒屋「お太幸」で一献傾けつつ薫陶を受けた土田國保元学校長、同期生として共に海に夢を託し途上で新たな分野にチャレンジするUBIC社長の守本正宏氏（国際訴訟における電子証拠開示の支援システム開発）等、その一期一会の出会いは幅広く、時にその出会いは時空を超える。

その時空を超えた出会いの中でも、米海軍トンプソン艦長の示した軍人としての“誠実”さは、強烈なインパクトがあったようだ。「ウォーク号の金メダル」の逸話は、山本横須賀地方総監の副官時代に接した米国駆逐艦乗員と長崎原爆で両親を失った少女との50年近くに渡る交流の物語である。当時の齋藤1海尉にとっては、朝鮮戦争時に触雷し多くの部下を失いつつ乗員の士気高揚として佐世保の中学生とソフトボールの試合を提案する駆逐艦艦長キャプテン・トンプソンも、同郷佐世保において天涯孤独の中にあっても健気に生きる少女美登子も、共に時を超え身近に感じる何かを有していたにちがいない。特に、自らつかえる山本安正海将が、トンプソン艦長のシーマンシップに感動し、その誠実な生き様を接点として日米Navy間の友好を培っていく姿に若き齋藤副官の矜持たる“誠実”が共振し、確固とした信念に高まったのではないか。荒廃した佐世保に生じた恩讐を超えた逸話に、海に生きる軍人の誠実さを察知し、自ら歩む指針の一つとした様に思われる。トンプソン艦長の生涯を自ら信じる“誠実”さに重ねて語る表情に熱き想いが宿る。海の防人として、“誠実”の言葉を掲げひたむきに進む。壮年、組織を支える齋藤聡海将補の今である。

株式会社UBIC 創立10周年記念祝賀会



左側：中谷元衆議院議員（24期）
中央：守本正宏社長（33期）
右側：齋藤聡海将補（33期）

* UBIC社長「守本正宏氏」防大33期（海幹候校卒業後、護衛艦勤務）

平成15年、株式会社UBICを設立。訴訟支援ビジネス分野唯一の上場企業経営者としてグローバル訴訟をハイテク技術で支援する。「元自衛官、法廷で日本を守る」の見出しで日経新聞（2013.1.7朝刊）でも大きく取り上げられた。

* 「ウォーク号の金メダル」について

米国駆逐艦ウォーク号の乗員と戦災孤児の交流を、孤児であった山地美登子氏自身が小冊子にまとめたものであり、その冊子を読んだ当時の海自関係者が米海軍関係者に逸話を話し、日米Navy相互の友好の輪が更に広がった。



第1護衛隊群DD「むらさめ」出港準備

海

空幕庶務室長(現第83航空隊基地業務群司令)
落水田 実1等空佐(防35期)

小原台「海トレ」～「救難パイロット」～
眼前の試練～今をひたむきに！

小原台での日々(「落研」と「海トレ」)

10月2日(木)午後、静謐な中にも緊張感の漂う空幕庶務室に室長の落水田実1等空佐を訪問する。昭和62年に防大35期生として入校。田に水を引く日本の原風景を想わせる苗字の由来を聞けば、鹿児島県霧島市出身で、西南の役に殉じた鹿児島の兵士達のために開墾した土地柄を受けた姓名という。大学は国立大学にも合格していたが、家庭の状況も考え防大を選ぶ。電気工学専攻。校友会はバドミントンと、少し間を置きやや微笑を浮かべ「落研(落語研究同行会)」と話す。人前であるが性分を何とか直したくて自らに負荷を課した。



空幕内のU-125A写真を背にして(大空を想う)

小原台での最大の思い出は、4学年時にカッター訓練の海トレ(海上トレーニング責任者)として2学年(37期)を練成して決勝まで残った事という。海トレの多くは海上要員がつくが、自分自身が2学年時に鍛えられた4学年の海トレ(33期)が航空要員であり、その姿に憧れ、4学年の早春時、全てをカッター訓練にかけた。卒業の9年後に、防大の指導官として40期台後半の学生を教育するが、4学年時の海トレ経験は大きく活かしたという。

救難機パイロットへの道(MU-2&U-125Aと共に！)

救難パイロットへの道も、決して平坦ではなかった。当時は、「Top Gun」「愛と青春の旅立ち」といった戦闘機パイロットを目指す青春を描いた映画が呼び水となり、同期生の多くがパイロットを希望した。奈良の幹候校においてもP適を有する1人の候補生として、パイロット希望のストリームに乗るごとく、飛行教育課程に飛び込む。しかし、第13飛行教育団におけるT-1ジェット練習機での飛行訓練中に、G-LOC(Loss Of Consciousness by

G-force；高荷重状態における一過性脳虚血による意識喪失)に陥る。その後、数ヶ月の精密検査とコースダウン(後続コースへの再編入)、訓練再開を経て、第1航空団でのT-4中等練習機による基本操縦課程に進んだものの、今度は椎間板ヘルニアを発症する。

ここで心機一転、ジェット戦闘機への道は断念し、救難機パイロットへの道を選ぶ。当時の救難搜索機MU-2は国産のプロペラ双発機で、それまでの操縦桿とキャノピー下に前後に位置するコックピットから、並列で操舵輪の操縦席へと操縦要領も大きく変わった。しかし、小牧の救難教育隊及び実働の芦屋救難隊パイロットとして、救難搜索の奥の深さを知るのに時間は要さなかった。重い操舵輪を目一杯回し、稜線や海表面を舐めるように旋回しながら救助を待つ人影を搜索する。正副パイロット、無線員、救難ヘリコプター、降下するメディック(救難員)等、救難チームの息が的確に合うか合わぬかが人命救助の成否を分ける。搜索訓練では、人形ダミーとはいえ命あるものとして、発見までの各種着意について妥協を許さぬ厳しさと叩き込まれた。C-1輸送機ロードマスターの滑落事故で緊迫した実働の救難搜索を経験した後、新田原基地沖のF-4戦闘機の墜落事故に直面した。ペイルアウトした搭乗員の一人は同期生。それまで感じたことのない動揺を必死に抑え、芦屋基地からMU-2を操り出動したところ、新田原基地から発進した同期生搭乗のV-107救難ヘリコプターが生存状態のパイロットを無事ピックアップした。無事に救難活動を達成した安堵と充実感を初めて感じた一瞬であった。



若き日の救難パイロット(MU-2と共に)

その後、新鋭のジェット救難搜索機U-125Aへの機種転換を行い那覇救難隊で新鋭機種の態勢確立に邁進していた平成11年8月15日未明、新田原基地をスクランブル発進したF-4がレーダー画面上からロストした。状況から積乱雲中を急上昇する状況での異変と考えられた。救難待機を新田原救難隊に移管して間もなくの呼び出しに応じ、未だU-125Aが運用されていない新田原基地に期待されて展開し、事故機搭乗のパイロットを東シナ海方面に搜索したが、生存者の救出には至らなかった。全力を尽くした救難搜索ではあったが、苦い思いを残す夏となった。これら救難の修羅場、命との接点を感じる経験

を経て、何時しか救難パイロットとして身を処する覚悟を強く持つに至ったという。

新たな試練（内閣官房・救難隊長・米国留学）と今！

その後、防衛大学校、百里救難隊、空幕運用課等の勤務を経て、平成18年3月、統幕防衛課付として内閣官房に出向する。内閣官房副長官補（安全保障・危機管理（安危））付としての勤務は、第一線の救難機パイロットにとっても気の抜けない緊張の連続だった。同年7月に北朝鮮はテポドン2号等の弾道ミサイルを打ち上げ、10月には初めての地下核実験を行う。総理・官房長官への適宜の報告や政府対応方針等の策定、安全保障会議の運営、国会対応、そして、じ後検討や体制見直し等に係る事務に総括先任として従事した。

翌年19年は、年初の防衛省移行に始まり国家の危機管理中枢における職務にも慣れた時期であったが、海自艦艇のインド洋派遣を規定したテロ対策特別措置法の延長を巡って政局が混乱した時期でもあった。11月に当該特措法が失効して海自艦艇はインド洋から撤収、翌年、テロ対策に係る新法が成立する辺りまでの間、国会を巡る安全保障論議は紛糾する。その渦中で総括としての恒常業務に併行した国会審議に係る所管省庁としての事務等、昼夜隔てぬ勤務が続き、体重は十数キロ激減したという。

2か年におよぶ内閣官房勤務の後、救難部隊の現場、しかも現場部隊指揮官として百里救難隊長の職につく。「自覚と向上心」を指導方針に掲げ、妥協することなく徹底的に部隊を鍛えた。とはいえ指揮官・管理者として、救難チーム・組織の力を常に即応状態に置く難しさ、そして責任の重さを実感した隊長在任期間だったと述懐する。救難隊は一つのファミリー、家族ぐるみの相互扶助が団結を高めるとの信条から、陸の孤島と呼ばれる百里に家族を帯同したと語り「子供達も父親の仕事が何か少しは理解してくれたのでは～」と微笑んだ。

次の任地は何処かと思ひ始めた矢先、またも予測を超えた場所が発令される。米国アラバマ州モントゴメリー。留学を命ぜられた米空軍大学は公民権運動で名高い米国南部キング牧師ゆかりの土地柄であり、大学でのレクチャーは最小単位15名（留学生3名を含む）のグループで進められた。日々100ページ余の資料を読み、その予習をもとに講義とディスカッションが繰り返される。正直なところ、それまで英語の素養を磨く機会に乏しく、40の手習い程度の英語練成では、日々の講義に付いていくのも精一杯で、生活自体が苦しい毎日だったという。丁度その頃、日本では東北大震災が発生する。過酷



百里救難隊時代（U-125Aによるラストフライト）

な環境において助け合い避難する人々、苛烈な状況で災害派遣活動を実施する自衛隊等の映像は米国でも数多く報道された。救難活動の第一線に立っているレスキュー部隊、特に育て鍛えた百里の家族（救難隊）が活躍している様子を耳にし、自身も頑張らねばと力が湧いたと回想する。

留学からの帰国直後、何時も自衛隊で活動する自分のことを気使い励ましてくれた母が逝去する。母への想いを胸中に置き、空幕運用課の部隊訓練を所掌する班長として勤務、空自救難部隊の現在と将来のあるべき姿を模索する。救難団司令を災害派遣の発令権者に指定するための訓令改正も実現させた。25年8月、現職の空幕庶務室長の任につく。航空幕僚長の膝元近く、空自を取り巻くあらゆる案件が押寄せ舞い込む中「今でも未熟と微力を痛感することばかり。日々、勉強です。これまでも、自分の目の前に現れた峠を一段一段登ってきました。これからも明るく前向きに頑張っていきたい。」と静かにかつ熱く語る。落水田1空佐のひたむきさを感じずる今である。

（同窓会広報 杉山伸樹 記）



家族（百里救難隊）の勇姿（UH60J & U-125A）



桜華会の今



パワフルに昼食を囲む市ヶ谷の桜華会メンバー

「女性も男性も輝く社会」の時代 において……

桜華会初代事務局長 吉田ゆかり (40期・航空)

新年明けましておめでとうございます。防衛大学校同窓生の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

この「小原台だより」が、次号からホームページ上の電子版になるということですが、このような記念すべき号に、桜華会も現況等を紹介させていただける機会を得ることができ、大変嬉しく思っています。

現在、安倍内閣は、国家戦略として「女性が輝く社会をつくる。」ことを最重要課題としています。これは、我が国の潜在力である「女性の力」が十分に発揮され、我が国社会の活性化・発展につなげ、女性も男性も輝く社会をつくることを目的としたものです。また、防衛省・自衛隊においても、今後も、少子高齢化・人口減少の進行が予測される中において、人材確保及びその有効活用

の観点からも、女性隊員の活用は重要視されているところでもあります。

そのような時代の流れの中でもありますので、“桜華会の今”から、防衛大学校女子学生の同窓生の「女子力」、「ウーマンパワー」を感じ取っていただけたらと思います！

さて、防大へ女子学生の受け入れが開始されたのは平成4年、あれからあっという間に月日が流れ、来年度末には女子1期生が卒業して20年になります。これまで毎年20～30数名の女子学生が卒業・任官し、現在では、女性自衛官として300名以上が幅広い職においてそれぞれ活躍しています。

一方で、自衛隊において女性自衛官が働きやすい環境が整えられているかということ、以前に比べ、意識や施策拡充は進んできていますが、未だ課題もあり、中にはやむを得ず退職している者がいるのも実情です。例えば、部隊における女性用の施設整備等も十分と言える状況ではなく、また、仕事においては原則として男女の差がないものの、家庭における役割は未だ女性が主となっているのが現状だと思います。そのため、仕事を続けていく場合に、特に、結婚、妊娠、出産、育児、そして、今後は介護も含め、どのように両立していくのか、誰もが様々な悩みを抱くこととなります。そのような時に、気軽に相談できたり、お互いに悩みを共有し合えたりできる場というのが必要ではないか、そのような思いから、桜華会は平成19年に発足し、今年で8年目を迎えます。

発会当初は、先輩が後輩たちのために何か役に立てればとの思いでしたが、今では、逆に、先輩が後輩から学ぶことも



<写真1> 集合写真 (平成24年2月21日 (土) 明治記念館にて)

あることを実感しています。一人の自衛官として、妻として、母として、そして、一人の女性として……人生の数々の経験には、防大の期別、年齢などでは計れないものがあります。



実は、私自身も、ある後輩の姿から、仕事と育児について学んだ一人です。その後輩の彼女は、多忙かつ重要な仕事をしているにも関わらず、どのようにしたら家族との時間を作れるのかをしっかりと考え、バランスを保って勤務していました。家族を持つ者として当然のことかもしれませんが、私はどちらかというと仕事優先で、アンバランスな生活をしてきていたように思います。特に、最近では、子どもが大きくなってきたので、「もう大丈夫だろう。」と勝手に思い込んでいました。恥ずかしい話ではありますが、数ヶ月前、息子にちょっとした変化があり、なんかおかしいなあと思いながらも、私はまた「大丈夫だろう。」と思っていたのです。しかし、保護者会に参加したときに、同級生のお母さんから、息子に何が起きていたのかを聞くことができました。息子は私のことを気遣っていたからなのか、そのことについて全く話してくれていませんでした。いえ、この考えさえもが間違っていることに気づいたのです。話してくれていなかったのではなく、子どもと十分に話をする時間を私が作っていなかったのです。週末など話をする時間があるときでも、疲れているときは、軽く受け流したりもしていたように思います。本当に反省しました。

一般的に、子どもは小さいときに手間が掛かると言われますが、大きくなって子どもは子どもであり、大きくなると小さいときは異なる手間が掛かることを痛感しました。そのようなとき偶然にも、その彼女の努力や考え方についての話を聞き、気づいたのです。私自身も、毎日、ちょっとした時間でも確実に息子と会話する時間を作るようにしようと考え、生活を見直しました。その結果、最近では、私の心にはこれまで感じたことのない、ちょっとした心の余裕、温かさと充実感を感じることができています。このような気持ちを感じながら仕事ができるのも、その後輩の彼女が私に大事なことを改めて気づかせてくれたこと、そして、職場の上司をはじめ、先輩、同僚、後輩等の周りの皆様が理解してくれて、そして、協力してくれたり、支えてくれたりしているからであります。本当に、心から感謝しています。そして、そのような気持ちをインプットできると仕事にも好影響であり、相乗効果が生まれるように思います。

自衛官として、そして、一人の社会人として、責任をもって「仕事」をやることはもちろん大切ですが、「家庭」

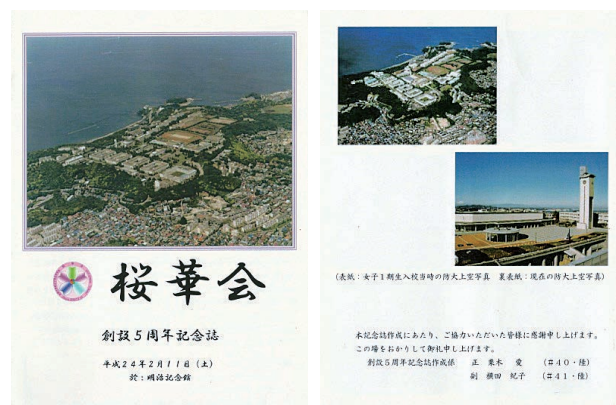
でも、そして、私が保護者会で貴重な話を聞いたように、「地域社会」でも貢献していかなければいけないと思っています。

さて、桜華会の活動ですが、平成24年2月には、「防衛大学校女子学生入校20周年・桜華会発会5周年記念祝賀会」を明治記念館において開催しました(写真1)。桜華会は、子どもと一緒に気軽に参加できる会でありますので、恒例のキッズスペースが設けられ、約120名の会員と約20名の子ども達が集まりました。今回は、5周年記念ということもあり、対番系列表や制服等の変遷が掲載された記念誌(写真2)や記念品として会員オリジナルデザインのネクタイピン(写真3)を制作しました。ネクタイピンには、3つの桜は防大の陸海空の要員を、5本のラインは桜華会5周年を表現したデザインが採用されています。

記念誌にも掲載していますが、桜華会の会の名称「桜華」には、「花王と称された日本の国を代表する花である“桜”、女性らしさを表し、女性として“華”やかに活躍し、人生を謳歌(“おうか”)する。」という意味が込められています。桜華会の会員である防衛大学校女子学生の同窓生それぞれが自らの能力と意欲を発揮し、「女性も男性も輝く社会」の一端を担っていきたいと思っています。

最後に、桜華会はまだまだ歴史の浅い会ではありますが、桜華会会員の一人一人がそれぞれの花(人生)を華やかに咲かせつつ、桜華会発会10周年、20周年……と歴史を刻んでいきたいと思っています。また、引き続き、同窓会本部をはじめ、各期生会等との連携を保持しながら、会員相互間、そして、在校生(女子学生)とも親睦・交流を深めていきたいと思っています。

同窓会会員の皆様には、引き続きご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。



<写真2> 桜華会の記念誌



<写真3> 桜華会のネクタイピン

「木更津からこんにちは♪」

桜華会会長

塚口 千枝(旧姓：平松)(40期・陸上)

小原台だよりをご覧の皆さんこんにちは。桜華会会長の塚口です。

今回、小原台だよりへの投稿という貴重な機会をいただきましたので、防大OGとして、仕事と育児に奮闘する私の近況をご報告したいと思います。(興味ないかもしれませんが、最後までお付き合いください！)

まずは、私のことをご存知ない方も多いと思いますので、簡単に自己紹介をさせていただきます。熊本県出身(済々黌高校出身です。)、防大40期、管理学専攻、フィールドホッケー部、現在は木更津駐屯地にある陸上自衛隊特別輸送ヘリコプター隊運用訓練幹部として勤務しています。私生活では、男の子3人(10歳、7歳、5歳)の母親として、日々戦っています。

私が所属する特別輸送ヘリコプター隊は、第1ヘリコプター団の隷下部隊であり、国賓等の輸送を任務とする陸上自衛隊唯一の部隊です。保有するEC225LPは、仏製(エアバス社)の機体であり、機内(客室)は、革張りシートに備え付けのテーブルがあり、頭上にはモニターが設置されているという、軍用機とは思えない作りになっています。今年3月、この部隊に配属となり、現在機種転換中の身ではありますが、これまで操縦してきた航空機とは全く違った特性を持ち、苦労しつつも、最新鋭の航空機に搭乗できる喜びを噛み締めています。

運用訓練幹部としては、今年度、第1ヘリコプター団の訓練検閲を受閲する年として、特別輸送ヘリコプターの運用については素人である私を運用訓練幹部に迎え、部隊としても私自身も厳しいスタートになりました。しかしながら、9月の検閲に向け着実に訓練を重ね、所望の成果を挙げることができたと思っています。私事ながら、しばらく演習とは無縁の役職が続いていたこともあり、懐かしさとともに、新鮮な気持ちで取り組むことができました。平成28年度には日本においてサミットが開催される予定です。特別輸送ヘリコプター隊の活躍が期待されるビッグイベントであり、部隊としても、私自身も更なる能力向上を図っていかなければならないと強く感じています。

当初の自己紹介でも述べましたが、運用訓練幹部、航空操縦士として勤務しつつ、私生活では、3人の男の子の母親として日々育児に奮闘しています。子を持つ親なら誰しも同じだとは思いますが、我が子はとにかく可愛い。無条件の愛情を注ぐことができます。しかしながら、時に悪魔のように見える。実は怪獣？妖怪？なのではないかと目を疑うこともしばしば。一人くらい味方になる女の子を産みたかったと心の中で何度咬いたことか。でも、子供たちは、親を100%信頼して、全てをさらけ出

して向かってくるので、こちらも手を抜けません。全力投球です。悲しいことは何分の一に、嬉しいことは何倍にもなります。両親共働きで寂しい思いをさせている負い目を感じながらも、楽しまないと損だなと自分に言い聞かせ、日々頑張っています。

とり止めのない文章で、私の近況を書いてきました。桜華会会長として、それらしいことと言えばこのような寄稿くらいで、活動は事務局にお任せ状態ですが、色々な分野で様々な活躍？をする防大OGの姿を見せることで、桜華会に多少なりとも貢献ができていないのではないかと思っています。

蛇足ですが、私の住む千葉県木更津市は、陸・海・空自衛隊が所在する全国でも数少ない自治体です。また、アクアラインを利用すれば東京から40分ほどの距離にあり、以前テレビで放映された「木更津キャッツアイ」で馴染みのある方もいると思いますが、最近では首都圏最大級のアウトレットモールもオープンし、週末は行楽客で賑わう活気のある街です。機会ありましたら、是非木更津の風を感じに来て下さい!!!

「志を同じくして、小原台に学ぶ後輩達へ」

久原 苑子(旧姓：北澤)(51期・海上)

「この道を行けば、どうなるものか。危ぶむなかれ、危ぶめば道はなし。踏み出せばその一足が道となり、その一足が道となる。迷わず行けよ、行けば分かるさ。」

この言葉は、一休宗純の名言として元プロレスラー、アントニオ猪木氏が引退会見で引用し、一躍有名になりました。私自身、防衛大学校を卒業後、任官、部隊勤務、結婚という様々な場面において、これまで何度も困難や壁にぶつかり、道に迷いそうになることもありましたが、振り返ってみると仕事や家庭を含め自分が人生という道を歩くための真髄は、まさにこれではないかと思っています。

私は、平成19年3月に防衛大学校を卒業し、1年間の幹部候補生学校生活及び約半年間の遠洋練習航海を経て艦艇幹部としての道を歩き始めました。これまで毎年転勤を繰り返しながら4隻の艦艇及び練習艦隊司令部で勤務しましたが、そのうちの3年間は遠洋練習航海の随伴艦、司令部の勤務であったため、一年の半分を海外で過ごす日々を送ってきました。随伴艦勤務の際は、寄港地までの約1週間、起床後から夕方に至るまで実習幹部に対する訓練指導を行い、彼らの生活指導に加え、深夜を含めた航海当直、自己の仕事もこなす必要があるため、常に

忙しい日々を送っておりました。また、練習艦隊訓練幕僚補佐の際は、統制訓練（「かしま」及び随伴艦の合同訓練）の計画、変更に関わり、わずかな在泊期間に各国海軍との親善訓練の調整や海軍士官の「かしま」への受入れ、有識者及び外務省職員の乗艦研修等、様々なことを担当しました。これまでの勤務において、人に迷惑をかけたくないという気持ちが空回りし、自分で何とかしようと意地を張った結果、仕事を全て抱え込み、八方ふさがりの状態になることや調整力のなさを露呈してしまうことが多々あり、幹部として勤務を続ける自信を喪失して悩んだ時期もありました。しかし、多くの尊敬すべき先輩方に助けていただくとともに、信頼できる部下との出会いや様々な経験を得て、少しずつではありますが成長することができ、諦めずに続けてきて良かったと考えております。

現在は再び江田島の地に帰り、幹部候補生学校英語教官として勤務する傍ら、分隊長として候補生を指導する立場にあります。候補生が様々な不安や悩みを抱えながら日々の生活に奮闘し、成長する様子を見守り、自身がこれまでの自衛隊勤務やその中で経験した様々な困難や悩みから得たことについて、少しでも彼らに伝えるべく努力しています。

さて、分隊長等と話をする中で男女及び出身大学を問わず候補生が抱えている悩みとして、自己の将来の仕事や家庭をもつことに対する不安があります。大学までは決められたルールに乗ってきた彼らにとって、自衛隊に骨を埋めるという決断は人生における大きな転換点の一つです。候補生学校の生活は、ある程度のストレスを強いられる環境下での勤務に耐え得るよう、常に時間に追われる厳しいものであることに加え、遠洋練習航海後に控えた部隊勤務は、彼らにとって話を聞くだけではイメージを抱きにくい未知の世界です。また、知識や経験も不足している中で部下を持つことに不安を感じ、「果たして自分はそのまま幹部として勤務していくことができるのか」と卒業後、遠洋練習航海に行くまで悩み続ける者もいます。7年前の私も彼らと同じように悩み、部隊勤務では上司に沢山迷惑をかけ、数々の恥ずかしい失敗をしてきました。しかし、そのような経験をしたからこそ、今の自分がここにあると考えております。

候補生の中には、現在交際している相手と将来を考えている者も少なくありませんが、候補生学校の生活では満足に連絡を取り合うことができるのは休日しかなく、遠洋練習航海に出発すると半年間会うことができません。その後の勤務においても長期出港や職種にかかわらず転

勤を繰り返す生活となるため、家庭を持つことが可能であるか不安に感じている候補生が多くいます。特に女性については、相手の理解や家族等の協力なくして仕事を続けていくことはできないため、結婚、出産は海上自衛隊生活の中で大きな転換点になります。

私は、同じく艦艇幹部である主人と一昨年結婚しました。結婚までは常に遠距離恋愛であり、例えば私が遠洋練習航海に行き、主人がアメリカに留学しているときは、地球直径分ほど離れた場所から文通して連絡を取り合っていました。女性の社会進出に伴い様々な制度が改善され、自衛隊においても少しずつ女性が結婚、出産後も仕事を続けられる制度が整いつつありますが、現実問題として育児期間から子供がある程度成長するまでの間は、両親等の助けなしに共働きは難しいと感じているところです。私自身、今後家庭と仕事を両立させつつ、キャリアを重ねていくことができるか不安に思うこともあります。しかし、育児をしながら仕事を続けている先輩方の姿を目にすると、応援してくれている主人の期待に応えるためにも、この道を「危ぶむことなく」、「迷わず行こう」という気持ちになります。

女性の艦艇職域がなかった時代から、現在は女性も護衛艦で勤務することができるようになり、今後益々女性が活躍する場は増えていくものと思います。これは、一重に私たちの諸先輩方が諦めず努力して道を切り開いて下さったからにほかなりません。今後も勤務を続けていく以上、家庭と仕事の両立に加え、様々な困難が待ち構えていることと思います。細く険しい道かもしれませんが、何事も歩んでみないことには道はできません。確かにこれまで歩んできた道も様々な困難がありましたが、その中には多くの喜びや幸せがあり、困難であったからこそ得ることができたものもありました。これから歩む道もきっと幸せは沢山あるものだと信じ、歩み続けていこうと考えているところです。

最後に、将来や家庭のことに悩んでいる後輩達、特に女性の後輩たちに次のメッセージを送りたいと思います。
「迷わず行けよ、行けば分かるさ」



「卒業後を振り返って」

古田 純子(旧姓：桑原)(45期・航空)

防大45期として卒業してから、既に13年も経ってしまったことに、自分のことながら改めて驚かされます。あっという間に、気づけば3佐に昇任させていただき、私生活では、娘も今年で11歳になります。

卒業してからこれまでの日々は、目の前にある直近の課題に取り組むことに精一杯でした。今、この時点においても、夏に転勤したばかりの新しい職場での仕事に取り組むことに必死ですし、仕事が終わって家に帰れば、娘の明日の宿題をチェックすることに時間を割く毎日です。恥ずかしながら、この歳になっても、じっくりとこれまでを振り返ることや、先の展望について思い描く余裕は、まだ持っていません。だからといって、全てが上手くこなせているかというそうではなく、遅くまで職場に残れないときは、同僚や先輩に待機を変わっていただいたり、家での食事も出来合いのものばかりと、お世辞にもきちんとした3等空佐、母親、妻とは言えない日々を送っております。

このような私ですが、今回、貴重な機会をいただいたので、これまで勤務してきた間に心に留めてきたことを、いくつかご紹介させていただこうと思います。

1つ目は、心に残っている先輩の言葉です。子供が出来たと分かり、仕事を続けようかと迷っていたときに、恩師からいただいた言葉があります。それは、「仕事を辞めるのはいつでもできる」という一言でした。これだけを聞くと、「なんて後ろ向きで無責任、しかも投げやりな」と思われるかもしれませんが。しかし不思議なことに、「いつでも辞められる」と肩の力を抜いてみると、逆に「もう少しがんばれるかな、がんばろう」と思える

ものです。絶対に仕事を続けていかなければ、と気合いばかりが先行してしまっていたら、逆に幹部としての仕事を責任を持って続けることは、困難であったかもしれません。

単に肩の力を抜くだけではなく、日々、自分に言い聞かせていることが、もう一つあります。それは、職場の上司、先輩、同僚、時には後輩、そして何より家族の理解と協力があって、この仕事が続けられている、という事実を忘れないことです。「いつでも辞められる」という言葉の裏に感じさせられるのは、自分の代わりとなる人はいくらでもいるということです。子育てをしながらの仕事は、客観的にみて、生産性は低くなります。決して卑屈になっているのではなく、一般論として、心身の健康な人が、そうでない人よりも生産性が高く、また、一般論として、何の憂いなく仕事だけに集中できる隊員の方が、効率よく仕事出来るのは、至極当たり前のことだと思います。私は決して、ご家族の介護をされている方や、子育てをがんばっている方、病に伏されている方を批判しているわけではありません。むしろ、自分が仕事以外に気を留めるべきことを多く持つ身であるからこそ、このように仕事ができる環境を当たり前と思わず、周りで理解を示し、協力してくれる仲間に対し、人一倍、感謝の気持ちを持たなければ、と思うのです。

女性自衛官として仕事を続けていると、気づかないうちに鼻が高くなってしまふことは、少なくないように感じます。東日本大震災以降、自衛官に対する社会一般の評価はこれまでにないほど高く、また、大きな期待も寄せられていると思います。最近、安保法制について様々な議論が起こっていますが、その中でも自衛官という職に対しては、多くの方々が高い評価を寄せてくださっているように感じます。その中でも、10%に満たない女性自衛官に対しては、珍しさとともに、その存在だけで大きく記事に取り上げられたりすることも、少なくありません。しかし、当たり前のことですが、重要なのは単に女性幹部自衛官として存在するだけではなく、どれだけ仕事を達成し、社会に貢献できたかということです。私にとって、「いつでも辞められる」ということは、ともすると自分に甘くなりがちな自分自身を戒める言葉になっているように感じます。

と、「そんなのは当たり前だ」とご批判をいただくようなことばかり書いてしまいました。しかし、肩の力を抜いて、高くなった自分の鼻を自分で折ること。そして、自分を支えてくれる仲間感謝すること。これらはこれからも、私が幹部自衛官としての仕事を続ける上で、心に留めておくべきことであると考えます。目の前の仕事と娘の宿題チェックに追われる毎日ではありますが、これからも自分なりにがんばっていきたいと思います。



平成26年度 第62回開校記念祭 特別記念行事

●OPCW初代査察局長 秋山一郎元陸将補(防大15期)の記念講演● (防衛大学校記念講堂 平成26年11月8日(土)午後)

化学兵器廃絶へ向けたOPCWの活動

昨年、化学兵器禁止機関(OPCW)はノーベル平和賞を受賞し、初代査察局長を務めた元陸将補・秋山一郎氏は同年12月10日のオスロにおける授賞式参列の栄によくした。

第一次世界大戦時、イーブルの戦いにおいて初めて毒ガスが使用されて以来、その凄まじい惨禍を防止するため、長い紆余曲折を経て1997年に化学兵器禁止条約が発効した。その実効機関としてOPCWが設立され、その主要任務である査察を確実に実施するため、職員全体の約4割が査察官からなる機動的な組織としてスタートした。

秋山氏は57カ国出身の230人の部下と査察局をゼロから立ち上げ5年間で1,200回以上の査察を24時間体制で実施した。その後、秋山氏は査察局長を一端離任しそのポストは約2年間空席となったが、査察局長はOPCWにおいても最も重要な局長ポストであり、高い実績を残した秋山氏への国際的な期待もあって再び査察局長に就任した。秋山氏は、2007年8月に自衛官を退職した後も、引き続き2009年7月まで査察局長を務め、その在籍10年間においてOPCWに多大な貢献を留めた。

現在、化学兵器禁止条約加盟国は191カ国(シリアは190番目の加盟国)、化学兵器保有国(8カ国)のうち3カ国が廃棄を終了し、約71,200トンの化学剤の約81%が処理されるに至っている。

<若人の城~顕彰と蒼空の花弁~>

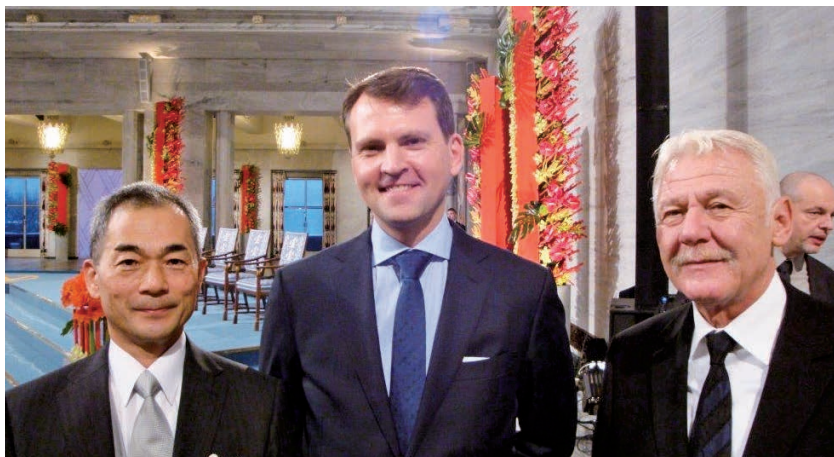
開校祭第1日目の午後、記念講堂横の顕彰碑前は厳粛な空気に包まれ、殉職等志半ばで逝去された同窓生の御霊に対し、顕彰碑献花式が行われた。曇天晩秋の静けさは愁いを帯び、國分学校長、永岩同窓会長、ご遺族(山岳部)、各期代表、学校職員と共に、記念講演を前にして秋山一郎氏が献花を行った。儀仗、吹奏の学生達による斉一かつ凜然とした挙措動作が、御霊の有した想いや夢を新たにさせた。

記念講堂エントランスではステンドグラス「若人の城」を背にして、古典ギター部10名余が奏でる旋律に講演聴講を待つ人々が心を和ませた。「海に見える街」の旋律は、ゆっくり低く高く、桜花に託した若人の夢を、輝く海に紺碧の空にやわらかく吹きあげる風のように弾かれた。

ノーベル平和賞授賞に輝く活動に防大同窓生が足跡を残した事実は、志を内に秘めた一片の花弁が蒼空の高みに吹き昇る景色を想わせる。過去、現在そして未来に向けて、ひたむきに小原台で育んだ想いや夢を更なる高みに飛翔させるべく、その一助として秋山一郎氏の記念講演は行われた。

<オスロの臨場感を共に感じて>

講堂中央の大画面に、授賞式が挙行された由緒あるオスロ市庁舎のホールが現れ、授賞式開始を告げる厳かな中にも華麗なトランペットが吹奏される中、OPCW関係者の中に秋山氏が映し出された。その臨場感を聴講者(数100名の在校生と一般の開校祭来訪者)と共有しつつ、秋山氏は語り始めた。



ノーベル平和賞授賞式にて(オスロ市庁舎ホール OPCW関係者と共に)

左側 秋山一郎氏
中央 査察団長 Scott Cairns (カナダ軍大尉)
右側 前検証局長 Dr.Horst Reeps (元独陸軍大佐)

<ノーベル平和賞授賞式に招待されて（一防大卒業生として考えたこと）>

～人生における『何故』（軍人の平和に対する貢献）～

私が授賞式を終え帰国した直後、「秋山さんは元自衛官（軍人）でしょ！それが何故ノーベル平和賞なの？」という声を聞き愕然としました。『自国の安全を守り、機会があれば、世界の安全と安定のために貢献するのが自衛官として当然果たすべき役割』と考えていたからであり、正直に言えば大変意外でした。平和とは、与えられるものではなく、多大な努力により創り上げるもので、その努力の中核に軍人の活動があることは国際機関で働く者にとって疑問を挟む余地も無い程、自明の事柄であったからです。

人生には様々な5W1H（何時、何処で、誰が、何を、どの様に、『何故』）がありますが、最も重要な『何故』に焦点を当てつつ「秋山がそこにたどり着いた理由」をお話して、「軍人が世界平和に貢献している事実」を皆様にお伝えしたいと思います。

～防大で育まれた事柄（恩師の言葉と教養に根ざした良識）～

防大の恩師で、「現代史研究会」でご指導いただいた故上田修一郎先生（当時西洋史の教鞭をとる助教授、米国土官学校訪問制度の創始者）は、「防大の卒業生が何時か将来きっと自衛隊と外国軍を合わせた部隊を指揮する時代が来る」と言われていました。OPCWの査察局長として57カ国230名の部下を指揮出来たのも、先生に示唆いただいた動機付けが根幹にあったと強く感じます。先生の語られた『夢』の一端でも実現出来たことは無上の喜びです。

また、在学時代から山本七平氏の著書は沢山読みましたが、特に『日本はなぜ敗れるのか 敗因21ヶ条』を事あるごとに繰り返し読みました。耳が痛い事ですが、その作中、先の大戦における敗因の一つに「自己の絶対化」が挙げられています。精鋭の名のもとに必勝の信念で練成した戦技・戦法を絶対視し過ぎ、彼我の状況を冷静・客観的に分析し自己を相対的に評価しながら新たな戦略戦術上の工夫を成すことが出来なかった。

その背景に軍学校の教育において、軍人としての専門教育に偏り、真の「良識=常識」を修養する教養への視点が欠けていたと記しています。教養とは、事に臨んで至当な判断を下す基盤となる常識です。防大はその「建学の精神」において「まず良き市民・紳士たれ！」が教育の原点にあり、在校間に世界共通の良識を身に付ける事を重視します。私自身の経験においても、防大卒業後の自衛官としての専門性を積み上げる基盤として、小原台で育んだ教養は極めて有益であり、留学やOPCWでの活動等、国際的な交渉・ディベートにおいても相互の信頼を高め問題に立ち向かうことが出来る要因となりました。

～どうしてそこにたどり着いたのか？～

人は自らの人生や経歴の中で、何度も偶然や様々な岐路に遭遇し、その道程を歩んでいきます。私も自分の道程を振り返り、その岐路を見出します。

多分に運命的でありましたが、国内の留学が困難な時代にイリノイ大学院の「Teaching Assistant」の奨学金をもらって留学出来たことが一つの契機となりました。教養課程の「化学」の2クラスを担当したのですが、医学志望の学生が「A」成績がほしいため「B」をつける毎日のように陳情に來ます。単位の半分が「A」でなければ自分自身が留年させられかねない状況にあって、必死で不慣れな英語を駆使してその学生達を説得して帰らせた事を覚えています。窮すれば通ず。それ以来、英語によるディベートは苦にならなくなり、国際機関で意思疎通を図る上でその英語力が大いに役立ちました。

また、ジュネーブ軍縮会議へ化学兵器専門家として派遣され、国内でも陸幕勤務（予算担当、中期主務者、教育班長、化学室長）、新潟地方連絡部長等の幅広い実務経験を経て、そこで得た知見をOPCW査察局長の業務に活かすことが出来ました。幹部自衛官として受けた各種学校における人材育成の成果にも、国際機関での指揮・管理活動を通じて改めて感謝した次第です。

～OPCW査察局長として～

最初の査察局長としての勤務は、OPCW設立直後の1997年から2002年の5年間であり、まさにゼロから化学兵器等の査察体制を整える任務に直面しました。57カ国出身の230人の部下と共に、全員夏季休暇返上で化学兵器施設と化学産業施設を検証し、査察団を早朝・深夜に見送り出迎える状況が続きました。その過程で、査察局長として身を処した際の着意は、全て防大学生と幹部自衛官の経験を通じて学んできた事ばかりでした。すなわち、



OPCWの旗と共に！

Obamadai

- ・現場主義（Walking Management）を旨として、必ず自分で再確認
- ・個々の査察官への親身な指導、報告受けと評価の記録（昇任選考用）
- ・事故は率先して指揮官、管理者が主導して解決
- ・「責任は指揮官！手柄は部下！」を旨とした統率

といった事項であり、実行する際の苦労は多々ありましたが、各種案件に対処する際の基準軸になったと思います。

また、査察局長となって、多国籍の部下達の融和を図り価値観を共有するために、全く日本のですが益暮れの年2回、自腹で浪花節的無礼講の宴会を開きました。国際機関でその様な宴席は極めて珍しく、感謝されると共に胸襟を開いてくれました。人と人の心の触れ合いを大切にする想いは、防大や陸上自衛隊で育てていただいた無形の財産と感じています。

陸自化学学校長の勤務の後、2度目の査察局長の職についたのは、2004年から2009年の期間でしたが、その際、初回の査察局長時とは180度異なる問題に遭遇しました。新旧交代政策に基づき100名の熟練査察官を5年間でリストラする必要に迫られたのです。その様な状況下において、低下した士気の高揚と鬱積した不信感の払拭が最大の課題でした。

査察ノウハウ伝授のため優秀者を最後まで残す段階的リストラ計画を作成し、毎年20名の離職予定者にも事前通告して、再就職を局が総力で支援しました。連日、



OPCWオペレーションセンターにて！



OPCWの査察局長室にて

リストラ予定者の相談を受け、親身に帰国及び具体的な再就職支援活動を行ったのです。また、同時に新規採用の諸作業を進め、査察業務と並行して新規採用査察官の訓練及びOJTを推進しました。

これらの要員リストラの過程において、何とか局内の士気を回復出来たのも約半数が軍関係者であり共に価値観と思考過程を共有出来たことが大きかったと思います。ある査察官が「局長の命令なら何処へでも査察に行きます！！」と言ってくれたのが、心の支えとなりました。

今回の受賞にあたっては査察チームを中心としたメンバーが、国を超えてお互いに認め合いひたむきに活動した事が評価の大きな要因になったと思います。

～振り返って、何が役立ったのか？～

既にお話しました様に、防大で育てていただいた真の教養に基づく世界共通の『良識』が全ての基礎にあると思います。日本文化を体現しつつ、異文化も尊重出来る良識が無ければ、国際的環境の中で仕事は出来ません。防大で身に付ける「良識」「リーダーシップ」「語学力」等の基礎の上に、自衛官（軍人）としての世界共通の価値観・能力を専門力として積み上げていくのです。加えて、日本人としての勤勉さとチームワークに裏打ちされた能力は世界に誇り得るものが有ると思います。私も、この小原台に学び幹部自衛官として奉職しながら身につけさせて頂いたこれらの手柄が本当に役立ったと実感しています。

現在、日本が提唱する「積極的平和主義」に基づく国際貢献を推進していくためには、高い教養に支えられた自己（日本人としてのIdentity）の確立、専門力、英語力（Working Language）、ディベート力そして**ネアカ**（**ネ**アカ、**愛**国者、**専門力**！）の素養が必要です。この小原台に集う防大生諸君が、これらの能力を磨くべく自己の充実を図っていく事を祈念します。自らの想いや夢を見つめ修養していくに当たって、今日お話しした内容が役立てば幸いです。

<国の護りに連なる若人達へ>

秋山氏の講演に続き聴講した在校生から多くの質問がなされたが、いずれも秋山氏の想いを継いで頑張る気持ちが溢れた内容であった。講演の内容に触発され熱った頬に夕闇迫るテラスの空気が心地良い。国の護りを表した兜のモニュメントを背にして、少林寺拳法部の演武が凛々しく眼前に迫った。澁漣とした武の構えと発声に、秋山氏の「平和は創るもの！軍人は世界の平和に貢献する！」との言葉が思い起こされた。国の護りを継承する若人に託す言葉が演武の発声に共鳴した。『和～誇りを胸に～』今年度の開校祭共通テーマである。平和を守ることを誇りとして邁進するテーマに相応しい開校祭記念講演であった。

（同窓会広報 杉山伸樹 記）

<秋山一郎元陸将補の略歴>

- | | |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1971年(昭和46年) 防衛大学校卒業(15期 陸上要員)
(儀仗隊 現代史研究会)</p> <p>1972年(昭和47年) 3等陸尉任官</p> <p>1979年(昭和54年) 米国イリノイ大学大学院修了(理学博士)
帰国後、技術研究本部、化学学校研究部で勤務</p> <p>1986年(昭和61年) 2等陸佐
陸上幕僚監部勤務(化学室、装備計画課、教育課勤務)</p> <p>1990年(平成2年) 1等陸佐
新潟地方連絡部長、陸上幕僚監部装備部武器化学課化学室長等を歴任</p> <p>1997年(平成9年) OPCWの初代技術事務局査察局長として出向
(陸将補)
日本国内においてはオウム真理教第7サティアン 解体撤去の査察統括</p> | <p>2002年(平成14年) 陸上自衛隊化学学校長兼大宮駐屯地司令
OPCW勤務の功績により第1級防衛功労賞を授与</p> <p>2004年(平成16年) OPCW技術事務局査察局長として再度派遣</p> <p>2007年(平成19年) 陸上自衛隊を勸奨退職</p> <p>2009年(平成21年) 事務局長から慰留されたが、勤務年限規定を遵守してリストラした部下達とともに査察局長を退任
じ後、神戸製鋼所顧問</p> <p>2013年(平成25年) 化学兵器禁止機関のノーベル平和賞受賞列席</p> <p>2014年(平成26年) 平和・安全保障研究所客員研究員</p> |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

●開校祭記念講演の点描●



防衛大学校創立50周年の際に防大同窓会から寄贈「若人の城」(原画は平松礼二画伯作)



ギターの響きがステンドグラスと共鳴
～桜花! 高みに吹き上がるごとく～



モニュメント「国の護り」と少林寺拳法部の演武



暮れなずむ本館の防大記章



顕彰碑献花式に臨む儀仗隊

地形を見て、過去と近未来を描く

君塚 栄治(20期・陸上)



防衛大学を卒業して約40年、日曜の大河ドラマ「軍師官兵衛」を楽しみに見ているしているこの頃です。仕事で行く各地で、足を延ばして歴史探訪をしたり、神社仏閣を参拝して、ややスタンプラリー化した御朱印をいただくのも趣味の一つ。

先日は、いずれも関西地域だが、JR伊丹駅近くの有岡城址とJR山崎駅近くの天王山に立ち寄った。両方とも最近の大河ドラマのロケ地である。摂津の国の有岡城は、武士として勇猛果敢な半生と、対照的な生にこだわった生涯を送った荒木村重の居城で、官兵衛が幽閉された牢獄をつぶさに探索したが、それを感じさせる史跡は残っておらず、そのうえ、城の保存の状況は良くなかった。また、天王山は、天下分け目の合戦が行われた地で、勝敗の分かれ目の言葉の由来となった「天王山」である。現地の説明版に従い、当時の羽柴秀吉軍約2~4万と明智光秀軍約1~1.6万の布陣を地形の上に当てはめて、展望地から当時の戦闘を思い描いた。地形に兵を載せてみると、思った以上に戦闘の実相が描けるものだ。永年の職業柄の戦術眼からくるものであろうか。それにしても、このような知的楽しみを妨げる蚊が多い場所だった。当時の兵はテング熱の心配はないと思うが、季節が同じ頃なので、ずいぶんと刺されただろうと想像を巡らせた。

ところで最近私は、一つの仕事と、三つの奉仕をしている。無人ダンプで有名な会社の顧問として、会社の幹

部や工場の管理者に、実経験からのリーダーシップや危機管理関係の話をするを仕事としている。一方、奉仕のほうは、一つ目は、東日本大震災対処の指揮官としての経験と教訓を伝えるため、求めに応じて講話をしている。その際に、自衛隊の活躍を通じ、しっかりと自衛官の苦労や日米の絆の強さの宣伝も忘れない。二つ目は、自分の知識、経験を防災、減災に生かすこと。大自然の猛威にはとても対抗できないが、私の努力が、一人でも死なないように生き残ることにつなげたい。こういう強い気持ちもあり、静岡県補佐官(危機管理担当)を引き受けている。三つ目は、自衛官で培った管理能力を世に生かす。これはかなりハードルが高いが、リーダーシップ論、コマンドコントロール、ビジョニングやストーリーテリングと、自衛隊用語をビジネス用語に言葉を置き換えてチャレンジ中。

職業柄、地形に兵を重ねると戦闘が見えるように、地形に地震、津波、大雨、火山の噴火を重ねると被害が見える。これからも、将来に向かって、このノウハウを生かして、社会に奉仕したい。

最近の自然災害の多い日本は、不幸なことに災害の多いステージに突入しているようである。今年になってからも山梨の大雪、各地の竜巻、広島土石流、そして、御嶽山の水蒸気爆発と続いている。報道によると、日本列島は、2011.3.11以来、地球の歴史の中でも地殻変動の活動期になり、地震の多発、大津波の発生、火山の噴火の頻発もそのせいようだ。また、地球温暖化による大型台風の発生、集中豪雨、竜巻、熱帯性の疫病や害虫も油断ならない。

こういう災害の多い時代にいることを現実的に認識し、未来に向かって自然の猛威からダメージコントロールし、皆の力を合わせるように励みたい。



一地方議員として

佐藤 貞夫 (20期・陸上)



1 市議会議員への挑戦

私は、現在旭川市議会議員として活動しています。三年半前平成23年4月に行われた統一地方選挙で旭川市市議会議員選挙に立候補しました。選挙結果は、得票数3639票、36名中13番目で当選させて頂きました。市議会議員に立候補することになった動機は、陸上自衛隊旭川駐屯地が所在する旭川市の市議会に自衛隊出身の議員がいないことに疑問を持ったのが初めでした。確かに陸士で退職した元自衛官の市議会議員はいましたが、12年前に自衛隊を定年退職して市議会議員になられた先輩が議員を辞められてからは自衛隊出身の議員が、旭川市議会からいなくなりました。旭川市は、人口約35万人の札幌市に次ぐ北海道第2の都市であり、戦前は旧七師団があり軍都として栄えた町です。そして、戦後も道北防衛の拠点として第2師団隷下部隊を始め、多くの部隊そして3000名を超える隊員が旭川駐屯地に配置されています。このことを考えれば旭川市と自衛隊との架け橋となるべき自衛隊出身の市議会議員がいないのはおかしい話です。現に、北海道内の自衛隊が駐屯している市や町には多くの自衛隊出身の議員がいます。そんなことから旭川駐屯地で定年を迎え旭川地方隊友会の事務局長をしていた私が、市議会議員に挑戦することになりました。

2 初めての選挙

市議会議員に立候補することを決意してから約2年間、保険会社に席を置きながら選挙準備を始めました。多くの自衛官と同じように現職時代は政治活動を禁じられていましたから、選挙についての知識も経験も全くない状態からのスタートです。ましてや、前議員の後継者でもありませんし、政党に属さず無所属での立候補を決心しましたので、後援会組織や選挙対策本部も0からのスタートでした。名刺、ビラ、ポスター、看板、たすき、など小物から事務所、選挙カー、ウグイス嬢、等等びっくりするくらい準備することがあります。さらに、立候補の手続きや選挙違反に関する法令の勉強には頭を悩ませました。しかし、今考えると選挙準備は確かに大変なところもありますが、立候補の決心に比べたら大きな問題ではありませんでした。そして、多くの先輩・かつての同僚のおかげで平成23年3月3日に事務所開きを行うことができました。ところが、3月11日にあの東日本大震災が発生し、旭川駐屯地からも多くの隊員が災害派遣に出發したために、選挙への影響は避けられない状況になりました。しかし、もうそんなことは言ってもらえません。

逆にこの震災で自衛隊出身であることを際立たせて頂いたように思います。正に「ピンチはチャンス」でした。公示日以降の1週間の選挙運動はアツという間に過ぎました。初めは選挙カーから手を振るのも気恥ずかしく、私の名前を言うのに私自身はもちろんウグイス嬢も囁んでいました。ところが、最終日にはウグイス嬢が連呼する私の名前に聞き惚れてしまいました。この時は、本当に女性パワーの凄さを感じました。即日開票で夜中に当選が決定し、選挙事務所で皆さんと万歳をして抱き合い握手をした感激は、今でも鮮明によみがえります。選挙はやはりドラマです。

3 市議会議員とは

当選証書を受け取り初めて議席に着いた時には、市議会議員として今日からどの様に活動するのか何をすればよいのか全くわかりませんでした。自衛隊勤務で言うと転勤して初めての新しい職場に出勤したような不安な気持ちと似ています。議員としての活動の基本は、年4回開催される定例会議への出席・質疑そして議案への賛否の意思表示です。地方議会には立法権も予算決定権もありますから、市が行う行政の実態を把握して市民がより良く地域で暮らせるように見張っているようなものです。したがって、只ばーとしていても誰も何も教えてくれませんので、議員自ら課題を見つけて取り組まなければなりません。ここでも、自衛隊時代に何事に対しても常に問題意識をもって勤務するよう指導された経験が多いに活かされています。議会には、議員が活動するために必要色々な情報がすでに準備されています。過去の議事録はもちろんのこと、地方自治法や地方行政に関する書籍が議会図書館でいつでも閲覧できます。また、最近問題になっていますが、俸給とは別に政務活動費が支給されますので、他の市町村を視察して旭川市のためになる先進事例を実際に確認することもできます。私も3年間で道内はもちろん九州、四国、関西、関東の自衛隊時代には行ったことのない町にも行かせてもらいました。これもあくまで旭川市の行政に反映させるための議員活動です。

4 地方行政の課題への取り組み

自衛官として地方行政に直接関わる経験はあまりありませんでしたので、議員になって初めて地方自体の実態を内側から見させて頂いています。当然一般市民にとっては福祉や医療、学校教育も大変重要ですが、生活の基盤を支える防災・消防もなくてはなりません。旭川市は災害が少ない町ですが、最近の異常気象による集中豪雨や暴風雪による停電など市民生活を脅かす事態も起こっています。そんなことから自衛隊出身議員として様々な観点から市の危機管理について何回か質疑をさせて頂き、その結果、市長は危機管理部署の新たな設置と定年退職自衛官を危機管理担当として市職員へ採用することを決定しました。新人議員でも行政に関与できる一例です。

今はどこの地方自治体でも少子高齢化は避けられない問題であり、旭川市も例外ではありません。20年後の旭川市の人口は現在よりも、8万人減少し、逆に65歳以上の市民の占める割合は約40%にもなります。働き手が少なくなり、税収も減少して、行政サービスが維持できなくなる時代が間もなくやって来ます。その時には私は介護施設に入っているかもしれません。しかし、今議員である以上、当選回数や党派に関係なくこの問題立ち向かって行くことが地方議員の大きな役割であると思っています。

5 おわりに

私は北海道出身でも旭川市出身でもありません。福島県出身です。幹部候補生学校を修了して最初に赴任したのが当時旭川駐屯地に所在した元第9普通科連隊でした。さらに、旭川市出身の妻と結婚したことが縁で最終的に旭川市に永住することになりました。私が、自衛隊との関係が深い旭川市で自衛隊出身の議員として活動するという事は、30数年間私を育ててくれた自衛隊（国家）への恩返しでもあり、道北防衛の拠点として大変重要な旭川市が繁栄するために微力ながら尽力させていただくことも国家防衛に繋がることだと思っています。最後に、自衛隊を定年退職してからも十分議員として活躍できますので、是非防大同窓生の皆さんにも地方議員いや国会議員さらには首長を目指してもらいたいと思います。



いまだ現役の心意気！

紺野 真理 (20期・海上)



今「小原台だより」に、私のような途中で自衛隊を辞めた者が海の同期を代表して寄稿することにやや気後れしつつも、同期から推薦（強制？）されたお役目と思って筆をとっております。

私は、自衛官としての人生を全うすることなく、22年前に海上自衛隊を

退職しました。当時は働き盛りの38歳、2等海佐でした。退職のいきさつは、本稿の趣旨から外れますので割愛しますが、海上自衛隊がいやで辞めたわけではなく、かといって大志・大望を抱いて外の世界に出たわけでもありません。成り行きとでも申しましょうか、自らの口から出た、「退職させていただきます」という言葉を行きかりで言ってしまったかのように軽んじたくなかったことは確かですが、なぜそこまで拘って辞めたのかいまだに疑問に思うことがあります。

退職後、これといった成功の確証もないまま、某有名企業が募集していた企業研修講師の卵に応募しました。今思えばかなりの難関を突破して採用されたのではありましたがそれで食べていけるわけではなく、自衛官時代には専業主婦であった妻にも働きに出てもらい、小学生だった2人の子供達を食べさせることに腐心した思いもあります。一方で、防衛庁長官名の退職の辞令書を手にしたときに、自衛官として果たすべき使命や部下の命を預かるという肩の荷がいったんに吹き飛んだように気持ちりが軽くなったことは今でも忘れられません。自衛官を定年まで勤めるみなさんの責任の重み、重圧がいかにばかりかということ、38歳の若造ではありましたが、痛切に感じたところでした。

その後しばらくは自衛官であった時以上に勉強もし、企業研修講師として実力を蓄えて、様々な顧客企業の若手、中堅から、次第に管理職、役員を対象の研修などを行えるようになりました。講師の仕事というのは、外部の間人ではあるものの、当該企業の社員の話を直接聞き、場合によってはその上司や関連する事業部長や役員の人たちと接することも多く、それぞれの業界の現状や情報に接することができる仕事です。ひとつ一つが自身の血となり肉となる得難い仕事を選んだものと少しだけ自負しているところもあります。

とはいえ、日々の生活が苦しかった頃、一度だけ大いに迷ったことがありました。勉強のために先輩の行っている研修を見る機会をいただくことがあるのですが、夜になって先輩方に「一杯いこか」と誘われることがあります。その日の研修中の出来事をふりかえりながらの話もあり大変ためになる機会なのですが、私としては財布の中身が気になるのです。講師の仕事がなければ収入はなく、最初の1、2年間は仕事も勉強会もないまま自宅にいても多かったです。布団を干して隣家の奥様と顔を合わせて気まずい思いをすることも珍しくありませんでした。そのため、アルバイト雑誌をめくって副収入の途を探したこともありました。当時、夜間の交通量調査の仕事だと、深夜を含めた7、8時間で軽く1万円を超えるなどと書いてありました。しかし、そこで考えたのは、月に2日、3日程度であっても、1年では25日

から30日を超えることもあるでしょう。その時間を勉強に当てたらどれくらいのことのできるか、それが2年、3年と積み重なったらどれほどの時間になるかということです。結局、アルバイトは一切せずに、仕事の無い日はできるだけ自身の勉強に当てることとしましたが、結果としてはそれが本当に良かったと今になって思います。

そんな日々を重ね、自衛隊退職から9年を経て、顧客企業に講師を派遣したり、人事・教育関連のコンサルティングを行う「株式会社イコアインキュベーション」の立ち上げに参画し、現在はその代表を務めております。この会社でも既に14年、自衛隊退職後22年を外の世界で過ごしたことになります。年齢60を超え講師としての賞味期限も切れかかっていますが、「まだまだ若い者には負けられない」などと言いつつ、会社の経営とともに研修の現場にも立っております。「人生男盛り」などとは恥ずかしくて口にできませんが、「まだまだ現役の心意気」盛んではあります。社員の一拳手一投足にイライラしたり、ちょっとした成果に大喜びをして社員を抱きしめてみると、喜怒哀楽の起伏は海上自衛隊時代と変わっていないようです。社員をつかまえて、「おまえのようなやつは辞めてしまえ……」などと怒鳴ってはみても、傍らの役員から「何を言ってるんですか、ここは自衛隊じゃないんですからね…」と手厳しく叱責されることもしばしば。「現役の心意気」とは「忍の一字」でもあります。

同期が現役のあいだにはなかなか会う機会もありませんでした。全員が退官したいまでは月1回の昼食会、同じく月1回のゴルフなど、同期諸兄と顔を合わせることも増えました。私は55歳になってゴルフを始めたこともあり、上達はしていませんが、曲がりなりにも人とプレーできるようになったのには同期諸兄の恩恵大なるものがあります。同期だけではなく学生時代に面識がなかった先輩でも、防大の後輩というだけでいろいろお世話になっている方もあります。自衛隊退職後、どこかで「俺はひとりで生きてきた」と思っている自分がいるのですが、結果として、形を変えてさまざまに同期、先輩、後輩諸氏にお世話になり続けている「男盛り」でもあることを、今強く感じております。



「やりたいこと」、 「やらねばならないこと」

長島 修照 (20期・航空)



◇人生を如何に全うするか

「今人生、男盛り」といっても、還暦を過ぎれば明らかに生物学的には「盛り」は過ぎ、人生の終息（死）に向かっています。いつ終息するかは神のみぞ知ることですが、人間誰しもこの歳になるまでには、それまでの人生経験を踏まえ、自分の寿命を想定し、体力等の衰えを勘案して、残りの人生の生き方を考えると思います。私の場合、父や祖父及び父の兄弟が60歳から75歳でこの世を去っていることから、とりあえず70歳を目途にしています。そして、人間として「やらねばならないこと」の優先順位を決め、個人として「やりたいこと」との吻合を図りつつ、これらを専心やり続けていつまでも「盛り」を維持し、人生を全うしたいと思っています。

◇やらねばならないこと

先ずは生活を保障するための金銭的担保が不可欠ですが、養うべき家族は家内だけですので、退職金と年金で最低限の生活は保障できていると思っています。

従って、「やらねばならないこと」の第一は、長島家の嫡男としてこの世に生を受けたことに伴う義務です。つまり、先祖から受け継いだ財産（といっても相続税がかからない程度の僅かながらの田畑・土地とお墓などですが）を維持管理して後の世代に伝えるとともに、私を育ててくれて終の住処でもあるこの地域社会の一員として生きることです。そのためには、地域のコミュニティーを大切に、何らかの貢献をしていかなければなりません。

現役時代、転勤に伴う家族ぐるみの引っ越しを9回、単身赴任生活を18年間経験したことから、退官後は地域に軸足を置くと決めていました。現在、都内の某防衛関連企業の顧問としてお世話になり、茨城の自宅から東京まで通勤する毎日です。そして、地域社会への貢献は未だ不十分ですが、先祖から受け継いだ田畑の維持管理（百姓仕事）は現役時代以上にできるようになりました。後述しますが、百姓仕事は「やりたいこと」でもあります。

第二は、防大入校以来約40年という人生の大半をお世話になった自衛隊に対する恩返しです。これまで培った知識と経験を活かして、しかもOB（自衛隊員という身分から解放された者）にしかできない、現役諸官の支援と防衛体制・基盤の充実に寄与することです。

我が国の防衛関連企業は、自衛隊の後方を担うにあたり、官とは「車の両輪」の関係になければなりません。官・民が上手くシンクロしなければ、防衛力整備や防衛力運用に支障を来します。私は、防衛関連企業でのOBの役

割は、公務員倫理法上の制約を受ける現役隊員に替わって、官・民の調和と防衛産業の発展に寄与することと心得て、微力ながら努力しているところです。

また、会社の仕事をしながら、安全保障懇話会、航空自衛隊退職者団体（つばさ会）、日米エアフォース友好協会（JAAGA）などの運営委員や理事として、ボランティアでそれぞれの組織運営等のお手伝いをしています。

更に、現役時代にはできなかった政治活動にも大いに関与しています。自衛官の中には、「政治的活動には関与せず」という制約の下で、政治への関心までも失った人や旺盛なコンプライアンス意識と内部告発を恐れての政治忌避症候群に陥っている人は多いと感じられます。しかし、軍事は政治によって規定されるものであり、政治の劣化によって我が国の安全保障体制が危ぶまれる状況を思うと、軍事を理解し防衛体制強化のために尽力してくれる国会議員を一人でも多く増やすことが肝要です。現在、自衛官OBである佐藤、宇都両参議院議員の後援活動をしています。このような政治活動こそOBとして先ず「やらねばならないこと」と認識しています。

◇やりたいこと

「やりたいこと」とは、気の向くまま暇に任せてできる趣味・道楽の類で、「好きなこと」でもあります。人間は「好きなこと」をしている時に幸せを感じますし、人生に潤いをもたらしてくれるものです。現在、余暇は殆ど先祖が守ってきた土地で百姓（※）をしています。私にとって財産管理というより「やりたいこと」、「好きなこと」の範疇になっています。

もともと実家は貧農で、農業で子供3人を自立させた両親の影響もあって、自然と触れ合う園芸、スキー、山歩き、山菜等の採取、釣りなどや、ものづくり（木工等）が好きなものから、夏期・冬期休暇は勿論、ゴールデンウィークや連休で帰省できるときは百姓に勤しんできました。黙々と土を耕し自然と対話しながらの農作業は、自衛隊勤務上のストレスも忘れさせてくれました。しかも、農耕民族として日本人が培ってきた文化を肌で感じる事ができ、生物としての人間の本質についても考えさせられることも度々でした。また何とんでも、自分で作ったお米や野菜を収穫し、自家製の味噌とともにそれを食するときの喜びは最高です。

平成13年以来、毎年ささやかな「長島農園祭」を行っています。農作業体験と収穫したものを食する喜びを同僚や部下にもお裾分けしよう、また、日本の未来を担う子供達に農耕民族の原点を少しでも経験して欲しいと思ったことがきっかけです。春は筍掘り、初夏はジャガイモ掘り、秋はサツマイモ掘りを行い、併せて春はバーベキュー、初夏はカレーライス、秋は芋煮などを作り、自家産のコシヒカリを竈（カマド）で炊いて食します。最近、秋の彼岸ごろから栗拾いもできるようになりました。毎年参加する顔ぶれが少しずつ変わりながら、最

寄りの百里基地の隊員家族も加わって、多くの仲間が集ってくれることは嬉しい限りです。今後ともこの農園祭を続けることが、大きな励みになっています。

◇「やらねばならないこと」と「やりたいこと」の兼ね合い

近況を有り体に申せば、茨城で百姓をやり、東京まで出稼ぎとボランティアに行っていると言えます。お陰様で、片道約2時間半の通勤も苦にならず、「盛り」を感じられる日々を送っています。いずれ東京への出稼ぎができなくなり、茨城での生活の比重が増えていくと思いますが、できる範囲で、やり方を変えつつも「やらねばならないこと」を続けるつもりです。「やりたいこと」は百姓仕事以外にも多いのですが、「やらねばならないこと」を放棄したら、人間として生きる意味を失うと思っているからです。

両者の兼ね合いは、生涯、（精神的には）「やらねばならないこと」≥「やりたいこと」だと思います。

※「百姓」とは、「耕作だけでなく、キノコ栽培、園芸、漁捕り、味噌や漬物などの農産物加工、構築物等製作など、自給自足・販売のために何でもやる、マルチカルチャーな農村の自営業者」をイメージしています。



アルハムブラの思い出



助川 士郎
(6期・海4班・電気)

アルハムブラはグラナダ東方の丘にスペインにおける最後のイスラム政権ナスル朝が14世紀中頃に建てた朱色の城だ。近代ギター音楽の父と称されるフランシスコタルレガはこの朱色の城の印象を美しいトレモロの曲で表現した。

この正月（2014年）機関誌「小原台だより」（H26.1.1 vol.21）が自宅に送られて来た。この機関誌は毎度硬い話が殆どだが偶には軟らかい話も良いのではと筆を執った。その「小原台だより」p.10「校友会活動主要成果及び部員状況」に古典ギター部員数13名とあった。思えば会員数僅か3、4名そこそこで私が古典ギター同好会を創ったのは1961年三学年になった頃だったと記憶している。

私は二学年に進んだ時、望通り海上・電気工学（海上四班）に編入され、一学年から引き続き今は無い第五大隊に居残った。その際二人の四期生、陸・土木の堀内さんと空・電気の妹尾さんが同室となった。お二方とも数学が得意で個性に満ちた先輩であったが堀内さんが休み時間になると素晴らしいギターの調べを奏でていた。私はそれにすっかり魅了され、「よし俺もやってみよう」という気になった。最初は横須賀中央の小林楽器店でギターを購入しその店で週末奏法の手解きを受けた。手解きと言っても簡単な楽曲の演奏を教えてくれただけなので、それを知った堀内さんが別の先生を紹介してくれた。

京急汐入駅の改札口を左に折れて狭い坂道を登って行くと左手に小さな古い木造長屋があり、その一角に村井さんという東京ギターアカデミー出身のギタリストが塾を開いていた。堀内さんに紹介されたのは、その村井さんでギター音楽の基本を丁寧に教えてくれた。その基本は今に至るも生きている。

二学年になると特別外出が許可された。それを利用して上野の東京文化会館に今は亡き巨匠アンドレス セゴヴィアのリサイタルを聴きに行ったのもその頃だった。当時外出は制服だったから防大の学生服を着た私は周囲の人々から奇異な目で見られた。余談だが1960年代初頭、京急の電車に乗ると「税金ドロボー」と陰口を敲かれ、巷は安保闘争に明け暮れていた。大江健三郎氏が「防大

生は現代青年の恥辱」と宣ったのもその頃のことである。

ちなみにセゴヴィアは1983年秋私が六本木に勤務していた頃再び来日し、家族と共に彼のリサイタルを渋谷の昭和女子大構内にある「ひとみ記念館」で再び聴くことが出来た。マエストロはその時、今の私と同じ70台後半だったように思う。



話が前後したが三学年に進んだ頃には益々ギターにのめり込み終に同好会を創ってしまった。7期・空の御厨君や8期・空の野村君等が仲間に加わった。因みに同窓会名簿を見ると4期・空の橋本さん（故人）の名が同好会名簿に載っている。私の記憶違いで会を創ったのは二学年の終わり頃なのか？ただ会を創設した頃私をギター音楽に誘った4期の堀内さんは既に卒業していたから何かの間違いか？放課後は専ら物理学館の教室で独り夕食まで練習していたが、その物理学館で当時応用物理の助手だった高野さんが私の練習に誘われてかギターを始められた。校友会の活動では当時の小講堂でのリサイタルで下手な演奏を披露した。マヌエル デ ファリヤの「三角帽子」から「粉屋の踊り」を会員で合奏したが村井さんの折角の指導にも拘わらず乱暴なラスギャードで大笑いを誘った。四学年の秋には当時の校友会会長だった上野憲一君の紹介で料亭「小松」の筋向いにある私立女子高の学園祭に招かれた。私はギター曲にトランスクリプトしたイサークアルベニスの「入江のざわめき」を演奏し8期の野村君も同行して何かを弾いた。ただ女生徒を前にして私はかなり緊張して無茶苦茶な演奏を披露した事と謝礼に菓子折りを頂いた事が記憶に残っている。

1963年春防大を卒業と同時にギターは諦め、当時なげなしの小遣いを叩いて買った手工ギターも手放した。江田島の週末は呉中通りに旧海軍ゆかりの女将が開いていた小料理屋「千茂登」の二階を下宿替りして酒に溺れた。「千茂登」から中通り三丁目の大通りに出て左に折れるとすぐの所に大きな下駄屋さんがあって、ある日其の軒下を通りかかるとフェルナンドソルの「(モーツァ

ルトの「魔笛」の主題による変奏曲」が聞こえてきた。その店の一人息子が二階でギターを奏でていたのだ。週末には女主人に断って、その店に上がり込み、彼の練習を聞かせてもらった。また「千茂登」の一軒おいて隣にあった喫茶店でホアキンロドリゴのギター協奏曲「アランプェス」のレコードを僅か一杯のコーヒーで聞きながら二日酔いを覚ましたものである。1963年に呉で買ったと表紙にメモが残る好楽社版ギターピース「アルハムブラの思い出」が今も手元に残っていて、裏表紙には定価50円とある。ギターを持ってなかったにも拘わらず何故その楽譜を買ったのか覚えていないが今は当時を偲ぶ縁となっている。

1963年戦後初めてのヨーロッパ方面遠洋練習航海を終え航空機操縦の職域に進んだが勤務に余裕が出て来たのは、その約10年後の1974年頃だった。当時3等海佐で館山の飛行隊に配属されていたが家内に無心し再びギターを手にした。爾来今までギターを手放すことはなかったが元来寸足らずの私は指が短くこの楽器を演奏するには不都合があった。今使っているギターは大枚を投じて誂えた寸法の短いギターだがそれでも曲によっては苦労している。ただピアノ同様12平均律で調律されるこの楽器はバッハのクラヴィア曲等も弾けるし、持ち運びが容易だから1979年1月から80年8月まで護衛艦「ひえい」に乗り組んだ時や単身赴任した地方の航空部隊勤務時にも持ち歩き、そして年金暮らしで後期高齢者となった今も私の無聊を慰めてくれている。

小原台に「聳える若人の城」は私にとって思い出の「朱色の城」でもある。それ故、卒業50年余を経た今、僅か数人でささやかに発足した「古典ギター同好会」が十数名の「部」に昇格していた事を知って甚だ感慨深い。



二人展（同期で開催した絵画・陶芸個展）

絵画 松尾 茂 (23期・航空)
陶芸 宮本 泰夫 (23期・航空)

平成26年7月16日（水）～7月19日（土）の4日間、防大23期（航空OB）の同期生2人が、市ヶ谷駅から程近い靖国通りに面したギャラリーで絵画と陶芸の個展「二人展」を開催した。松尾茂が油絵、宮本泰夫が陶芸。共に現役自衛官の時代から作品を創り始め、そのキャリアは数十年におよぶ。今回、退官後のこの時期を一つの節目として自らの人生を俯瞰し、織り成す作風を回顧しつつ、その作品群を展覧した。



左側：宮本泰夫（陶芸） 右側：松尾茂（絵画）

松尾は絵画歴30余年、防大理工学研究科で実験に明け暮れた時、気分転換に少年時代に習っていた油絵を本格的に再開し現在に至る。全自美術展で秀作の賞に輝いた実績を有し、転勤先の松島基地で美術部を創る等、絵を描く醍醐味の普及にも努めてきた。風景を主体とする画題を求め、スペインやイギリスそしてエーゲ海を旅し、気に入った風景は、何度も何度も色調遠近の工夫をしつつ描ききる。『サントリーニ島』『ミコノス島の町』と銘打った作品では、エーゲ海の空と海そしてその潮風に吹かれ年月を重ねた民家のコントラストを、赤の濃淡で描いた作品と青の濃淡で描いた作品を其々並べて展示する。その対比の中に、松尾自身が語る「風景の中に、自分が何に心を動かし何処に美しさを感じたか、すなおな想いで描いてきた。」とする試行錯誤の道程が読み取れる。明るい画風ながら、一瞬の光陰が織り成す美しい風景を愛おむ寂しさも漂う。画廊の最奥中央の壁に、エーゲ海の太陽光に照り映える風景を青の濃淡で描いた小振りの絵が一枚。多くの作品中、松尾が心中「妻の誕生日プレゼントに描いた自分でも納得出来る作品」とする絵とは、「これかな」と感じた。



松尾茂の作品「碧きエーゲ海」

宮本は、大学受験時、防大と美術大学と進路決定に思い悩んだ。父は九谷焼の絵師であり、その工房で仕事に打ち込む父親の背を見つつ育った。若き日の葛藤の末、空自幹部自衛官の道を進み、職責を重ね岐阜基地司令の発令を受けたその直後に父の訃報に接する。さまざまな思いが想起される中、基地の隊員家族そして自分を支えてくれる家族の前途ある未来を祈念して縁起皿『一富士、二鷹、三なすび』を作成した。直径約40センチの皿に描く若鷹は、「自ら内省して得た空自の職責を担う覚悟と亡き父への想い」であり、その中で自ら感じた「真の自立」を表現するため、若鷹の飛翔目前の姿に想いを託した。時あたかも、防衛庁が防衛省に変わり、家族内か

ら子供達が自立する等、公私ともに様々な自立に係る事柄が生じた時期でもあった。

また高さ50センチ、幅40センチの大振な白磁の壺『躍動』では、エネルギーに水流を押し分け様々な方向に進む亀達の姿が水面に浮かぶ。空幕技術部長の時代、空自の特性「勇往邁進、支離滅裂」の姿を楽しむごとく、水の流れに抗いながら、ひたすら前進するユーモラスで闊達な亀の姿を描いた。「この水流を描く筆使いは、三沢勤務時代に描いた十和田・奥入瀬溪流の絵を、親父が手直ししつつ教えてくれたもの。」目を細め、遠くを見る趣で宮本は語った。

今回は、松尾から『青』『サマー』の創作テーマが提示され、油絵・陶芸其々の立場で、直近の作品を作り上げ個展「二人展」に臨んだ。二人共ともに「作品の出来栄は、言い訳が利かず人のせいには出来ない。一番大切なのは、自分自身が納得出来るかどうか。」と語り、「二人展をやった事をスタートラインとして、これからも頑張りたい」と頷いた。40年前の防大1学年時、松尾・宮本はともに3大隊同じ小隊の1学年で小原台の日々をスタートさせた。個展最終日には、やはり同小隊で青雲の志を語り、分野は異なれど脳外科医として大成した同期生が鹿児島島より駆けつけるという。「二人展」からの新たなスタートも、その原点は小原台に遡る。同期の縁を強く感じさせる個展であった。

(同窓会広報 杉山伸樹 記)



宮本泰夫の作品「一富士、二鷹、三なすび」



宮本泰夫の作品「躍動」



校友会活動

平成26年度前期校友会活動主要成果及び部員状況

校友会名	部員数	活動状況	校友会名	部員数	活動状況
儀仗隊	44名	<ul style="list-style-type: none"> ○入校式・卒業式典儀仗及びドリル演奏 ○文化部合同発表会でのドリル演奏 ○自衛隊音楽まつり参加 ○駐屯地等記念日行事参加(古賀駐屯地、第1普通科連隊、北富士駐屯地、下総教育航空群、東立川、久里浜、横須賀芸術劇場) 	相撲部	14名	<ul style="list-style-type: none"> ○全国国公立大学相撲大会 ○東日本学生相撲選手権大会(団体：1回戦敗退個人：2回戦敗退) ○東日本学生個人体重別選手権大会 <ul style="list-style-type: none"> ・65kg未満級準優勝：131(4) セレゲレン ・75kg未満級ベスト：16223(2) ドフチン ○東日本学生リーグ戦
応援団リーダー部	19名	<ul style="list-style-type: none"> ○大会応援(ボート部、相撲部、フィールドホッケー部、短艇委員会、陸上競技部、硬式野球部) ○壮行会(空手道部、短艇委員会、吹奏楽部、ウエイトリフティング部) ○文化部合同発表会での演舞披露 	居合道部	22名	○居合道国際連盟大会
柔道部	54名	<ul style="list-style-type: none"> ○関東学生柔道優勝大会 <ul style="list-style-type: none"> ・男子7人制団体二部 関東第3位 ○神奈川学生柔道春季大会 <ul style="list-style-type: none"> ・団体男子 準優勝 ・団体女子 第3位 ・個人男子軽量級 第3位：133(2)佐藤 ・個人女子軽量級 準優勝：411(4)緒方 ・個人女子中量級 準優勝：123(4)小野山 ○日本ベトナム友好柔道大会(1勝1敗) ○関東学生柔道体重別選手権大会 ○講道館春季紅白試合 ○合同練習(県下大学、浦賀中学) 	弓道部	42名	<ul style="list-style-type: none"> ○関東学生弓道選手権春季トーナメント大会(予選敗退) ○神奈川県学生春季男子リーグ戦 <ul style="list-style-type: none"> ・第3位：1部残留(1勝3敗) ○神奈川県学生女子団体 <ul style="list-style-type: none"> ・個人戦(予選敗退) ○神奈川県地方審査 <ul style="list-style-type: none"> ・初段3名合格 式段2名合格 参段1名合格 ○全関東学生弓道選手権大会(予選敗退) ○全日本学生弓道選手権大会(予選敗退)
剣道部	63名	<ul style="list-style-type: none"> ○春季神奈川県学生剣道選手権大会 <ul style="list-style-type: none"> ・第3位 ○神奈川学生剣道練成会 ○都道府県対抗女子剣道優勝大会代表選考会(1回戦敗退) ○関東学生剣道選手権大会(3回戦敗退) ○関東女子学生剣道選手権大会 ○関東理工科系学生剣道選手権大会(1回戦敗退) ○東京大学定期戦 ○練習試合(東京理科大、首都大、垂細垂大) 	少林寺拳法部	66名	<ul style="list-style-type: none"> ○少林寺拳法関東学生大会 <ul style="list-style-type: none"> ・団体演武第4位 ・茶帯演武第5位 ○禅林学園研修 ○杉本記念合同練習会 ○金剛禅総本山少林寺拳法合宿 ○合同練習(早稲田大、慶應大、東海大、青山学院大、明治大、昭和大、日本体育女子大、上智大)
空手道部	46名	<ul style="list-style-type: none"> ○全国空手道選手権大会 <ul style="list-style-type: none"> ・団体戦大学 形の部 第3位(組手の部：1回戦敗退) ・団体戦女子 組手の部 2回戦敗退 ○春季関東学生会定期リーグ戦 <ul style="list-style-type: none"> ・男子 優勝(1部昇格) ・女子 優勝(1部昇格) ○東日本大学空手道選手権大会(2回戦敗退) ○関東学生空手道選手権大会(1回戦敗退) ○練習試合(東京大学) ○全自衛隊空手道選手権大会 	バスケットボール部(男子)	45名	<ul style="list-style-type: none"> ○関東大学選手権大会 ○神奈川学生春季大会 <ul style="list-style-type: none"> ・第2位：2部残留(5勝1敗) ○関東大学新人戦 ○練習試合(神奈川大、玉川大、横浜市立大)
銃剣道部	47名	<ul style="list-style-type: none"> ○全日本銃剣道優勝大会 <ul style="list-style-type: none"> ・一般第1部優勝 神奈川県銃剣道連盟チーム(332(3)音琴) ・一般第2部準優勝 ○神奈川県地方青少年銃剣道練成大会 ○全日本青少年銃剣道大会(敗退) 	バスケットボール部(女子)	7名	<ul style="list-style-type: none"> ○神奈川県学生春季大会 <ul style="list-style-type: none"> ・第7位：2部残留(1勝4敗) ○練習試合(横須賀市女性教職員、岩戸養護学校)
合気道部	54名	<ul style="list-style-type: none"> ○全国合気道演武大会 ○合気神社大祭 ○合同稽古(法政大学) 	ラグビー部	161名	<ul style="list-style-type: none"> ○部外講習会 ○公式戦(SEVENASIDE) ○練習試合(東京学芸大、白鷗大、中央大、東京大) ○親善試合(防衛医科大学) ○合同練習(早稲田大学) ○定期戦(京都大学、筑波大学)
			サッカー部	64名	<ul style="list-style-type: none"> ○総理大臣杯全日本大学トーナメント戦(1回戦敗退) ○全国自衛隊サッカー選手権大会(ベスト8) ○神奈川県大学春季リーグ戦 <ul style="list-style-type: none"> ・第5位：秋季下位リーグ(5勝3敗1分) ○三浦半島リーグ戦 ○練習試合(初声FC、厚木マーカス、FA南、帝京高、鶴見大、高等工科学校、芝浦工業大、横須賀マリノFC)
			バレーボール部(男子)	37名	<ul style="list-style-type: none"> ○関東学生春季リーグ戦 <ul style="list-style-type: none"> ・第6位：5部残留(2勝4敗) ○神奈川県学生大学リーグ戦 <ul style="list-style-type: none"> ・第2位：2部残留(2勝1敗) ・個人賞ブロック賞：131(2)政木 リベロ賞：142(3)境 ○神奈川県選手権大会 ○国民体育大会

平成26年度前期校友会活動主要成果及び部員状況

校友会名	部員数	活動状況	校友会名	部員数	活動状況
バレーボール部 (女子)	21名	<ul style="list-style-type: none"> ○全国自衛隊バレーボール関東選手権 <ul style="list-style-type: none"> ・準優勝 ○全国自衛隊バレーボール大会 <ul style="list-style-type: none"> ・ベスト4 ○関東学生春季リーグ戦 <ul style="list-style-type: none"> ・第7位：6部残留(2勝4敗) ○神奈川県大学リーグ戦 <ul style="list-style-type: none"> ・第6位：2部残留(0勝5敗) ・個人賞リベロ賞：133(4)佐藤 サープ賞：122(3)久保川 ○練習試合(海自横須賀、東京大学) 	水泳部(競泳)	28名	<ul style="list-style-type: none"> ・個人200m自由形第1位：242(3)桐生 200m自由形第3位：442(3)石井 400m自由形第4位：242(3)桐生 400m自由形第5位：442(3)石井 100m平泳ぎ第5位：142(1)飯田 200m平泳ぎ第5位：142(1)飯田 200mバタフライ第5位：441(4)松永 200m個人メドレー第4位：222(3)伊藤 400m個人メドレー第4位：343(3)前澤 400mフリーリレー 第3位 ○関東学生夏季公認記録会(8名自己ベスト更新) ○関東学生水泳競技大会
卓球部	14名	<ul style="list-style-type: none"> ○関東学生春季リーグ戦 ○横須賀春季団体リーグ戦 ○横須賀オープン卓球大会 	水泳部(水球)	29名	<ul style="list-style-type: none"> ○関東学生リーグ戦 <ul style="list-style-type: none"> ・第7位：2部残留(2勝3敗) ○練習試合(学習院大学)
陸上競技部	106名	<ul style="list-style-type: none"> ○関東学生陸上競技対校選手権大会 <ul style="list-style-type: none"> ・砲丸投げ第5位：431(4)工藤 ・棒高跳び第5位：242(3)鈴木 ○横須賀市陸上競技選手権大会 <ul style="list-style-type: none"> 兼 三浦半島陸上競技大会 ・400m 第1位：431(4)中野 ・3000m 障害第1位：233(4)古屋 ・1600mリレー 第1位 ・円盤投げ 第1位：431(4)工藤 ・砲丸投げ 第1位：431(4)工藤 ・やり投げ 第1位：311(4)岡藤 ・々(女子) 第1位：342(1)権葉 ○日本体育大学長距離競技会 ○国士舘大学競技会 ○日本体育大学陸上競技会 ○神奈川県陸上競技選手権大会 ○関東陸上競技選手権大会 	ハンドボール部	42名	<ul style="list-style-type: none"> ○関東学生春季リーグ戦 <ul style="list-style-type: none"> ・優勝4部昇格(6勝0敗) ○練習試合(横浜市立大学) ○新入生歓迎会 ○横須賀市春季リーグ戦
硬式庭球部	67名	<ul style="list-style-type: none"> ○松原杯シングルス大会 <ul style="list-style-type: none"> ・第3位：332(3)加来 ・ベスト8：443(4)吉田 342(2)須藤 243(1)櫻井 332(4)柴田 ○全国自衛隊関東地区予選Bブロック団体戦 <ul style="list-style-type: none"> ・Bブロック第2位 ○練習試合(北里大、東邦大、明治大、都市大、防衛医科大学校) 	アメリカン フットボール部	73名	<ul style="list-style-type: none"> ○記録員講習会 ○東京大学定期戦(敗北) ○合同練習(中央大学、武蔵大学) ○練習試合(慶應大、横浜国立大、大東文化大)
硬式野球部	78名	<ul style="list-style-type: none"> ○神奈川県大学春季リーグ戦 <ul style="list-style-type: none"> ・第4位：2部残留(5勝7敗) ○女子野球日本代表候補強化合宿 	ソフトテニス部	26名	<ul style="list-style-type: none"> ○関東学生春季リーグ戦 <ul style="list-style-type: none"> ・第6位：(0勝5負)7部降格 ○神奈川県学生春季リーグ戦 <ul style="list-style-type: none"> ・第4位：(0勝3敗)1部残留 ○関東学生シングルス選手権 ○関東学生選手権2部トーナメント戦 ○神奈川県学生選手権大会 ○練習試合(東京学芸大学)
射撃部	21名	<ul style="list-style-type: none"> ○関東学生ライフル射撃選手権春季大会 <ul style="list-style-type: none"> ・男子総合団体二部 第2位 	ボクシング部	74名	<ul style="list-style-type: none"> ○横浜市民体育大会ボクシング競技会 <ul style="list-style-type: none"> ・TKO勝ち：243(3)堀田 ○関東大学ボクシングトーナメント <ul style="list-style-type: none"> ・第7位：3部残留(1勝5敗) ○神奈川県一般ボクシングオープン戦(敗北) ○国体代表選考会兼全日本女子選手権大会県予選(敗北)
水泳部(競泳)	28名	<ul style="list-style-type: none"> ○東日本理工科系大学選手権水泳競技大会 (10名自己ベスト更新) <ul style="list-style-type: none"> ・総合第3位 ・個人200m自由形第2位：242(3)桐生 50m平泳ぎ第4位：443(4)山田 200m平泳ぎ第3位：142(1)飯田 100m背泳ぎ第5位：323(3)小枝 100mバタフライ第4位：441(4)松永 200mバタフライ第2位：441(4)松永 800mフリーリレー第2位 ○全国国公立大学水泳競技大会 ○関東学生春季公認記録会(8名が自己ベストを更新) ○東部国公立選手権 <ul style="list-style-type: none"> ・男子総合第2位 	レスリング部	32名	<ul style="list-style-type: none"> ○東日本学生リーグ戦 <ul style="list-style-type: none"> ・第6位：2部残留(2勝3敗) ○東日本学生春季新人選手権大会 ○全日本学生選手権
			フィールドホッ ケー部 (男子)	43名	<ul style="list-style-type: none"> ○関東学生春季リーグ戦 <ul style="list-style-type: none"> ・第5位：2部残留(1勝2敗) ○関東学生連盟公式戦(早稲田大学、法政大学、東京大学) ○全日本大学ホッケー王座決定戦東西交流戦 ○Bブロックインカレ予選(敗北) ○練習試合(山梨学院大学)
			フィールドホッ ケー部 (女子)	15名	<ul style="list-style-type: none"> ○関東学生春季リーグ戦 <ul style="list-style-type: none"> ・第4位：2部残留(2勝1敗1分) ○関東学生リーグセミナー ○全日本大学ホッケー王座決定戦東西交流戦 ○OB交流戦 ○国民体育大会関東ブロック大会 ○慶應義塾大学定期戦 ○練習試合(東京大学、学習院大学、東京学芸大学附属高校)

平成26年度前期校友会活動主要成果及び部員状況

校友会名	部員数	活動状況	校友会名	部員数	活動状況
準硬式野球部	41名	○神奈川大学春季リーグ戦 ・第4位：1部残留(4勝7敗) ○練習試合(北里大学、東京都市大学)	パラシュート部	20名	○落下傘スポーツ日本選手権アクエリアス大会 ・一般の部チーム戦 第5位 ・ジュニアの部優勝：333(4)鈴木 ○月例降下(大根根飛行場) ○校外訓練(習志野駐屯地) ○水上着水訓練(屋外プール) ○リガー講習会
体操部	42名	○東日本学生体操競技グループ選手権大会 ・個人男子リザーブ：3233(2)林 ○東日本学生体操競技選手権大会 ○東日本理工系大学体操競技選手権大会 ・団体男子第3位 ・個人男子第3位：233(2)林 ・個人女子第3位：341(1)長谷部 第5位：323(4)高橋	自転車競技部	19名	○MTBFESTIVAL春大会 ・第26位：441(3)有川 ○全日本トライアスロン宮古島大会 ○セルフディスカバリーアドベンチャー ○JCRC第5戦in日本CSC ・Eクラス第15位：231(2)山崎 ・Fクラス第18位：232(4)川村 ○日産カップ神奈川トライアスロン大会 ・第68位：111(3)榎並 第73位：143(3)楠目 ○日本学生トライアスロン大会関東大会 ○校外練習(房総半島、三浦地区、湘南山手)
フェンシング部	31名	○春季関東公立フェンシング大会 ・フルール団体戦第3位 ○関東学生フェンシングリーグ戦 ・フルール第3位：3部残留(4勝2敗) ・エペ優勝3部残留(5勝0敗)※入れ替え戦敗北	吹奏楽部	49名	○入校式典演奏支援 ○月例パレード訓練演奏支援 ○小山市政60周年記念演奏会 ○第50回定期演奏会 ○開校記念祭における演奏
ウェイトリフティング部	10名	○横浜ウェイトリフティング競技大会(1名自己ベスト更新) ○国体県代表選手選考会	校友会代議員会	37名	○定例 ・臨時代議員会の実施 ○校友会事業計画 ・運営 ・予算等の議決 ○校友会積立基金の使用に関する審議方針決定
バドミントン部	50名	○関東学生春季リーグ戦 ・男子第3位：2部残留(2勝3敗) ・女子第2位：2部残留(4勝1敗) ○関東学生春季リーグ団体戦 ・第3位：(2勝3敗)4部残留 ○神奈川学生春季リーグ団体戦 ○神奈川学生春季リーグダブルス戦 ・Cランク準優勝：322(2)シリラス 441(1)伊藤 第3位：412(4)安井 441(4)藤田 ○神奈川学生春季リーグシングルス戦 ・Cランク準優勝：322(2)シリラス 441(1)伊藤 第3位：441(4)藤田 412(4)安井 ○茨城県民総合体育大会バドミントン競技 ・ダブルス第3位：決定戦敗退 ・シングルス2回戦敗退 ○国民体育大会選手選考会	校友会学生会員会	20名	○校友会(運動部)紹介行事の企画 ・運営 ○文化部合同発表会の企画 ・運営 ○古典芸能鑑賞会の企画 ・運営 ○校友会積立基金使用申請方針の決定 ○各校友会の物品購入希望調査 ○各校友会が所有する物品の現況調査
短艇委員会	66名	○練習試合(東京海洋大学) ○海上訓練場における合宿 ○全日本カッター競技大会 ・男子準優勝、女子第7位	新聞委員会	0名	○活動なし
ボート部	38名	○五大学レガッタ ・新人戦KF第2位 ・対抗WIX第4位 ・対抗M8 第4位 ○校外練習(戸田ボートコース、鶴見川漕艇場)	雑誌委員会	3名	○雑誌小原台作成
ヨット部(小型)	17名	○帆走練習(森戸海岸) ○春季関東ヨット選手権大会(予選敗退)	放送委員会	15名	○各種学校行事等の放送支援(入校式典、カッター競技会、校友会各種行事、月例パレード訓練、記念会食、卒業式典等)
ヨット部(クルーザー)	8名	○関東フリートレース	アカシア会	34名	○文化部合同発表会での発表 ○サマーダンスパーティー
山岳部	7名	○GW合宿	自動車同好会	12名	○大井松田レンタルフェスタ ・第4位 ○オートランド千葉練習会 ○練習走行(大井松田カートランド、富士スピードウェイ) ○ラリー選手権オフィシャル ○開校記念祭における展示
ワンダーフォーゲル部	22名	○旧人合宿 ○新歓合宿 ○歩荷合宿 ○秋合宿	模型制作同好会	9名	○文化部合同発表会における作品展示
グライダー部	24名	○久住山岳滑翔大会 ・第18位：211(3)村田 第23位：211(4)笹原			

平成26年度前期校友会活動主要成果及び部員状況

校友会名	部員数	活動状況
写真映画研究部	10名	○各種学校行事等撮影支援(入校式典、校友会各種行事、 カッター競技会、月例パレード訓練、記念会食等) ○文化部合同発表会、開校記念祭での作品展示
コンピュータ研究同好会	13名	○春季基本情報技術者試験 ○文化部合同発表会での発表 ○運動部紹介PV作成
美術同好会	2名	○文化部合同発表会、開校記念祭での作品展示
弁論部	7名	○活動なし。
国際関係論研究部	10名	○文化部合同発表会での研究発表 ○開校記念祭での京都大学とのディベート
軍事史研究部	11名	○文化部合同発表会、開校記念祭での研究発表
防衛学研究同好会	12名	○八王子セミナー ○文化部合同発表会、開校記念祭での研究発表
茶道部	28名	○文化部合同発表会、開校記念祭茶会 ○諸外国士官候補生に対するお手前披露 ○表千家学校茶道夏季研修セミナー
英会話部	7名	○文化部合同発表会での発表
棋道部	27名	○文化部合同発表会、開校記念祭での発表 ○防衛大学校棋道部OB戦 ○秋季関東学生囲碁団体戦 ・第3位：5部残留(3勝2敗) ○秋季関東大学将棋団体戦 ・第12位 ○日露囲碁交流対局
音楽部	29名	○文化部合同発表会、開校記念祭での合唱 ○ハーバード大学とのセッション
軽音楽部	39名	○文化部合同発表会、開校記念祭でのバンド演奏 ○HOTLINE(アマチュアバンドコンテスト)

校友会名	部員数	活動状況
古典ギター部	15名	○文化部合同発表会、開校記念祭での楽曲発表
文芸同好会	11名	○文化部合同発表会、開校記念祭での作品発表
詩吟同好会	2名	○文化部合同発表会、開校記念祭での詩吟発表
書道同好会	4名	○文化部合同発表会、開校記念祭での作品展示
生花同好会	0名	○活動なし
心理研究同好会	8名	○文化部合同発表会での発表
紅太鼓同好会	11名	○文化部合同発表会、開校記念祭での楽曲演奏
ダイビング同好会	37名	○スクーパライセンス取得(OWD×12名 AOW×12名) ○文化部合同発表会での活動発表 ○第1回伊豆遠征
タイ文化研究同好会	21名	○文化部合同発表会での発表 ○開校記念祭でのタイ文化展示及び模擬店出店
韓国文化研究同好会	9名	○文化部合同発表会での発表 ○開校記念祭での韓国文化展示及び模擬店出店
インドネシア文化研究同好会	6名	○文化部合同発表会での発表 ○開校記念祭でのインドネシア文化展示及び模擬店出店
ベトナム文化研究同好会	32名	○文化部合同発表会での発表 ○開校記念祭でのベトナム文化展示及び模擬店出店
モンゴル文化研究同好会	10名	○文化部合同発表会での発表 ○開校記念祭でのモンゴル文化展示及び模擬店出店
カンボジア文化研究同好会	7名	○文化部合同発表会での発表 ○開校記念祭でのカンボジア文化展示
東ティモール文化研究同好会	9名	○文化部合同発表会での発表 ○開校記念祭での東ティモール文化展示





期生会だより

防大19期陸自幹部候補生学校卒業生【陸自幹候56期課程、昭和50年度卒業】のホームカミングデーのご案内について

実行委員長 柴田 幹雄（19期）

昨年末から逐次名簿確認を行って参りましたが、いよいよ平成27年4月19日には幹候56期生【UBIの全課程】のホームカミングデー行事を懐かしい前川原駐屯地の幹部候補生学校創立61周年記念行事に併せ下記により執り行います。ご本人は勿論のこと全国の勤務地をご一緒に回られた奥様も是非同伴の上ご出席して下さい。

記

1 同期生懇親会（前夜祭）

日時 平成27年4月18日（土） 17時30分～20時頃まで
場所 久留米市内ハイネスホテル宴会場

2 幹部候補生学校61周年行事

日時 平成27年4月19日（日） 10時～11時半頃まで
観閲式典に参列し、訓練展示を見学して最後に新築の剛健大講堂前にて集合写真撮影終了後解散します。

3 学校校内または高良山への見学会（検討中）

希望者は4月18日（土）13時30分幹候校に集合し校内見学または正門からバス2台により懐かしい高良山登山競争のコースを見学できるよう目下調整中です。

4 今後の業務

全国の19期生幹部候補生学校卒業生の皆様におかれましては、近隣の同期生へ幹部候補生学校ホームカミングデーの周知にご協力ください。出席者は予めご連絡いただき会費等の事前納入等お願いします。当日の直接参加はご容赦ください。

なお、本行事開催準備に当たり旧陸軍将校と元幹部自衛官の会である公益財団法人「偕行社」からご支援・ご協力を頂いております。

問い合わせ先

榊枝 宗男 携帯：090-6530-4945 E-Mail：sakakieda_muneo@yahoo.co.jp



防衛大学校同窓会ホームページのリニューアルについて

～ネットをつながる「防衛大学校同窓会」～

防衛大学校同窓会事務局広報部長
末次 富美雄（22期・海上）

防衛大学校同窓会ホームページは同窓会活動を支援するツールとして運営してきました。しかしながら、そのデザイン及び構成が他組織のホームページと比較すると「古臭い」、「使いづらい」、「掲載情報が古い」との指摘がなされてきました。このため、平成25年度から2年計画でそのリニューアルを開始いたしました。そのコンセプトは、「会員相互の親睦」、「母校の発展」及び「社会的活動に寄与」という同窓会の設立目的を踏まえ、ホームページを「同窓会の事業活動を支援し、その活動を適時に広報、社会的認知と理解を得るためのツール」と位置付け、「防衛大学校同窓会を象徴するWebデザインの導入」、「情報伝達・交換の双方向性確保」及び「コンテンツ更新の効率化」を図ることとしました。それぞれの細部について説明します。

第一のWebデザインですが、すでに公開しておりますように「防衛大学校ホームページ」や他の学校等のホームページと比較しても遜色のない最新のWebデザインとなっております。特に、最新ニュースにつきましては「Pick up News」として写真付きで紹介するようになっております。

情報伝達・交換の双方向性確保につきましては、新たに「コミュニティサイト」を立ち上げました。同サイトは、従来各地域支部、期生会、校友会OB等が個別に立ち上げ運用していたホームページをより経済的かつ効率的に展開するため、同窓会としてホームページ設置及び運営を支援しようとするものです。これは、期生会や校友会OBとして「ホームページを立ち上げたいがそのやり方が分からない」、「同期同士の情報のやり取りをしたいが連絡先が分からない」というご要望に応えるものです。同窓会本部事務局HP担当者から、それぞれのサイト管理担当者にホームページのテンプレート（ひな形）を提供し、その設置と以後の運営に関するお手伝いをさせていただきます。ホームページにてご案内したところ、既に期生会から9件、地域支部から3件、校友会OBから2件合計14件の申し込みがありました（10月1日現在）。事務局ホームページ担当者がそれぞれ連絡をとり支援させていただきます。現在ホームページを設置して

ない各期生会や校友会OB等からのお申し込みを心からお待ちしております。

次にコンテンツ更新の効率化ですが、従来一人の担当者が実施していましたが更新作業をCMS（Contents Management System）を導入し、複数の人間による更新作業が実施できるようになりました。これにより掲載情報を常に最新とするよう心がけております。

最後に第2期リニューアルとして作業中の「同窓生人材バンク」について申し上げます。同人材バンクは既に各分野で活躍中の防大同窓生を人材バンクとして登録、最近注目を浴びております「安全保障」や「災害対策」等に関し同窓生の知見を広く社会に発信していこうとする取り組みです。講演や投稿を希望される方がホームページの人材バンクリストを参照、それぞれの専門分野等から依頼先を選定し、同窓会事務局がその仲介を実施することを運用コンセプトとしております。現在ホームページにて登録希望者を広く募集しており、本年末公開を目指しております。

防衛大学校同窓会ホームページリニューアルの現状について説明させていただきましたが、ホームページは同窓会事務局だけが作成するものではありません。同窓生一人一人の積極的な情報発信や参画が不可欠です。また、リニューアル作業そのものは26年度で終了いたしますが、「フォトギャラリー」等まだまだ充実させなければならないエリアもあります。同窓会事務局広報部としては従来の枠にとらわれない自由な発想のもとホームページの充実に努めてまいりたいと考えております。同窓生皆様方のご忌憚のないご意見を是非ともよろしく願い申し上げます。

*同窓会ホームページはURL：<http://www.bodaidsk.com/>ですが、インターネット上で「防衛大学校同窓会」と入力していただければ簡単にご覧いただけます。お気軽に、同窓会の今をお楽しみください。

機関誌 電子版「小原台だより」への投稿のお願い

平成26年度機関誌「小原台だより」は、ご投稿頂きました方々及び取材に応じて頂いた方々のお蔭をもちまして発行する事が出来ました。この場を借りまして厚く御礼申し上げます。ご承知のように、「小原台だより」は、同窓会会員の皆様方からの投稿記事無しでは成り立ちません。現役自衛官や退職自衛官等の様々な分野でご活躍の様子が、同窓会会員各位の啓発に役立っております。「小原台だより」を益々充実発展させるためには、皆様方からの積極的な記事の投稿が望まれます。

さて、これまで会員の皆様に冊子として配布してまいりました「小原台だより」は、今回発行の第22号をもちまして最後となります。御存知のとおり、冊子による配布「小原台だより」は、同時に防衛大学校同窓会ホームページ（以下「同窓会HP」という）(<http://www.bodaidsk.com/>)にPDFファイルとして閲覧できるようにしてまいりました。この同窓会HPにおける同窓会機関誌閲覧の考え方をさらに推し進めた編集要領が電子版「小原台だより」です。

平成27年度以降の「小原台だより」（第23号以降）は、当初より同窓会HP上に電子版「小原台だより」を編集することを前提に作成し、ネット空間を通じて皆様の記事をお届けします。広報部一同、新たな時代の同窓会機関誌を鋭意、作成して参りますので、奮ってご投稿の程、お願い申し上げます。

電子版「小原台だより」になります関係上、これまでの様な印刷製本等のための期限は生じません。このため、投稿に係る事前通知、投稿締切期日等は設けておりません。何時でも随時、以下の要領でご投稿いただけます。

平成27年度機関誌『電子版「小原台だより」』の投稿要領は次のとおりです。

<投稿要領>

投稿原稿：A4縦使用・横書きで、文字サイズ12Pとし、2,000文字（挿入写真の分を含む）を基準とし、投稿者の顔写真を添付

投稿方法：メール (kouhou@bodaidsk.com) 又は、USB等で。

機関誌担当：同窓会本部事務局広報部：杉谷 元（24期・航空）

同窓会本部移転のお知らせ

防衛大学校同窓会本部は、これまで所在していた共済1号館の賃貸契約が平成26年度限りで打ち切られることに伴い、平成26年11月1日をもって新事務所（〒162-0845 東京都新宿区市谷本村町3-19千代田ビル101号室）に移転しました。

新事務所は、旧事務所同様に防衛省正門の間近であることに加え、各種会議、会合、談話、休憩等にも空間の提供が可能となりました。

同窓生の皆様のご利用をお待ちしております。

利用申込、質問等は、メール (info@bodaidsk.com) 又は電話 (03-6265-3416) で同窓会本部まで御連絡いただけますようお願い申し上げます。



平成25年度防衛大学校同窓会決算書

平成26年3月31日現在
〔単位：円〕

区分	事業等	25年度予算額	25年度決算額	備考		
一般事業	収入					
	会費	20,713,000	22,223,600	413名*0.85⇒新規369名、個別7名		
	預貯金利息	550,000	387,492	国債利金の減		
	雑収入	869,000	1,127,010	懇親会費1,030,000円		
	その他	0	0			
		収入合計 (①)	22,132,000	23,738,102		
	支出	1 新入生に対する講話	5,000	0	交通費は防大負担	
		2 各種競技会支援	400,000	443,410	メダル数増加	
		3 期生会発会等支援	300,000	294,956	卒業ダンスパーティー中止	
		4 学生の部隊実習支援	1,210,000	1,249,113	対象者513名	
		5 顕彰碑顕花式支援	350,000	264,775		
		6 開校祭支援	1,700,000	1,607,450		
		7 校友会対外活動支援	800,000	738,525		
		9 学術向上策支援	90,000	236,880	優秀研究レポート5作品⇒15作品(陸、海、空別)	
		10 留学生学業基盤整備支援	260,000	360,210	支援留学生の増	
			小計 (②)	5,115,000	5,195,319	
		会員相互の親睦交流	11 機関誌の発行	1,100,000	831,667	
			12 同窓会ホームページの運営	280,000	2,486,998	HPリニューアル2,364,600円
			13 会員の慶弔業務	1,000,000	330,545	
			14 各種競技大会による交流	230,000	205,150	
			15 地域支部等への助成	550,000	211,140	7個支部
			16 卒業留学生との交流	230,000	0	事業中止
			17 HVD支援	320,000	309,750	37期生会
			18 HCD支援	350,000	407,234	15期生会
			19 講演会・懇親会の実施	2,760,000	3,317,668	明治記念館使用料・懇親会費、講演料
		小計 (③)	6,820,000	8,100,152		
	社会活動への寄与	21 安全保障講座支援	100,000	100,210		
		小計 (④)	100,000	100,210		
	会務運営基盤の充実	22 代議員会の実施	700,000	762,965	代議員旅費の増	
		23 同窓会名簿の維持	50,000	58,014		
		24 期生会名簿の作成支援	120,000	6,700	13期・30期生会	
25 期生会等との連絡網の整備		0	0			
26 期生会等のHP開設助成		60,000	940			
27 地域支部等の設立支援		100,000	199,200	旅費の増(島根等)		
28 会費納入の促進		400,000	332,325			
小計 (⑤)		1,430,000	1,360,144			
検討	29 法人化の検討	0	0			
	30 機関誌の発行のあり方検討	0	0			
	31 資産管理の在り方検討	0	0			
	小計 (⑥)	0	0			
維持管理	事務費	800,000	1,092,953	同窓会記章：577,500円、PC更新		
	通信費	550,000	522,622			
	交通費	400,000	513,290			
	会議費	120,000	158,696			
	事務員費	1,300,000	1,322,520			
	事務局室賃貸費	2,800,000	2,776,382			
	小原台事務局運営費	100,000	118,130	PC更新		
	小計 (⑦)	6,070,000	6,504,593			
支出計 (⑧=②+③+④+⑤+⑥+⑦)	19,535,000	21,260,418				
予備費 (⑨)	2,597,000	0				
支出総計 (⑩=⑧+⑨)	22,132,000	21,260,418				
50周年記念事業	収入					
	積立金の取り崩し	250,000	250,000			
		収入合計 (⑪)	250,000	250,000		
	自体事業	記念講演	0	0	24年度代議員会において実施	
		記念祝賀会	0	0	23年度(中止)	
		同窓会旗の制定	0	0	22年度(実施済)	
		「小原台だより」特集号発刊	0	0		
		歴代校長の式辞集作成	0	0		
		同窓会業務史の整備	0	0	22年度(実施済)	
		東日本大震災被災者支援	0	0	計画外(実施中)	
		予備費	250,000	83,390	「展示ケースの追加工事」	
	小計 (⑫)	250,000	83,390			
	地域支部支援事業	地域支部支援事業	0	0		
		小計 (⑬)	0	0		
母校支援事業	記念品の寄贈	0	0			
	「防衛の務め」復刻支援	0	0	21年度(実施済)		
	小計 (⑭)	0	0			
支出合計 (⑮=⑫+⑬+⑭)	250,000	83,390				
収入総計 (⑯=①+⑪)	22,382,000	23,988,102				
支出総計 (⑰=⑩+⑮)	22,382,000	21,343,808				
実質的な積立金への繰り入れ額 (⑱=⑯-⑰-⑪)	-250,000	2,394,294				

会費納入状況

平成26年11月1日 現在

期別	会員数	完納者数	完納率%	未完納者数				期別	会員数	完納者数	完納率%	未完納者数			
				陸	海	空	計					陸	海	空	計
1	339	320	94.4	11	6	2	19	30	410	346	84.4	47	11	6	64
2	359	347	96.7	8	2	2	12	31	431	409	94.9	15	6	1	22
3	484	452	93.4	17	12	3	32	32	404	354	87.6	31	13	6	50
4	465	437	94.0	20	7	1	28	33	447	376	84.1	44	19	8	71
5	529	483	91.3	26	11	9	46	34	426	373	87.6	38	9	6	53
6	477	433	90.8	36	5	3	44	35	496	479	96.6	9	5	3	17
7	503	460	91.5	29	7	7	43	36	354	345	97.5	6	2	1	9
8	467	421	90.1	33	8	5	46	37	384	347	90.4	16	7	14	37
9	498	447	89.8	35	6	10	51	38	337	264	78.3	59	10	4	73
10	498	456	91.6	25	8	9	42	39	356	328	92.1	8	11	9	28
11	495	448	90.5	28	8	11	47	40	388	329	84.8	33	21	5	59
12	466	417	89.5	29	8	12	49	41	405	365	90.1	23	14	3	40
13	468	422	90.2	30	8	8	46	42	407	366	89.9	19	12	10	41
14	491	459	93.5	18	2	12	32	43	431	385	89.3	23	15	8	46
15	463	449	97.0	9	3	2	14	44	381	222	58.3	116	39	4	159
16	428	405	94.6	9	4	10	23	45	351	159	45.3	131	20	41	192
17	498	454	91.2	20	10	14	44	46	360	237	65.8	67	7	49	123
18	423	397	93.9	9	7	10	26	47	388	338	87.1	32	11	7	50
19	446	422	94.6	12	10	2	24	48	425	378	88.9	23	12	12	47
20	383	352	91.9	17	3	11	31	49	325	294	90.5	26	4	1	31
21	489	468	95.7	12	3	6	21	50	369	320	86.7	27	13	9	49
22	474	418	88.2	27	9	20	56	51	411	371	90.3	16	13	11	40
23	408	386	94.6	8	8	6	22	52	415	346	83.4	15	23	31	69
24	446	414	92.8	8	17	7	32	53	431	384	89.1	21	21	5	47
25	422	400	94.8	10	4	8	22	54	364	331	90.9	14	8	11	33
26	506	467	92.3	26	7	6	39	55	397	370	93.2	12	10	5	27
27	388	377	97.2	8	1	2	11	56	372	355	95.4	16	0	1	17
28	451	421	93.3	17	8	5	30	57	413	369	89.3	23	15	6	44
29	391	358	91.6	16	7	10	33	58	434	381	87.8	26	18	9	53

※会員数：会費納入対象者数（留学生を除く防大卒業生数）

会費納入のお願い

防衛大学校同窓会事務局長 酒井 健

平成26年度も新しく同窓会員になられた防衛大学校58期生の皆様から会費のご納入を頂きました。衷心よりお礼申し上げます。

また、その他の期の皆様におかれましても会費納入率向上のため、各期生会長及び代議員をはじめとする同窓会員の皆様にご助力を賜り、全体としての納入率は徐々に向上してきていますことに対し、重ねて御礼申し上げます。

同窓会本部事務局では、「会員相互の親睦、母校の発展及び社会的活動に寄与する」という同窓会の目的を達成するために必要な経済的な基盤を確固たるものとするべく、平成18年度から各幹部候補生学校等を訪問するなどして会費納入の促進に努めております。

会費未納の方（本部事務局で把握しておりますので下記連絡先までご連絡をお願い致します。）におかれましては、同窓会活動の趣旨をご理解頂き、是非とも会費を納入して頂きますよう、宜しくお願い申し上げます。

【納入先】 ゆうちょう銀行

口座番号 00260-5-□□24826(百万及び十万の桁は無記入)

加入者名 防衛大学校同窓会

通信欄 振込者氏名、住所、期別、要員別及び部隊名(現役の場合)を記入

※払込料金は本部事務局が負担致します。

【納入先】 三井住友銀行：飯田橋支店

口座番号 1270680

加入者名 防衛大学校同窓会 代表 佐々木俊也

※振込手数料は振込額から控除して下さい。本部事務局が負担致します。

また、銀行振込の場合は、納入者の確認及び完納証等の発送のため、必ず振込者氏名、住所、期別、要員別、部隊名(現役の場合)及び振込期日をe-mail/Tel/Faxにより下記連絡先までご連絡下さい。

【連絡先】 同窓会本部事務局

〒162-0845 東京都新宿区市谷本村町3-19 千代田ビル101号室

Tel/Fax : 03-6265-3416 e-mail : info@bodaidsk.com

【参考】

普通会費

・防大本科卒業生

卒業時の3尉俸給月額(1号俸)の1/4(千円未満切捨)

・防大研究科卒業生(一般大学卒業生)

卒業年度の3尉俸給月額(1号俸)の1/8(千円未満切捨)

延滞金 1,000円×(完納年度-3尉任官年度又は研究科卒業年度)
(根拠:防衛大学校同窓会会費に関する細則)

※未納者の会費納入額算出例

45期生で過去に分納がない場合

普通会費 60,000円、完納 平成26年度(平成27年3月31日まで)

3尉任官 平成13年度(14年3月)

平成26年度納入額 60,000円+1,000円×(26-13)=73,000円

(詳細は同窓会本部事務局までお問い合わせ下さい。)

※平成27年4月1日以降に納入した場合、更に延滞金1,000円が加算されます。

同窓会名簿管理に関するお知らせ

I 名簿の維持管理

会員名簿は各種同窓会活動の基盤となるものであり、同窓会事務局としましては出来るだけ最新のデータの確保と厳正な維持管理に努めております。データの確保については、主として以下の要領で実施しておりますので、会員の皆様のご協力をお願い致します。

1 各期生会からの通知

個人情報保護法制定等を受け関係各所からのデータ収集が難しくなったことから、名簿の修正は、平成16年度から各期生会代議員に、平成19年度からは各期生会業務幹事に対して、例年8月の定期異動後をお願いしております。

平成21年度からは電子メールの活用を図り、期生会との連携の強化を図りつつデータの収集に努めさせて頂いております。

業務多忙にも拘らず担当して頂いた皆様、ご協力有難うございました。

2 会員個人からの通知

同窓会ホームページ上の「異動連絡」の項は、削除致しました。今後は同窓会事務局へ電子メール（jinji@bodaidsk.com）または電話等での連絡をお願いします。

II 利用目的及びプライバシーポリシー

1 利用目的

次の目的で皆様の個人情報を利用又は提供します。

- (1) 同窓会各種事業推進のための連絡
- (2) 機関誌「小原台だより」の発送
- (3) 会員の慶弔の実施
- (4) 期生会、校友会、教務班等各種活動への協力
- (5) 地域支部等への協力

2 プライバシーポリシー

以下のプライバシーポリシーに従い個人情報の適切な保護に努めております。

- (1) 利用目的の範囲内で収集、管理します。
- (2) 会員皆様の承諾なしに目的外の利用及び提供はしません。
- (3) 会員の皆様が、個人情報の照会、修正、削除等を希望される場合は、速やかに対応します。（同窓会事務局人事部担当にご連絡下さい。）
- (4) 個人情報へのアクセス、破壊、改ざん及び漏洩の無いように適切に管理します。

同窓会本部・支部等の役員紹介

平成26年11月1日現在

平成26年度同窓会本部役員

会長	永岩 俊道	15	空	総務部長	福盛 裕一	22	陸	事業部長	島田 正登	22	海
副会長	折木 良一	16	陸	総務部長補佐	山下 俊司	22	空	事業部長補佐	早坂 正	23	空
副会長	赤星 慶治	17	海	総務部長補佐	藤井 貞文	23	陸	事務部長補佐	渡邊 一弘	23	陸
副会長	永田 久雄	17	空	総務部長補佐	大津 雅紀	23	海	事業部 HCD/HVD	早坂 正	23	空
副会長	河野 克俊	21	海	総務部	本庄 俊弘	24	陸	事業部 HCD/HVD	高橋 均	24	海
理事兼事務局長	酒井 健	19	陸	総務部	渡邊 和博	24	空	事業部 囲碁・留学生	渡邊 一弘	23	陸
理事	高嶋 博視	19	海	人事部	吉永 春雄	22	陸	事業部 囲碁・留学生	菅田 雅之	24	陸
理事	渡邊 至之	20	空	人事部	早川 昌男	23	陸	事業部 テニス・助成	宮崎 礼二	23	陸
理事	山本 洋	21	陸	人事部	宮本 泰夫	23	空	事業部 テニス・助成	池川 昭司	24	空
理事	生天目 章	17	空	人事部	進藤 進	24	陸	事業部 ゴルフ/講演	神田 政晴	23	空
理事	清田 安志	29	陸	人事部	原田 哲郎	24	海	事業部 ゴルフ/講演	木村 孝	24	空
理事	菊地 聡	28	海	広報部長	末次富美雄	22	海	小原台事務局長	引田 淳	31	空
理事	荒木 文博	28	空	広報部長補佐	森本 澄男	22	陸	小原台事務局長代理	中澤 信一	28	海
会計監事	塚田 章	19	陸	広報部長補佐 機関誌	杉山 伸樹	23	空	小原台事務局長補佐	大西 健介	36	空
会計幹事	佐藤 秀樹	20	陸	広報部長補佐 HP等	永岩 一郎	23	海	小原台事務局長補佐	高田 博光	28	空
会計監事	持田 清久	17	海	広報部 機関誌	杉谷 元	24	空	小原台事務局長補佐	内田 貴司	28	空
会計監事	戸田 友敬	20	空	広報部 HP/MCI	新居 久桂	24	陸	小原台事務局長補佐	宮本 美緒	48	空
				広報部 HP/MCI	土谷 正明	24	海	事務局員	茂泉 勝	30	海
				広報部技術指導	村田 和美	17	陸	事務局員	関口 高史	32	陸
				経理部長	道 憲之	22	空	事務局員	吉野 順也	33	陸
				経理部長補佐	佐々木俊也	23	海	事務局員	佐藤 靖倫	38	陸
				経理部	深山 元延	24	陸	事務局員	妹尾 研作	41	陸
								事務局員	原野 博文	45	空
								事務局員	工藤 信弥	45	空

平成26年11月1日現在

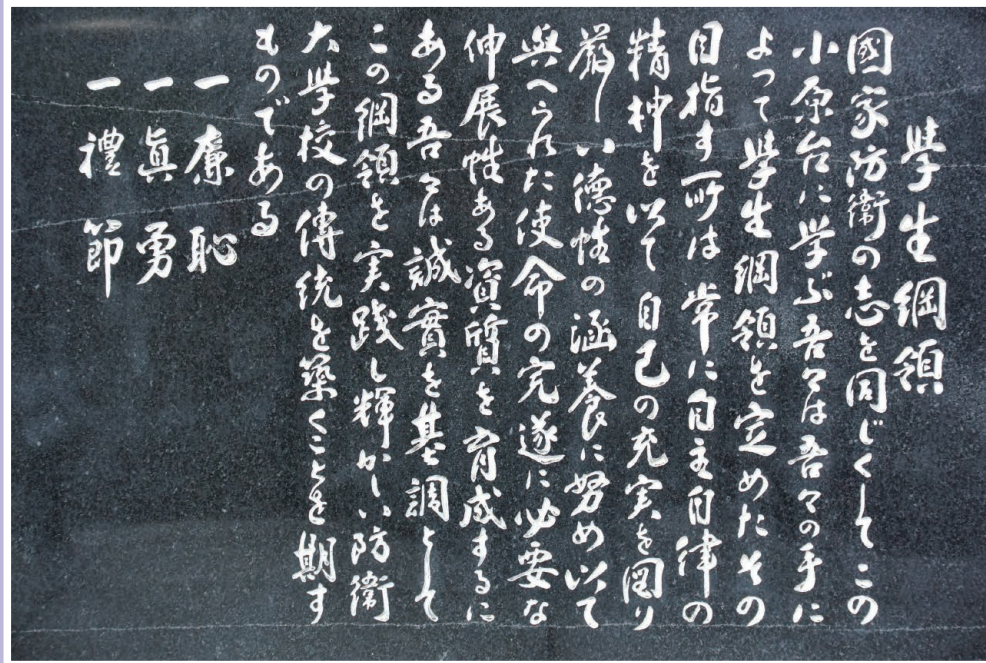
地域支部等役員

北海道地域支部	支部長	穴口 一男	9	陸	山口地区支部	支部長	高橋 佳嗣	11	陸	熊本地区支部	支部長	斉藤 四郎	9	陸
	事務局長	前田貞一郎	30	陸		事務局長	神田 和穂	14	陸		事務局長	森 三千雄	10	陸
東北地域支部	支部長	吉川 洋利	14	陸	四国地域支部	支部長	青木 初年	9	空	大分地区支部	支部長	亀井 重義	11	陸
	業務幹事	原田 富雄	17	陸		事務局長	松浦 孝昇	7	陸		事務局長	工藤和信	16	陸
栃木地区支部	支部長	大内 伸浩	10	陸	徳島地区支部	支部長	青木 初年	9	空	宮崎地区支部	支部長	小森 四雄	12	陸
	理事兼事務局長	正岡富士夫	15	空		事務局長	清水 祥人	12	陸		事務局長	二宮 成一	14	陸
群馬地区支部	支部長	石橋 輝治	5	陸	香川地区支部	支部長	戸松 久忠	6	陸	鹿児島地区支部	支部長	増田 克己	12	陸
	事務局長	小島 健二	14	空		事務局長	松浦 孝昇	7	陸		事務局長	兒玉健二郎	22	陸
北陸地区支部	支部長	濱谷 隆平	6	陸	高知地区支部	支部長	岡林 靖之	8	海	沖縄地域支部	支部長	山縣 正明	14	陸
	事務局長	西川 清	15	陸		事務局長	川田 公一	16	空		事務局長	田口 佑二	47	空
東海地区支部	支部長	赤谷 信之	13	陸	愛媛地区支部	支部長	赤岡 順	4	陸	小原台クラブ	支部長	大段 和彦	17	海
	事務局長	木原 文雄	13	陸		事務局長	瀬川紘一郎	10	海		事務局長	山田 耕平	40	空
関西地域支部	支部長	盛田 節生	13	空	九州地域支部	支部長	西村 長治	13	陸	桜華会	会長(支部長)	塚口 千枝	40	陸
	事務局長	新見 泰朗	17	陸		事務局長	松尾 隆二	15	陸		事務局長	吉田ゆかり	40	空
岡山地区支部	支部長	高橋 正憲	6	空	福岡地区支部	支部長	西村 長治	13	陸					
	業務幹事	永岑 富彦	10	陸		事務局長	松尾 隆二	15	陸					
広島地区支部	支部長	加藤 紀夫	15	海	佐賀地区支部	支部長	森永 康則	13	海					
	事務局長	森田 寧	17	海		事務局長	福岡龍一郎	26	陸					
					長崎地区支部	支部長	高橋 理一	16	海					
						事務局長	樋口八洲太郎	10	海					



施風に舞う花卉のごとく攻め
富士の山のごとくドッシリと守る！
(棒倒しの攻防)

編集：杉山 伸樹(23期・航空)
印刷：株エイコープリント



防衛大学校学生綱領

防衛大学校同窓会本部連絡先

〒162-0845 東京都新宿区市谷本村町3-19
 千代田ビル101号室
 TEL・FAX 03-6265-3416
 E/M : info@bodaidsk.com